

活亂
法捕

柔術教科書

全

免許井口義島著

柔術教科書序

十八般の武藝は皆物具を要す獨り柔術に至ては一具の用なく赤手以て不慮の難に備ふるに足る要するに武術は一身の護りたりと雖も之を大にしては一國の護りたり輓近武士道衰頽し又昔日の如くならず奢侈遊惰の潮流滔々として濫亂し殆んど底止する處を知らず豈長大息の至ならずや井口氏茲に憾あり以て此書を編す世の青年子

弟業務の餘暇之を試み朝に習ひ夕に復し勤むるの精に至らば斯道の妙處を會得せんこと一點の疑を容れず請ふ許多の青年輩此書に依て柔道の正路を蹈み其身體を健全にし局面一轉尙武の氣風を旺盛ならしめんことを茲に一言を記して以て序と爲す

大正元年十月上旬

北 雷 狂 夫 識

自 序

柳枝の風に靡くも折るゝこと無きは柔能く剛を制するの理にして柔の奥儀も亦茲に基く故に柔道を學ぶ者は須らく虚心平氣以て自然の理に従ひ日新の工風を最も肝要とすべし予曩に吉田千春久富鐵太郎齋藤明信等の先生と謀りし事の柔術劍道に關する書數部を編し青年輩の獨學に便す頃日又諸彦より亂捕法の書の著あらんことを望まるとや切なり然れども予歲既に耳順に達し燈下書を編するに

懶し辭するに若かずと已にして思へらく余命幾許も無しと雖ども豈碌々として死を俟たん宜しく己れの知得せるものを他人に示さば鈍刀亦一割の功なからんやと茲に於て講道館及諸先生と謀り其術は新を撰み實を取り其説明は煩を避け簡を旨とし俗談平話一に會得し易からんことを要とし以て此書を編す請ふ看官坊間に流布せる似而非的武術書と一様の觀を爲すなからんことを

次序

今回予が著す處の柔術教科書は本年議會に專習科に加へられたるを以て今之に順序を立て初心の輩に示し更に亂捕の形を斯道熱心者の爲に手を以て教ふる如く圖畫を加へて説明し又呼吸術より殺活方をも圖解にし中學校以上の學生其他の青年輩の爲め實地經驗の上にて梓に上し以て參考書とすされば各流派はあれども皆大同小異なるを以て柔道の概略は此書によりて會得すべし尙又茲に洩れたるものは他日教師用の書として之を著し又諸流の形の書とも併せて發行せんと欲す本篇既に云ふ如く斯道の名人上手は漸々に故人となり古來の武術は殆んど有名無實に流れ各流祖の功勞も將に消滅に歸せんとするは實に遺憾のことゝいふべし又古へより一子相傳の極意と稱し秘して人に傳へず徒らに舊習を墨守せる者も亦なきにしも非らず是等は啻に時世に背くのみならず國家に忠ならざるもの也今や舊習一洗十八般の

武藝の奧秘を明々白々説明し滿天下の青年輩をして武術の何たるを解さしめ其體力を壯健にし皇國特有の日本魂を益々發揮し一等國の名に背かざらんことを期し併せて各流祖の功勞に報はずんばあらず頃日德島縣川口郡柿原村松下某より關口流の秘訣古書を寄送されたるを本とし各流秘術の寄書を合し不日世間に紹介の勞を取らんと欲す

大正元年十月

免許義爲識

亂捕活法柔術教科書目次

柔術の起源	一	沈着を守る事	一八
柔術大意	二	眼の配りの事	一九
柔能く剛を制するの理由	三	掛聲を大切とする事	二〇
柔術の形を學ぶを必要とする事	四	殘心放心と云ふ事	二〇
武藝進歩に付三妻の心得	六	他流試合の心得の事	二一
術を學ぶの心得	八	稽古に相手を忌み嫌ふ事	二三
氣の滿つる事	九	強情は武藝の大惡と云ふ事	二四
氣と體との事	一一	稽古前後の心得	二四
弱身強壯に成るは柔術にあり	一二	精神と態度の事	二五
武術に免許皆傳と云ふ事	一三	同解	二六
一心と云ふ事	一四	陰陽強弱之説及一身の心を論ずる事	三〇
無我無心の位の事	一五	心の割出五系の圖解の事	三一
不動心の位の事	一六	道場及勝負見所の事	三三
膽力を練磨する事	一七	體育より柔術に進むの心得	三四
		舊式稽古衣の圖解	三六
		新式稽古衣圖解	三六

柔術教書	柔術教書
體育體操法第一圖解……………	四〇
同第二圖解……………	四一
同第三圖解……………	四三
柔術打込の圖解……………	四四
柔術片手受の圖解……………	四五
同兩手受留の圖解……………	四七
柔術霞打込の圖解……………	四八
柔術突掛の圖解……………	五〇
同向へ返り第一圖解……………	五二
同第二圖解……………	五二
同第三圖解……………	五九
柔術逆立の稽古第一圖解……………	五九
同第二圖解……………	六〇
同第三圖解……………	六二
柔術車返り第一圖解……………	六三
同第二圖解……………	六五
同第三圖解……………	六七
柔術飛上り稽古圖解……………	六八
同第二圖解……………	六九
柔術眞之位第一圖解……………	七一
同第二圖解……………	七二
同第三圖解……………	七四
同第四圖解……………	七五
同第五圖解……………	七六
右襟の取り様の圖解……………	七八
同逆の圖解……………	七八
左襟の取り様の圖解……………	七八
同逆の圖解……………	七九
帶捉み處の圖解……………	七九
同逆捉みの圖解……………	八〇
喉締の圖解……………	八〇
亂捕禮式立合の圖解……………	八〇

柔術教書

雙方立ち上り圖解……………	八四	柔術行連の投第一圖解……………	一〇七
襟取り居る圖……………	八四	同第二圖解……………	一一〇
柔術足拂の圖解……………	八五	柔術引込業圖解……………	一一一
柔術釣鐘足拂圖解……………	八七	柔術首投の圖解……………	一一三
同第二圖……………	八九	柔術蹴落し圖解……………	一一五
柔術外掛足拂圖解……………	九〇	柔術透き落し圖解……………	一二七
柔術引込足拂圖解……………	九一	柔術裏股拂圖解……………	一二九
柔術押附足拂の圖解……………	九三	柔術横車圖解……………	一二〇
柔術内踝拂圖解……………	九五	柔術矢倉落第一圖解……………	一二二
柔術大内股投圖解……………	九六	同第二圖解……………	一二三
柔術内股投圖解……………	九八	柔術背負投第一圖解……………	一二五
柔術外股投圖解……………	一〇〇	同第二圖解……………	一二八
柔術膝挫圖解……………	一〇一	同第三圖解……………	一二八
柔術拂足圖解……………	一〇三	同第四圖解……………	一二九
柔術右跳腰の圖解……………	一〇四	柔術衣被投圖解……………	一三二
同左跳腰の圖解……………	一〇六	柔術眞捨身第一圖解……………	一三四

柔術真捨身第二圖解	一三五	柔術右入腰投第一圖解	一五九
同第三圖解	一三七	同第二圖解	一六〇
同第四圖解	一三八	柔術左入腰圖解	一六一
柔術立捨身投圖解	一四〇	柔術大腰投第一圖解	一六三
柔術橫捨身投第一圖解	一四二	同第二圖解	一六四
同第二圖解	一四四	柔術右抱落投第一圖解	一六五
柔術蟹袂投圖解	一四五	同第二圖解	一六七
柔術俵返圖解	一四六	柔術左抱き落第一圖解	一六八
柔術背負落第一圖解	一四八	同第二圖解	一六九
同第二圖解	一五〇	同第三圖解	一七一
柔術山嵐投第一圖解	一五一	柔術卷落圖解	一七二
同第二圖解	一五二	柔術卷込投圖解	一七三
柔術手操投第一圖解	一五四	柔術後腰圖解	一七五
同第二圖解	一五六	柔術移腰圖解	一七六
柔術腰投第一圖解	一五七	柔術釣腰圖解	一七八
同第二圖解	一五八	柔術腰固圖解	一七九

柔術教科書

柔術肩車第一圖解	一八一	柔術喉頭固圖解	二〇四
同第二圖解	一八三	柔術締込逆手の圖説明	二〇五
柔術隅返し臥業圖解	一八四	柔術左片胸捕締圖解	二〇六
同繰り隅返圖	一八六	同右片胸捕締圖解	二〇六
柔術達摩返圖解	一八七	柔術片胸解き圖解	二〇八
柔術引込返圖解	一八九	柔術突込圖解	二一〇
柔術橫落圖解	一九〇	柔術右腕挫圖解	二一一
柔術橫掛崩圖解	一九一	同左腕挫圖解	二一三
柔術跳越圖解	一九三	柔術胸挫圖解	二一五
柔術固業の解説	一九四	同第二圖解	二一七
柔術連固投の圖解	一九五	柔術小手絨圖解	二一八
柔術襟四方固圖解	一九七	柔術膝固圖解	二一九
柔術腰四方固圖解	一九八	柔術胴締圖解	二二一
柔術横四方固圖解	一九九	柔術足絨圖解	二二三
柔術袈裟固圖解	二〇一	柔術足挫圖解	二二四
柔術抱き返し圖解	二〇二	柔術締絞業解説	二二六

柔	術	教	科	書
柔術十字絞圖解	二二六	松風、村雨、臆中、鴈下	二四四
同雙十字圖解	二二八	稻妻、水月、明星	二四五
柔術緩絞締圖解	二三〇	陰囊、向骨、草靡	二四六
柔術右後絡圖解	二三一	内外踝、早打、活	二四七
同左後絡圖解	二三三	電光、後稻妻、下閨	二四八
柔術裸體捕圖解	二三四	尺澤、柔術活法の心得	二四九
柔術當身の解説	二三六	人工呼吸術第一圖解	二五〇
同正面の圖	二三八	同其の二圖	二五二
同後面の圖	二三九	人工呼吸術	二五五
同當身圖解	二四〇	同第二其の二圖	二五八
同正面の部圖解説	二四〇	同呼吸術の秘法	二六〇
同後面の部圖解説	二四〇	誘活法の圖解	二六〇
天倒	二四一	同第二圖	二六二
烏兎	二四一	同第三圖	二六三
人中、カツコン、霞	二四二	誘又の活法圖解	二六四
兩毛、獨古、秘中	二四三	襟活法圖解	二六五

柔	術	教	科	書
陰囊活法圖解	二六八		
同第一圖	二七〇		
同第二圖	二七一		
同第三圖	二七二		
裏活法圖解	二七三		
同圖說	二七四		
淺山一傳流活法	二七五		
同圖說	二七六		
末書に加へて	二七七		

亂捕活法 柔術教科書

免許 柳松齋 井口 義爲 著

柔術の起源

凡そ柔術は支那に起りて我國に傳りしものなるべし。去れはに
 明の萬曆年中に刊行せる萬法全書中にも、劍鉞槍棒、弓、柔術等の圖
 畫を加たる者あり。我朝にては天文年中作州津山波賀村の人竹
 内中務大輔久盛なる者此術を修練し、小具足捕手と號け、遂に一派
 を開く、之を竹内流と云ふ。久盛修驗道を以て諸國を遍歴し到處
 に此術を教授し、子孫にも亦之を傳へり。今猶中國筋にては往々
 此流の形を見ることあり。其後永祿年間支那より陳元賓と云ふ
 者來り武州江戸現今の東京麻布の國正寺に寓居し此術を教ふ事

柔術大意
三浦義辰、福野正勝、磯貝次郎、左衛門の三氏其門に入り、各々奥儀を極む。殊に三浦、福野の如きは遂に一機軸を出し、別に一派を編出し、て之を世に擴む。是れ我朝に於て中古柔術の祖と傳稱す。其門人漸次増加して、各自一派を開き、即ち現今に於ては三四十の流派あり。然して其の亂捕に至りては、大抵他派と試合を爲すも、劍道の面、胴、小手、突と云ふ如く、又書道を學ぶに初めいろはを以てする、と、同じく殆んど同一の形を演ず、又柔道亂捕にては腰、手、足、締逆の業を多く用ふるにより、後進者には是等の形を圖に示し、以て一般の教科書と爲せり。されば苟も此道に志ある者は必ず之を熟讀翫味し、之に就て學び、怠らざるときは、現時勇名を轟かせる講道館の八段横山作次郎、山下義昭、兩氏の如き技量に至らざるの理なしと心得べし。餘は教師用の著書に明記す。

柔術大意

柔術の大意は柔能く剛を制するの理にして、武術中一種特別の技術なり。故に此理を會得するときは、彼劍術の如く、木刀、竹刀、面、胴、小手の道具を用ひず、赤裸無手、只自體四肢の活動に依り、如何なる剛強の者に出會するも、直に之を取つて押へることを得るの術たり。されば常に此道を研磨して、時に臨んで不覺を取らざる様にすべし。諸て此道を學ぶには、男女を問はず、十二三歳より二十六歳迄の間を以て最も適當の期なりとす。故に初め此書に依り、稽古を爲すこと久しき時は、自然と悟り得るなり。
文運日に進み、大平の恩澤に浴する今日といへども、惡漢等に出遇ふこと無しとも計り難し。故に人々は充分此術を會得し、身體を健全にし、其機に臨み、能く敵を制し、不意の凶事を防禦するは最も肝要なることと知るべし。

柔能く剛を制するの理由

柔道の形を學ぶを必要とする事

柔術を會得し得る時は如何なる剛敵無法に出遇時も決して怖るるの念を生ぜず心神沈着にして亂れざる故に其敵に打勝つものなり。又一見敵の形狀弱きに見ゆることあるも決して侮り輕んずべからず先づ敵に如何なる技量あるかを知らしむることを肝要とす、されば常に其業を練磨して其妙味を解する時は假令多勢の惡漢又は強敵に出遇ふも單身能く之を制することを得るものなり。假令は大船の水上に行くが如く數人の乗客あるも一人舵機を操つる時は其の欲する處に到達し得るが如し。柔道は亦多數の強敵あるも只一人にて之を操つること舟子の舵機を操つると同一の理なりと知るべし、然れども是を施すに於ては其術の巧拙に係るなれば常に怠らず専心其技を研究すべし。

柔道の形を學ぶを必要とする事

柔道も亦流派あり其流儀に依つて必ず其流儀の形有斯道の元祖

と稱せらるゝ人は種々他流の形を見或は教導口授を受けて遂に一流を組立つるものなり、即ち天神眞楊流の元祖磯又右衛門先生は始め楊心流を學び次に眞之神道流を合して一機軸を出し遂に天神眞楊流と號する一派を弘む。又楊心流元祖は長崎の人に秋山四郎兵衛と曰ひて小兒科の醫師なりしが醫學修業の爲め支那に渡りし際博轉と云ふ支那人に就きて柔術の形三手を學び得たり。

當時支那に於ては唯蹴ると突くとの形を専門とし日本の柔術とは大に違へり。秋山氏は僅かに三手の柔術形を熟練し更に活生法二十八種の傳授を受け歸朝の後之を人に傳授す然れども其手形少なき故を以て練習する者大抵半途にして廢止す。秋山氏大に之を歎き筑紫太宰府の菅廟に祈願を罩めて形手の工風を凝らし遂に三百三手を編み出したりと云ふ。又神廟の前に柳の大樹有り大雪の際に其枝に雪の積まざるを感悟して遂に楊心流と

武藝進歩の心得
 號する一派を開く。又神道流元祖は大阪城の同心山本民左衛門と云ふ人此楊心流を學び亦工風を凝し分別して流名に上中下三段の級を定め其手数六十八手として一派を開く。之を眞の神道流と號す。磯氏の如きも亦之と同じ。現今加納治五郎先生も天神眞楊流を學び後に起到流を吉田直藏先生に學び今講道館流を弘めたり。

柔術は形が必要なる事亂捕は劍術で云ふ道具を着けて面小手、胴突と云ひ文字に喩ふれば草書の如きものなり。

都而何業も眞行草と三段に學ぶを宜とす。他流試合は亂捕を以て全體に勝負を附けるものなり。其の亂捕も形種々あり著者圖解を示して一般後進者に便利を與へんが爲めに記するものなり。

武藝進歩に附三毒の心得

凡そ慎む可きものは三毒成なり。三毒と云ふは即ち酒色財なり。第一酒に心亂れては稽古不充分なるは勿論他に種々の危険を生ず。又色慾に迷ひ博奕等を爲すが如きは懦弱に流れ自然心亂るるが故に此の三界を慎みて熱心に修業すべし。此柔術と云ふは人を害するものにあらず第一は護身の爲め運動及身體強壯に成るが爲めに學ぶものなり。酒に酔ふて他人に害を加へ色慾に狂ひて婦女子に亂暴を加へ。又は柔術を亂用して他人を驚かすが如き行爲は一切有らざる様慎むべし。

總て藝術には上に上のあるものにて之れにて宜しと云ふことなれば成るべく上手の者に教を乞ひ充分先輩の妙手を覺へんと心掛けて稽古をすることを第一とす。常に上手の者に稽古を頼みて自身にも亦技を研究して後進者に教傳するを上手と云ふ。他人の稽古を見て其妙手を取りて我が短所を補ふ様心掛くべし、自身何程上達せりとも上に上ある喩への通りなるが故に人間一

生が稽古なりと心得べし。

術を學ぶの心得

柔術を學ぶ者は稽古前には大食飲酒を堅く慎むべし。大食をし
て稽古を爲す時は必ず身體に害あり投げられ到れし時嘔吐を催
すことあり。嘗て初代磯先生の道場の寒稽古の時は毎朝四時頃
より門人寒稽古を爲すに當り何も食はず七八時の頃稽古を休み
水四升餘の處へ白米六七合を入れて三時間餘を炊きたる粥二碗
づゝ位を食したるものなりと云ふ。今は右様な稽古を爲す必
用なきも常に其心得を以て稽古に當り大食せざる様心掛くべし。
稽古を爲すにも力量有るに任せ力を單めて突張り強情になす時
は術の術たる所を會得すること出來難く外の條に示す如く心を
柳の枝の如く四肢は成べく柔かく動かし腰に力を入れ業を掛け
る刹那に下腹四肢に力を單め電光の如き早業を掛ける時は敵は

見事に投げらるゝものなり。師の教へ受くる時には身體を固く
すべからず然らざれば術の妙味を會得せずして自身に怪我を受
くる事多し。又飲酒して稽古する時は大食の時と同様の害あり
と知るべし。

往昔著名の武術者にして大酒の爲に身を亡したる例枚舉に暇
あらず心すべきことなり。

氣の滿つる事

氣の滿つると云ふ事は常に氣の弛み心撓む事なく弓を張りたる
如くにして中心を正しく座する處を氣の滿つると云ふ。譬へば
摩利支天像の如く蓋し心一なりと雖ども能く其心の六手に行渡
りたるが故に皆一同に動き動くを得るなり若し心が一方に偏倚
る時は必ず動く手と動かぬ手と有るに至る動かざるに於ては幾
本有りても用をなさず是にては氣の滿つるとは云ひ難し故に頭

より手足の先に至る迄能く氣の行き届き行渡りて一點の間隙なく平生充分に正しく安坐する處の有様を以て氣の満つると云ふなり是眞の位の第一と云ふ意なり。摩利支天の像は一體三面にて六手の動くの意なり武術も之を悟らば自然四肢も充分動き得べし是れ即ち氣の満るにあり。

氣と體との事

氣と體と云の中に陰陽あり則ち體中に存する氣の起りを陽と云ひ亦其靜まるを陰と云ふ柔術に於て専ら氣の扱ひ方を教へて業を成さしむると雖も之れ無形物にして外面に露出せるものにあらず唯體中に満ち存する處陰陽なれば随つて弛み撓みて全からざる事あり。平常安座爲したる處の心氣は漫々として所謂愼靜無事の姿なれ共動作を始め身體手足を運用爲すに至れば其業に従つて中心傾き終に平常の氣を損するものなり。故に昔日柔術

家に於て秘傳と爲したる處必ず先づ己が方寸の元氣を養ひ弛ろ怠らしめず事物に心氣を停むる事なく宜く萬業の基本たる處を堅固に保ち守らしむるを要すと基本既に定つて業を爲せば如何程働き動くとも元氣能く決して缺損する事なし左に力を用ふるも右の空しき事なく亦右を働かすも左弛まず前後上下に隙なくして起居動靜共に氣を損する無きに至れば眞に大丈夫と云ふ可きなり。此の咄種々あり教師用に著はす。

志と氣と力との事

志氣力の此三つは區別して論ずる事甚だ以て難しと然れ共今試に之を分けて云へば眼前に或一物在り是を取らんとする志の起るに随ふて手の前へ出るは何ぞや是れ志に随つて氣の手に通ふが故にして其物を取り扱ふは即ち氣に隨ふて力の手に集るに由るなり。又力の出づる處には氣集り氣の通ふ處には力集る事は

一定の理にして氣力不二となるものなり。然れども力を先立て業を爲せば其害甚だ多し即ち力を捨て唯氣の扱ひを熟練せしめんが爲めなりとす故に業熟達するに至れば人々固有の力は其業に應じ働きに随ふて出づる事は固より教へを待たずして明かなり。されば志氣力を合一するを以て不二の妙處なりとす。

弱身強壯に成るは柔術にあり

弱身の者は幼時より此の道に入れ置く時は身體の發育上を充分ならしめ體力自然に備はり且つ術を修め業を鍛練せば勝負の實地に克く勝を制するを得べく延いては智徳も進みて利益多し臆病なる者又は婦女子と雖も運動の爲めに常に幼時より斯道に入れ置けば氣を養ひ心を廣く持つ事を得べく極めて有益なり。最も初めは其の身に適する丈けを學ぶものなれば過劇なる運動にはあらずるなり。自分の身體に適する位の練習が後に至り大に

利益を得るなり。斯くして身體の發育に随ひ好みて業を學ぶ様に成るものなり。日本男子として武士的精神を養ふは勿論婦女子と云へども亂暴者に出遇ひいかなる害を受けぬ限りもあらず萬一の際は護身の術となるなり。

世の父兄は進んで子弟を斯道に入れ給ふべきことなり。

つはものは御國と親の爲めなるぞ

こゝろみがけよ末のためなり

義爲

武術に免許皆傳と云ふ事

凡そ何武藝に於ては免許皆傳と云ふ事あり。警視廳講道館の外は師匠先生の意に叶ひ次第に業の妙處を自得せるものには最初折紙を渡し。師より門人一同へ此度何某は折紙の腕あり依て是を渡すと申渡すなり後數年を経て形及亂捕の奥儀を極めるに至り口傳秘傳の免狀を渡すなり之れ目今警視廳にて定めし三級に

一心と云ふ事
 相當するものなり此の免許に渡す巻物に乾坤の二巻に爲すも有り又天地人三巻と爲すもあり我が眞楊流は四巻を授くるものなるが極意に依りて種々の渡し方あるも大概は天地人皆傳と云ふ。他の武藝にても全般同一の事と知るべし。諸武藝中柔道が一番新らしき武術にて現今は柔術が最も隆盛を極むるなり。各府縣下に在住せる柔道教師は皆昔より師の傳を受けて今に至るものなり。又名人と云ふは自身に言ふにあらす何業にても人々に勝れたるものを指して名人と云ふ當今名人と言はるゝ人は二三人位に過ぎざるべし。

一心と云ふ事

總じて物事には一心に成るべし神道の金光教にも一心に信心せよ御蔭は我が心にありと云ふことあり。昔より武術修業者は神に祈りて一派一流を起したる者澤山あり奥を極めて一心不亂に

稽古を爲す者は何藝に於ても世に名を著はすものなり。殊に武術的のものは猶更の事にて一心を貫く事第一なり。

畏くも先帝陛下の大御歌に

とる棹のころなくも漕き寄せむ

葦間の小舟さはりありとも

雨たりにくほみし軒の石みても

かたき業として思ひすてめや

男子一度起たば何事も其の奥を極むるまで學べかし進めよかし。と云ふ御意味なり

無我無心の位の事

凡そ見處のものをば直に其相手取る氣に成り形を造るは其處へ心を留るものにして是は我が心に好を求る處有るが故なり又随つて敵あるなり例へば敵は何程取掛らんとする勢を示すと雖も

我は只眠りたるが如く敢て好まず能く心を正明に爲し泰然安座したる處の如きを以て則ち無我無心と云ふなり無我無心の所より出で敵に應じて業を行ふ事肝要なれば宜しく考へて修業すべし。是れに就ての喩言澤山あり教師用に著はす。

不動心の位の事

不動心と云ふ事は即ち如何なる事に遇ふも心の動かざるを云ふなり。心正明にして總身に氣満ち渡り眼に白刃を見るも心には見ざるが如く又耳に大砲の音を聞きても聞ざるが如く凡て物毎に驚き噪がざる心を大丈夫の不動心と云ふ。斯の如き心膽を以て我身を働かし千變萬化の術を行ひ大敵に出遇ふとも少しも驚き懼るゝ事なきを即ち眞の不動心と云ふ故に往時は生れながらにして自然大砲の響或は太刀音を聴き劒撃を以て勝負を争ふ事の常なれば随つて心膽の修練も出來得たるなるべし。最も其頃

にても膽力を練る爲め野に臥し山に入り又は人跡絶へたる處へ行き凡て心中の動せざる事を專一に修業爲したるもの故眞に不動心の位にも至りしと成るべし。亦當世の修業者と云ふは多くは手足にてのみの藝にて腹の中には術なきが如し依つて此處を能く熟考して不動心の位に至るの工夫を專一に修業すべし只々口で云ふ斗りでなく術の極意を究むる事を考ふべし。尙ほ引言あるも教師用に著はす。

膽力を練磨する事

凡て武術は膽力が第一なり臆病風に誘はれて勝つべき業も其効立たず。強敵と恐るゝ時は下手の者にも負る事云ふまでもなく一眼二早速と云ふ喩への如くなれど膽力なき時は其働を一つも起す心なく怖氣附けば四肢も固くなる故に膽力の強き者が必ず勝を取るゝこと昔より其例多し。修業中は何よりも膽力を練るを

沈着を守る事
第一とすべし。喩の引言種々あれども教師用として著はす。

沈着を守る事

柔術の類には諺に云ふ急ては事を仕損ずると云ふ如く不
動心の無我無心に敵より仕掛け來たる時は心を靜かにして向
ふべし。心の周章て其仕掛けを外す爲めに反つて投げらるゝ事あ
り。四肢の働きは早業が第一なり。美麗なる勝を取るものは業の
妙技に依つて先んじて敵を倒しても殘心には沈着を守り又直ぐ
に何を仕掛けらるゝも恐るゝ心なく我身を守り居るは是れ武術
の奥深き處なり。其内にも柔術は無手無刀なる故敵より棒、劔、何
の武器を以て打ち掛かるも沈着を守り敵の得物を撈ぎ取り或は
打落すが如きは我柔道の得意とする所にして常に沈着に行動す
るやう心掛くべし。

眼の配りの事

凡そ眼の働きは心の發動に據るものなり。故人云ひ傳へたるが
如く。物を觀て其心を起すは是れ人事一般なり。人は如何なる
場合害を被るやも計り知れざるが故に平生歩行するにも柔道を
練習する者は前後左右に心を配り油斷無く通行するものなり。
又不意を打たれて諸人の笑を受くることありては多年の稽古も
其効無なり。又兩手共に五指の内親指を中に折り込み居ること
を定指と云ひて必ず親指を大切にすることなり。眼の働きに依
り勇氣も満ち又業も早速に起るものにて稽古中も相手が右へ投
げんとするか又は左へ投ぐるかと相手の胸中を知るは唯相手の
眼の配り方にて知り得るものなれば我は其機を速に看破する様
修業すべし。

掛聲を大切とする事

劍柔槍棒長卷凡て武藝に於ては掛聲を發する事を必要とする。
 打込み投げ拂ひ等には(エイ)とか(ヤア)又は(トウ)と云ふ掛聲を發す
 る爲に業に勢ひ生じ又美麗に見ゆるなり。
 又形に於て掛聲無き流儀あるも十中の九迄は必ず掛聲あり聲を
 掛くるは氣合を込めると同じ事にて受る方より(エイ)と聲を發す
 る時下腹より自然に起るものなり。捕方に於ても(チー)と答を同
 時に發するものなり是れ氣と氣を起して勇氣の増すものなり。
 亂捕と云へども投る際は掛聲と共に業を行ふ同時に四肢の動勢
 満つると云へば常に心に込め後進者へ稽古を授くる時試るべし。

殘心放心と云ふ事

殘心と云ふは敵に投げ倒されても起き揚る迄も心に油斷なく敵

を見詰め居るを云ふ。放心と云ふは投げられながら投げたる者
 に注目しながら起き上り又更に心を起す迄の心の動かぬ處を云
 ふなり。都而柔術の形に於ても投けても投げられても眼と眼を
 他に散らさぬ様に白眼で心に弛みなき事を殘心放心と云ふ。投
 ぐる方には殘心の氣を込め投げらるゝ方を放心と云ふと雖も是
 亦解釋すれば殘心と同意氣のものなり。
 又武術の殘心と云ふことは極必要の事にて稽古中にも此の殘心
 の方は最も充分に修業すること肝要なり。殘心がなき形は其人
 の勇氣心更に無きものと知るべし。

他流試合の心得の事

僅かの武術を自慢して只他流試合を試みんと思ひ我が力と藝術
 練習の爲めなりなぞと先を侮り仕合を申込むが如きは最も慎む
 べきことなり。諸學校生徒にして仕合を申込には何々學校の何

他流試合の心得の事
 段何級の者及姓名年齢等を書き誌して仕合を行ふべし、其の時は我れ未熟なりと思はず自身の手を相手に仕掛け見るべし、必ず我が得手を先方へ知られぬ様にすべし、餘は巻中各箇條に示す通りを常に心得居れば少しも敵に恐るゝことなし。初心の内は試合する場合には胸に動氣起り相手に業を掛くべきか掛けらるるか、と怖氣を生じ易し。故に場馴れたる者は七分の徳あり、町道場などには随分業の上手なる者にて、他流試合其他大會等へ出席すると意外に早く負くる者あり。是れ心に臆するが故なり、相手は左程強くはなかりしになど、後にて悔んでも其詮なし。又他流試合に出づる時は相手は強きには相違ないが常に得意とする所の業を以て恐れず、掛け其手が外れたら又此の手と自信を以て打掛りなば決して恐るゝに足らず。然し亦敵を軽く見れば我れに油斷生じ甚だ不利なれば常に怠らず、修練せば強者なりとも恐るゝに足らざるべし。

稽古に相手を忌み嫌ふ事

道場に稽古中相手を選むは上達せざる基なり。故に人数中不親切なる教へ方を爲す者、往々あり斯る者と稽古を好まざるは一般の通有性なれど、斯くては毎日同じ人とばかり稽古を爲し居りては業も不進可成、人数と稽古するを宜しとす。若し不親切なる者に出遇はゞ、其者の得意の手の裏を考へて始終相手を破れば終には其者も好意を以て迎へ互に研究する様になるものなり、又自分より相手が弱くて自分の心の儘になると、其者のみと稽古する弊、往々あり是れ卑劣なるのみならず、又上達せざるなり、後進の者には親切丁寧、に教へてこそ武士道の意義にも叶ふなり。又他流試合の掛引等は自然會得するものなれば、相手を選むが如きは稽古中斷じて慎むべし。

強情は武藝の大惡と云ふ事

何事を習ふにも教師の教に能く随ひ一心に學びてこそ眞上達するなれ身體強壯にして力量あるに慢心し木造の人形の如くに突張りなどする者は必ず其業上達せざるなり。
己が身體は四肢と下腹に力を込めイザ投ぐるとか又突く引く等の場合に氣合と同時に迅速に業の妙處を現はすものなり。都而己に力量ありとも教を受くる時は從順に熱心に練習すれば熟達疑ひなし、必強情をつゝしむべし。

稽古前後の心得

道場及自宅にて假にも稽古を爲す時は大小用便は必ずしも濟ませたる後稽古に掛かること萬一假死したる時大小便を洩らす事あり。大食後大酒後は必ず稽古を爲さざること他人稽古中には極

めて靜かに見學し居る事。凡て稽古に掛かる時は立際ともに足の位置は八字型のこと。見所立ちある時は正面の所へ先に禮を爲し次に見所に向ひ一禮して其道場の中央にて雙方互に一禮して稽古に掛るべし稽古終りたる時は始めの如く見所正面に禮して引下るを儀式とす。輕々しき舉動有りて他流の人に笑ひを受けぬ様に注意すべし。稽古終りたれば水にて能く汗を拭ひ清潔にして衣類を着用する事と心得べし。
又試合及稽古の際後進者に負くる事あるとも必ず恨む可からず他の場所にて勝つことあり勝負は時の運と諺にもあるなり。

精神と態度の事

諸武藝には更なり就中柔術にありては沈着の態度こそ必要なれ。何となれば柔術は敵を嫌はず又敵の業に倣ひて我れ亦其の氣に合せて表裏の考へを爲すものなり是れ精神の作用なれば必ず感

ずる處ありて初めて面に現はれると云ふ無形のものなり其無形物より有形の働きを神態度となる此態度こそ活動の第一指針にして禮に初まり禮に終るものなれば修業者は沈着にして最も謹みて事に當るべし。次に解く處を能く熟讀すべし。

精神——執意

禮 信 忠 喜 愁
義 情 孝 怒 悲

禮の解

禮は精神の解釋中最も解し難きものにして禮は精神より出て態度に顯るゝを云ふ然れば此の心の禮なき時は貴顯に對し亦神靈

に對する柔の術の投合する心より出でたる容姿は迎も出來ざるものと心得べき事。

義の解

義は最も柔術中十中の八九迄も伴はざるはなし義に就きて解釋すればなかく限り無きものなれども是は柔術の性質として離るべからざるものなれば熟達と伴ふて自然其意の備ふるにより未熟の中は業に無理あり即ち無法の仕向を敵に仕掛けざる様注意するが肝要なり。

信の解

信の意に就きて二つあり事武藝及術の意に投合する様自得に勤むると云ひ次に信を以てする容姿は如何のものであると云ふことを心掛ければ足れりと知るべし。

情の解

情は就中甲者に乙者とに關係深きものなるが故に情は愁と悲みとの似て否なるものを區別し判斷力を備ふるにて足れるなり。

忠孝の解

君に忠親に仕へて孝は其の區別を辨へる事唯形斗りとならざる様注意すれば足れりとす。

喜の解

喜とは勝ちたるときに笑顔を現はすが如きをば云ふ。喜あれば色面に現はるゝは是れ人の常なり勝舉を慎むべきことなり。

怒の解

怒りと云ふは是物に觸れて心に反動を起すを云ふなり業の意に依れば概ね無念の怒なるが故に其心を戒しめ業を學ぶべし決して荒々敷怒氣を面に顯はすは不可なり何となれば怒らずとも鋭き眼にて其場に臨めば怒は充分に現はれるものなればなり。

愁の解

愁は憂ふことの面の半ば顯れたるものにて悲と又同ふせざる事を注意すべし。負るとも愁ふること勿れ。

悲の解

悲は憂事の最早全部をば面に顯したるもの愁悲此の二つの區別を解して精神活動の道理を自得すべし。

此以上は單に柔術の精神を述べたるに過ぎざれば詳精は圖解に依りて會得せらるべし。

陰陽強弱之說及一身の心を論ずる事

柔術教科書

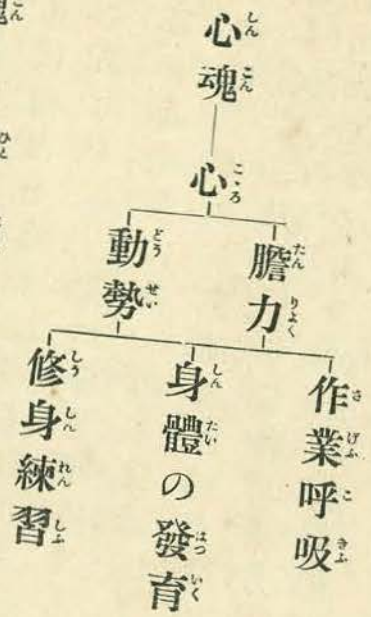
夫敵には陰敵と陽敵二とありて其容姿にては判じ難きものあり
 外見弱き風情にても其實剛敵なるものあり又外見勢ひ盛んにし
 て強氣に見へても其實却つて弱き者あり柔術の法は一身を靜
 かにして變化を常とすれば一樣に云ひ難しと雖も仕合に臨みて
 敵の面に注目し能く其色を見てなすべし
 又敵の顔色赤くなるは性氣上りたるものなり性氣發すれば必ず
 心に急く爲めに勝利を得る工風するの暇なし又顔色青白くなる
 者は心に臆したるのと知るべし臆する時は身體震ふ爲めに業の
 活用出來ざるなり他流試合の第一の心得は臆せざるにあり
 わが上に立つ藝術を苦にやむな
 好きの道こそ上達なるべし
 八方へくばる眼のすき間なき

古歌

身に禍のきたるひまなし

著者

心の割出五系の圖解の事



柔術教科書

心魂とは人の心が基にて萬物に當りて皆觀るものにて其心が起
 るものなり是れ第一の魂の基なり種々に割出し強きにも弱き
 にも力むも勢も出づるなり此れを詳細に解説すれば限りなきも
 のなれど五種に心の動きを曰ひ顯せば心より動勢である仕合
 する時に當り敵を見る時は勝と云ふ心を起して勢満るものなり
 心の割出五系の圖解の事

是れ心の基なり。

次は膽力にして勝心にならんと思ふ心起きたれば必ず心に力を起すなるべし。是は身體が基なり身體虛弱なれば其心を起すも其効なし身體を強健と爲し物に動ぜざるを以て基なりとす次に著す處の體育法に依り幼年より此術を學び身體の消化を附けて次第に稽古を爲さば必ず自得すべし。卷中圖解の順を追ふて次第に學ぶべし。次に作業呼吸である是れ皆心より起りて自然業の形を造り人に教へ得るは云ふまでもなし。又武術は息切れする様にてはならず前に述べたるが如く身體を練へ置くこと肝要なり何人に教授しても教ふる方は十中の七八度迄は投げられるものなればなり。試合に臨み息切れせざらんとするには幼年より體育法に心掛くるが肝要なり。中年にて修業する人を見ても知れるものなり業は早く覺ゆるも息切れして長く續かぬものなり。又次に修身の解我が身體弱きときは到底上手名人には爲れぬも

のなれば常に讀書を怠らず智徳を進むるは云ふまでもなく能く理非を辨へ仁義を明らかにしてこそ名人上手にも成り得るべければ絶えず稽古を勵み術を練磨するが肝要なり、いつに至るも他人に教へを受け居るは愚の至りなり後進を引立て自身の業を磨くが心の基なり。

道場及勝負見所の事

凡武徳會又は講道館等廣大なる道場を始めとし各學校町道場の定法として玄關より右に見所を置定なり。武術は都て仕合の時
は審判官見所が四角に立ち行事もありて其行事は唯業の美事に
勝を得る者を指して美事とか勝負ありとか角力の行事と同じ役
を務め行事見損じたる時見所より検査する者なり。勝負には見
苦き勝を取たる時は六分或は七分として全くの勝に入れず。
再び何分か勝を得たる時前のと合て一本の勝を得るなり。大

體育より柔術に進むの心得
 概は三本勝負の事故雙方一本宛勝を取れば後一本にて勝負が附くなり此場合行事は「勝負」と大聲を發して試合者に注意を與ふるなり。五分の勝負の時は引分になること相撲の三番勝負と略同じことなり。修業者は見所の立ち居る時は特に勝敗とも美麗になすこと見苦しき試合を爲して諸人の笑ひを受けぬ様すべし。見所より今一本と聲の掛けし時は更に勝負を爲すべし普通の場に臨む時にも禮儀を正しく爲す事は前に充分述べたる通りなれども斯る公會の演武場にては一層注意して教師及學校の名を辱しめぬ様注意すべし。是が肝要なり

體育より柔術に進むの心得

凡體育と云ふは近來各學校にて盛んに獎勵しつゝあるも柔術を學ぶ者は幼年の頃より卷中に示す圖解の如く順を追ふて身體四肢の働き輕快にし次第に筋骨の自由發育を進めて投ぐる、投げら

る、返り身、打込み、受震突掛、前返り、後返り、逆立、高飛等の稽古を充分に練習して後ち眞の位を自得し以て柔術に進むを眞の稽古と云ふ。凡そ何の藝道にても順を追ふて次第に業の妙を得るは已に讀者も知らるゝ處なり。此の卷中十中八位迄圖解にて著はせるも他は圖畫筆に任せぬ處ありて委しく説明出來ざりしは著者の最も遺憾とする處なり。後日教師用として補ふ處なればそれ迄は本書にある處を勉強し給へかし。術の術極意口傳、秘傳と云ふ事は斯る小冊子なれども侮るべからず柔術は武術中最も高尚なるものなり。

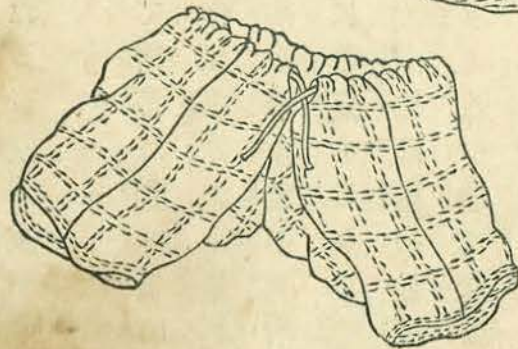
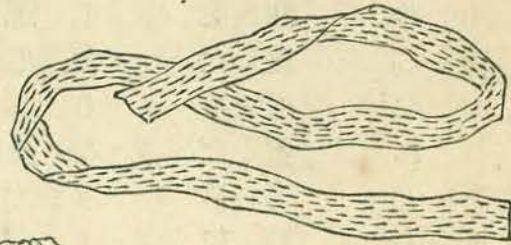
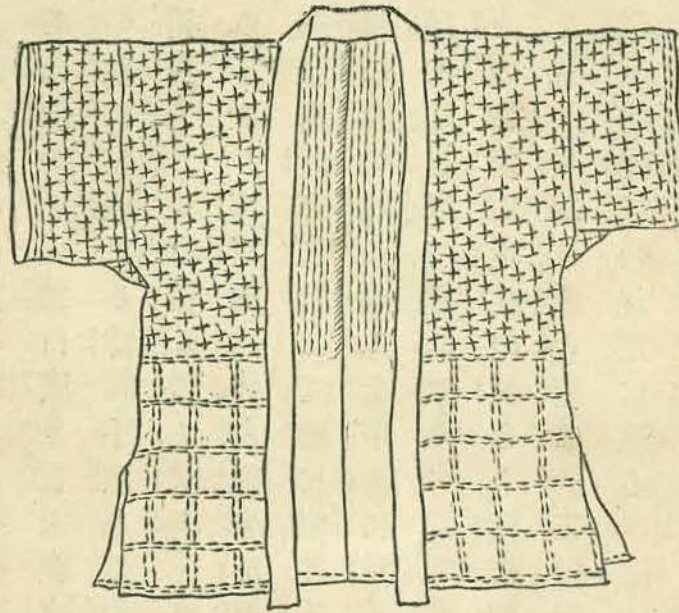
舊式稽古衣の圖解

凡そ稽古衣と云ふ者は舊來より圖式の通りにて肩より腰迄を晒木綿の白地に紺糸を以てし、肩袖は十字絞りに縫ひ上げ腰より下は格子形に二筋に縫ふ圖の如し。袖は半袖にて襟は丸巾の晒木綿を以て四つ折にし紺地に白木綿糸を以て縫ふこともあり。罩套又は三味又猿股は二重合せにて上部は紐を通し半股引の如く腰にて紐を締め帶は木綿の半巾を縦に四つ折とし縫ひ合はす。縫方は木地に依りて白、黒糸を以て刺すなり段級の違ひ又は教師の夫々規則を定めて造るなり。今回著はしたるは四肢の動きを委しく見せる爲め舊式の着衣の姿を模型として寫生したり。

新式稽古衣圖解

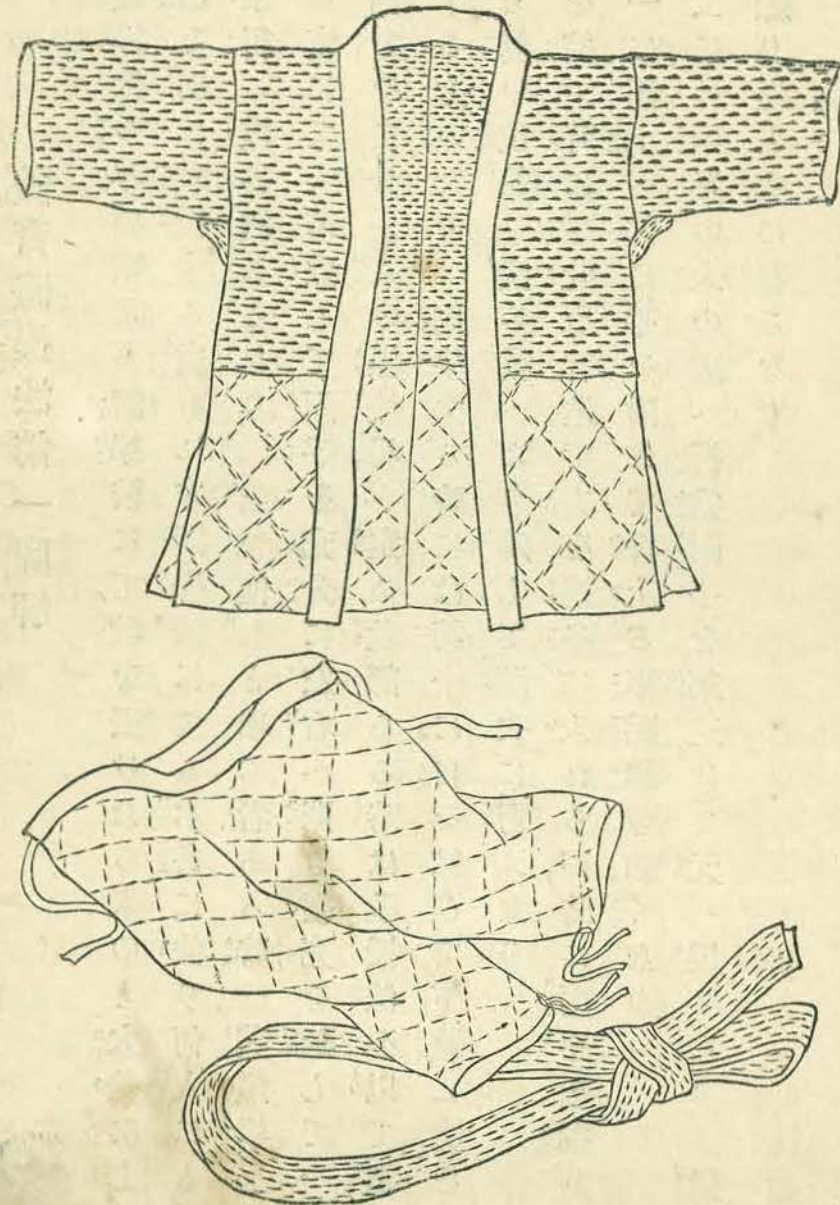
元來我國の風俗は一般に角袖なりしも近時は外國との間交通頻

舊式稽古衣圖式



繁となり隨て世人の服裝も多くは洋服となりたるに就て我が柔
 道稽古衣も是れに倣はざるべからず。
 凡即ち袖短かく且袖口廣き我國在來の服裝にて稽古に馴れては
 洋服の敵に出遇たる時勝手悪しく大に不利なれば平常より是れ
 にて稽古するが得策なると又近年外人間に柔術を學ぶ者年々増
 加せるにより可成裸體の大部分を現はさぬ爲に改良せるなり。
 又則ち袖も長く筒袖にて袖口細く畢隠しも長く白地に紺糸を以
 て横目に圖の如く刺し上下共に長くしたるなり。八つ口の處は
 少し足し切を以て縫ふなり。
 是舊來のに比し唯丈の長きと横に刺したるだけにて帶は從來の
 通りなり。「黒は有段者茶は一、二級三、四級は青等に區別せるは從
 前の通り各道場の規定に據る。
 又股引は膝下二三寸の處にて紐を締めるなれども稽古の時は結
 ばざるも可なり。

新式稽古衣圖式



體育體操法第一圖解

凡體操は少年の頃より諸學校にて教を受けたるものと大差なし。此法を別に教授する處あれど獨學法にても本書に依り何人にも出來得る様書綴あるなり。先づ他人と學ぶ者ある時は其道場又は自宅にても直立して兩手を充分に左右へ開き指先を延して一間四方を自分一人の操練場と定め教師ある時は教授法を以て指揮するものなり。獨學する時には第一に口を結びて下腹に力をこめ眞の位第一圖の構へより爲して順次に習ふなり。口を結ぶ時に睡吐を吞込で力を總身に入れる同時に兩手を攪り第一に頭上へ體に手を附けて押上る事點線の如くなり。第二には兩乳の上の處へ押當兩手を第三にて元へ戻すなり。數回繰り返し次に移るなり。

體育 操法第一圖

第一圖、第二點線、第三點線



體育體操法第二圖解

直立は眞の位第一圖と同じ事にして前條を終りて直に又兩足は八字形の位置となり左足より一尺五六寸も横へ開きて掌を充分に押延ばして裏表揃へて數回爲し后兩手を合して點線の如くに

體育體操
法第二圖

體育體操法第二圖解



第二點線に合掌して返り居る處なり

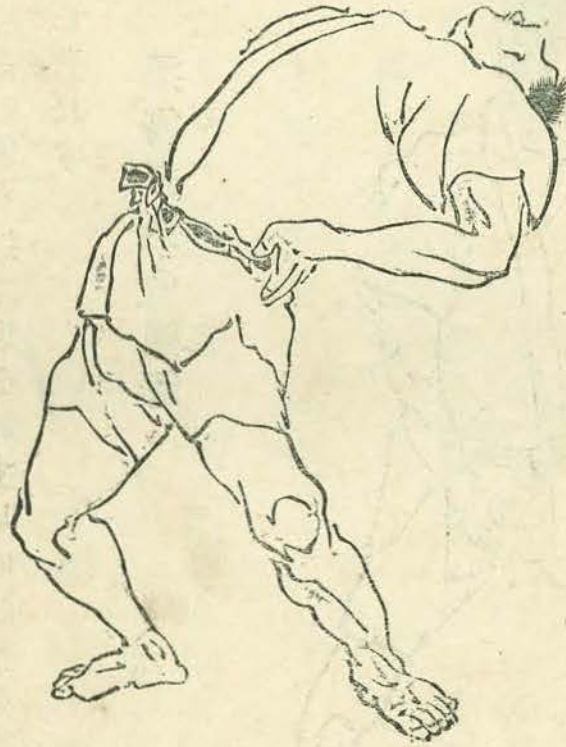
反り返る事圖の如し。成るべく反り返へれる丈返るべし。馴る迄は苦しき故最初は三四回を以て壹度とし然して次へ續ける

なり。

體育體操法第三圖解

體育體操法第三圖

處るたり成に身返て當に部腰の手兩



様に三四回行ふなり終りには腰より兩手を離しても倒れぬ様に

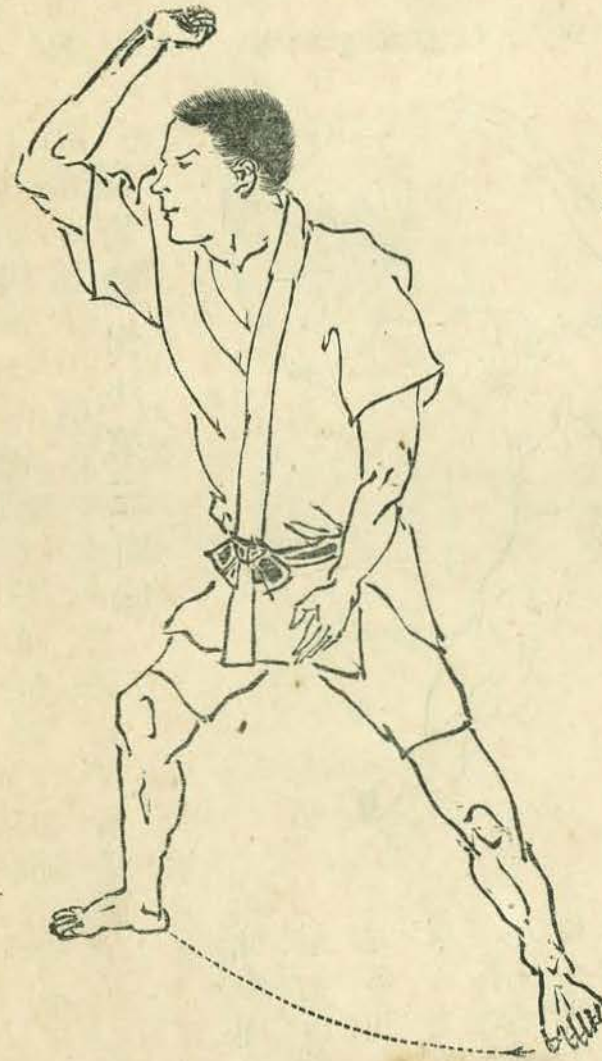
體育體操法第三圖解

此の姿勢には最初の如く兩足の先に力を單めて圖の如く兩掌を腰の處へ押し當て心靜に次第に後へ返へり半月の形ちの如くして轉ばぬ

成るなり此の三圖だけにて體育には充分なり。
 又是れより次の順を追て形を爲す時の心得を説明すべし。
 は教師用に著はす。 詳細

柔術打込の圖解

眞之位第一圖の姿勢より打込む様なり



柔術家の打込と云ふは何流にても同じこと最初眞の位に立居より
 面前に敵あると假定して(エイ)と掛聲にて右手握り拳を以て前
 へ一足凡そ二尺迄の處へ右足を踏み出すと同時に振り上げて(ヤ
 ー)と又掛聲にて打込なり。
 又元の所へ右足を引着けて元の八字形の位置となるなり。
 又打込む時は上に心ある故陰囊を蹴られぬ様に左手を以て圖の
 如く陰囊を圍むが定形なり。

柔術片手受の圖解

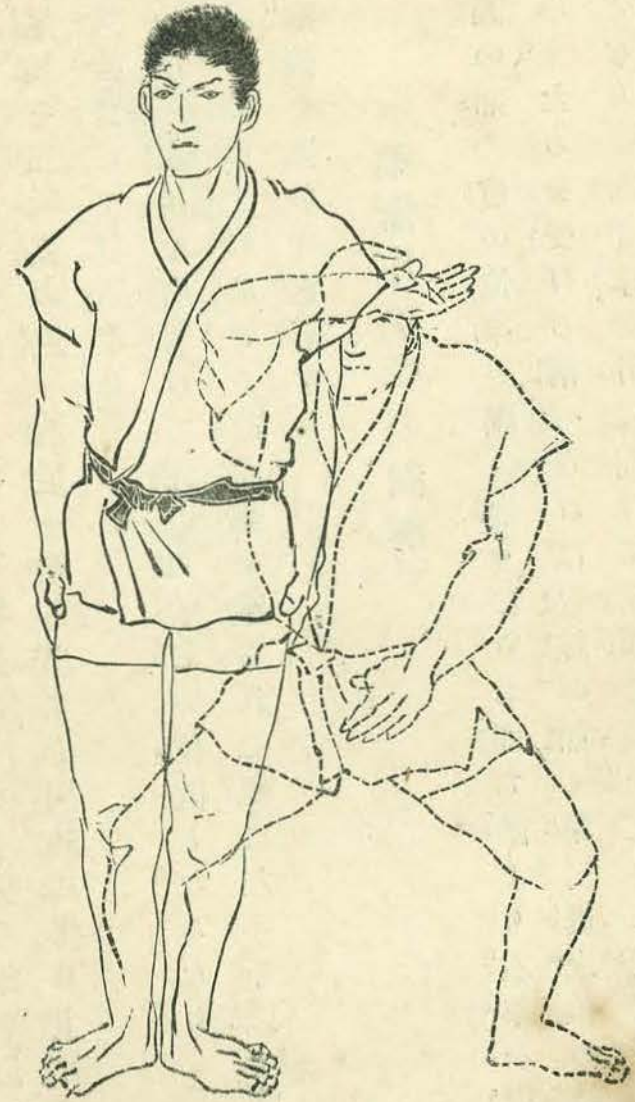
凡本圖の如く眞の位第一圖の通りに立ち即ち敵より右拳を以て
 打込み來たるを受ける構へなれば點線の如く第二眞之位の構へ
 になるなり。右手掌を外に向けて前額に横一文字に當て受け留
 め同時に左足を横へ二尺位開き腰を下ろし下腹に力を罩め打込
 み來たる手首を攔るなり。

片手受圖

柔術片手受の圖解

總て是は形に最も必要なり。元の如く直立して終るなり他に種變化あるも形の書として後日著はす時詳細を説明す。

此の圖は眞之位第一の構より點線の如くに腰を下げ霞に受止たる處なり



柔術兩手受留の圖解

此の圖は敵より打ち込み來たる時に受くるの心得にて第一眞之

腰留受てし合組を手てしに向を掌兩りな圖の構るたき開を足てげ下を

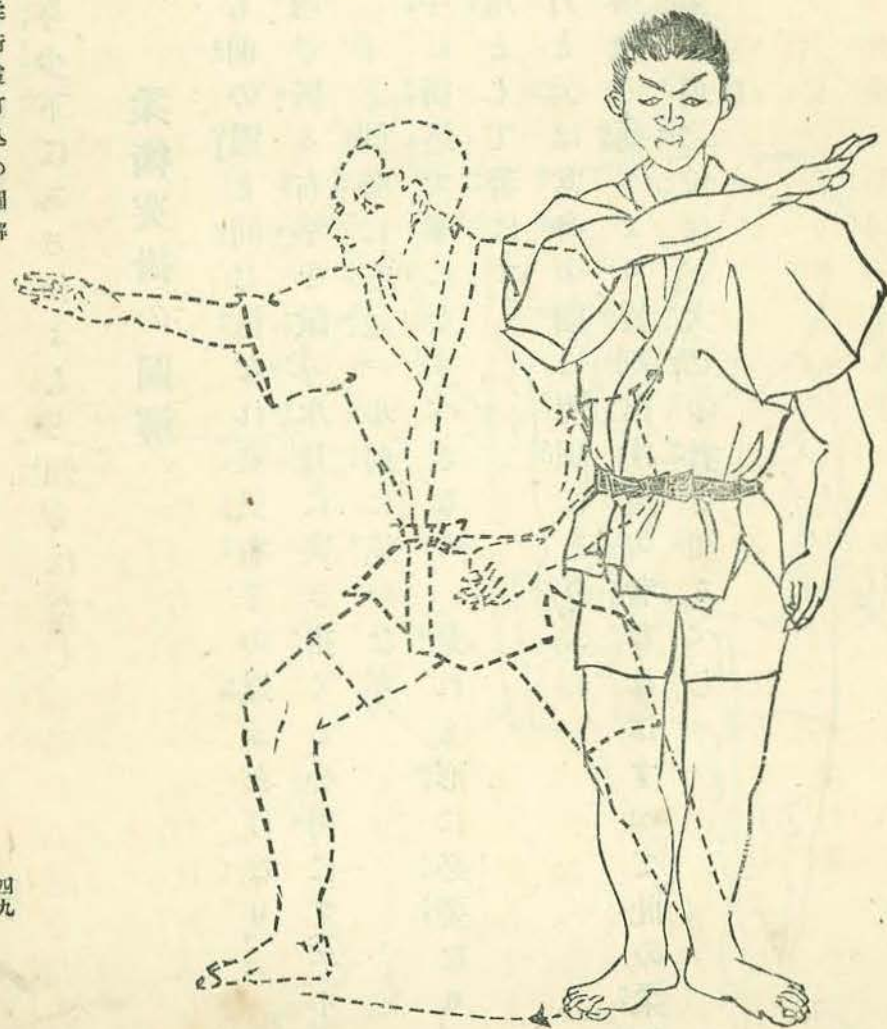


位の姿勢にて敵より打ち込まれたるものとして行ふ。敵が右手にて打ち込み來たる時の受け方は兩手を圖の如くに組み敵の眼を

震打込の圖

第一より點線の續きの者なり右先手を刀にすべし

柔術震打込の圖解



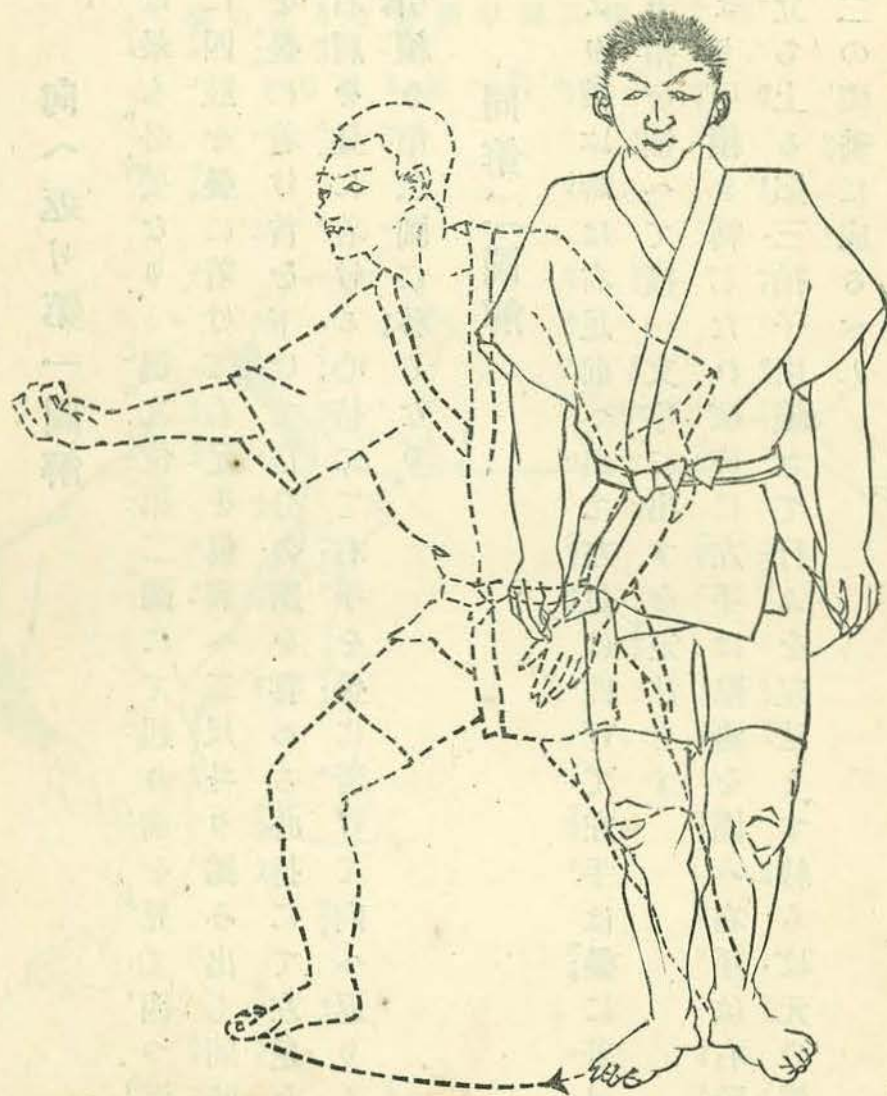
柔術震打込の圖解

柔術震打込の圖解
 兩手の下より見るやうに爲を定法とす。同時に右足を後方斜に
 二尺位の處へ開くなり。
 又左手を以て打込來たるときは此の反對に行ふなり。
 又左り足を引いて開く事もあり是は敵の出方に依る者なり形に於
 ては右手にて打が定式なり。

此の圖も第一眞之位の位置にて起る者なり。前に敵あると假定
 して右手の五指を揃て手の側面にて敵の震俗に蟬谷へ當身の圖
 にあると稱する處を目掛けて打つなり右手を點線の如くに爲し
 (三イ)と掛聲と共に右足を前に點線の如くに一步踏み出すと同時
 に我が左肩口より斜に前へ向へ打込を定法とす。左手は右手足
 の出ると共に陰囊を圍むべし。是れも形に必要なり。
 正誤 此圖に點線の處は手先が今少上になる事と知らるべし

突掛の圖

眞之位第一の構へより右拳に敵の水月當へるなり



柔術突掛の圖解

左手は今少下にあるがよしと知られたし。

此の圖も前の霞と同じ様なれ共只右手の違ふだけなり。
横腹に附け居る右拳を敵の水月に突き掛くる心得にて(エイ)と掛
聲と共に手と同時に右足一步前に進むなり。
拇指は中に折込で拳になすべきなり。是れも形に必要なり。後
日教師用として著はす。
先に水月と云は當身の圖に明細にあり。
眞之位第一の構へより皆割出す處の者なればすべて此の柔術と
いふものは眞之位ほど大切の者と知るべし

向へ返り第一圖解

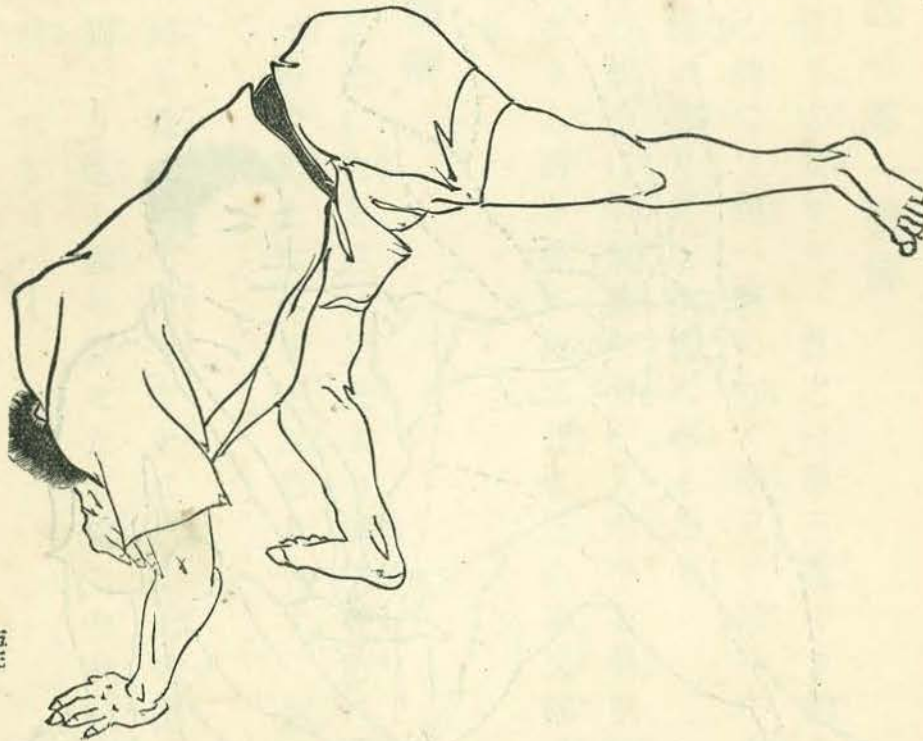
此の形は最も必要なり。眞之位第二圖にて起り前を見て四つ這ひに斜に四肢を疊に付けて右足を眞前へ二尺斗り踏み出し同時に左手を疊に付けて首を下げて自分の臍を嘗める心持にて左足を上げて右肩を疊に付けて心持にて右手を疊に付けて向へ返りる事直に引續き第二圖に移るなり。

同第一圖解

第一圖より轉ぶ時は右足前へ出で左足は曲げて左手は疊に付けて右手は五指を揃へて横一文字に出すを定法とす。
第一圖より引續き轉じたれば直に左手は陰囊を圍み右手は右股に着け立ち上る迄三拍子引續きて行ふを定法とす終らば元の眞之位第二の姿勢に成るべし。

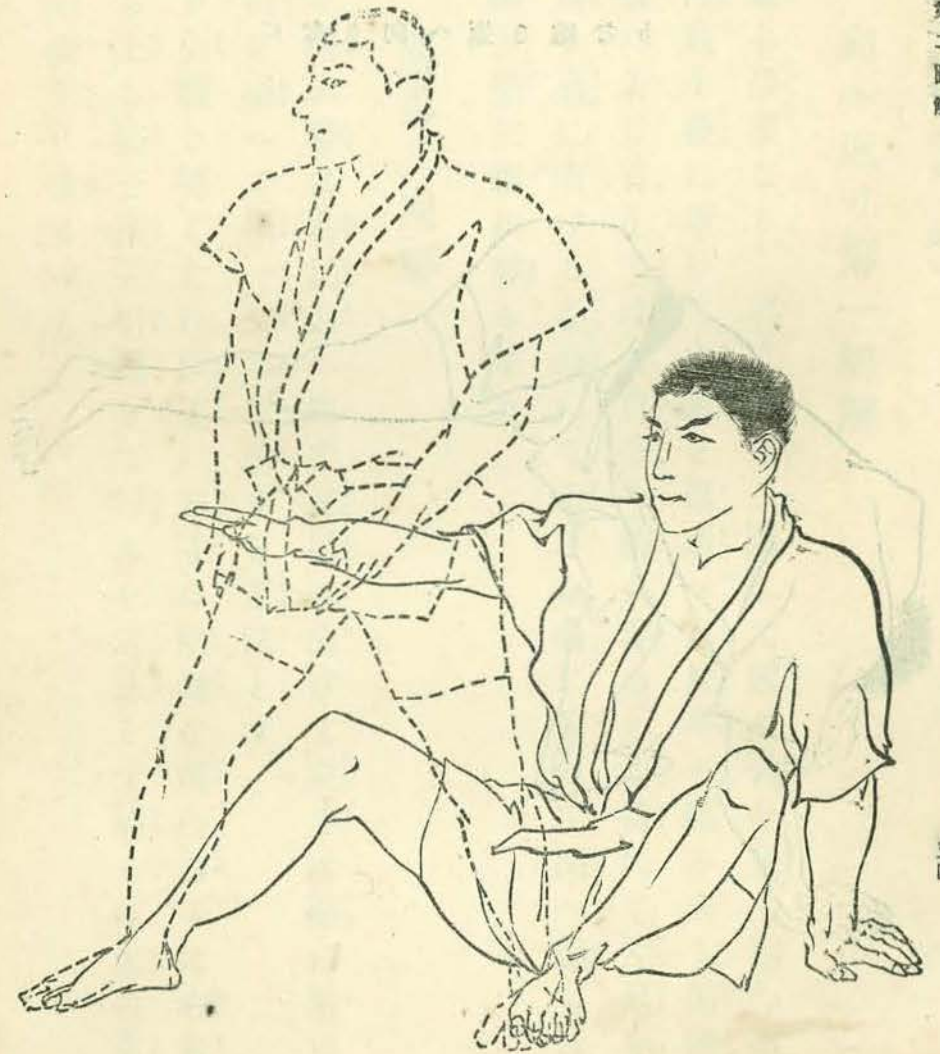
向へ返り第一圖

眞之位第二圖の姿勢よ此の構へ
ににり返る處なり



向返り第二圖

前圖より引續て轉りたる處に直りな點の線に姿をなすべし



柔術後返り第一圖解

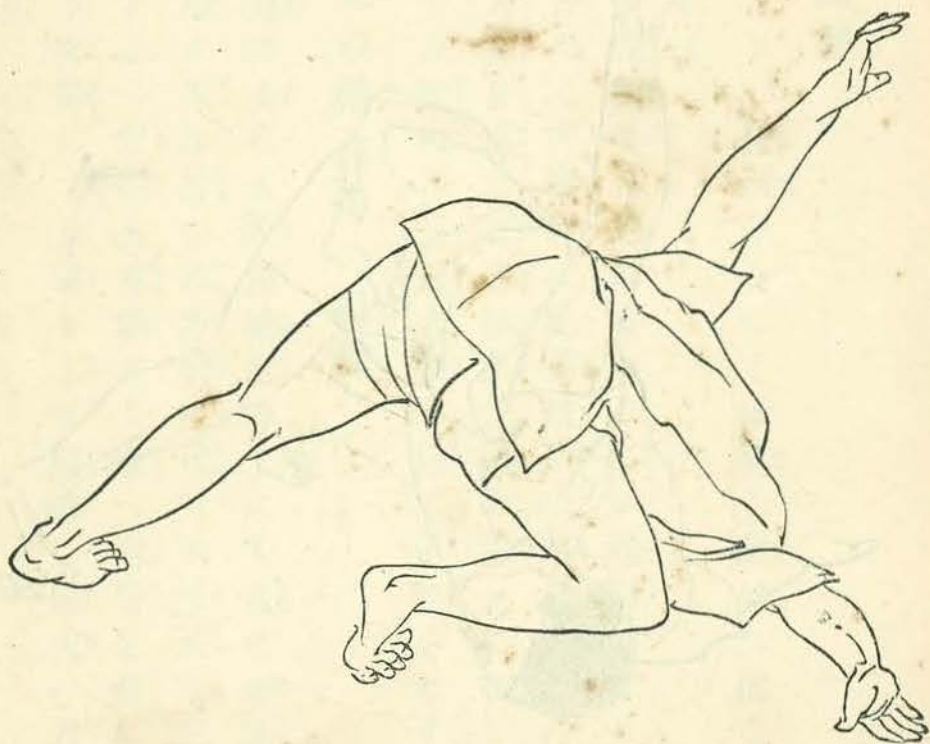
此の返り方は修業上最も必要なり。眞之位第三圖より起り座し居る胸部を突かるゝ心持にて第一圖の如く兩足を揃へて右手にて疊を打ち同時に點線の如くにし次圖に移るなり。是に記す姿より點線の如くに兩足先に力を入兩手を疊を押附て頭より後へ返る氣になり右肩を疊に附て起る迄の事又都合にて左肩口より起るもあり。

同第二圖解

右手を以て疊を打ち足先に力を込め足先より順次後方へ返り足の爪先を疊に着けて元の姿勢となるを定法なりとす。第三圖を見て知らるべし。此の處は兩足及び右肩を疊に着て左手を上延し第壹圖より返りたる姿なり此は右側より返る處を見せたる處なり此の姿勢より直に眞之位第三の構へになるべし。

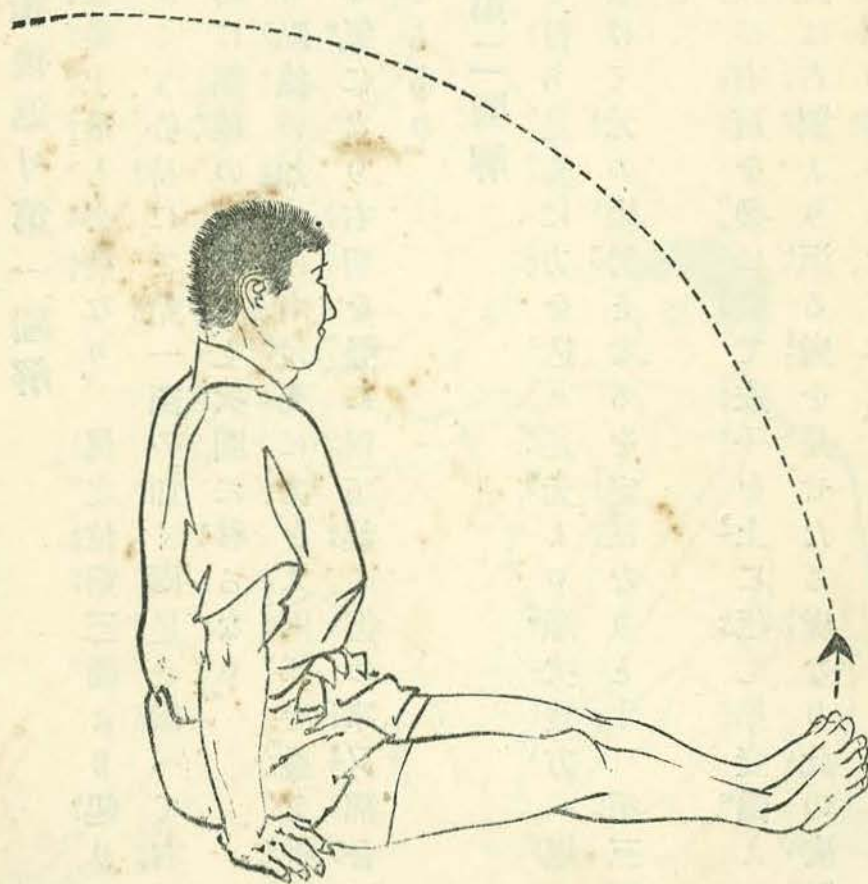
後返り第二圖

前圖より引き續き後へ返りよ右部背りて見る處の圖



後返り第一圖

此圖は兩足に力を入て既へ後へ返るる點の如く居てしる處なり



後返り第三圖

面前より見たる處

此圖は後返りを前左側より見たる處なり



同第三圖解

是れは第三圖の前面なり。後面のみにては解し難ければなり。
 著者の親切を諒せられよ。
 是處の姿勢は後へ返り左側より見たるなり必ず此姿になり毎日
 稽古の時返る事を充分にして置時は亂捕又形の時は大意に廣得
 をゑるなり。前にも云通り直に眞之位第三圖の構へになるべし。
 終りを附ぬ時には極めが附ぬゆへ眞之位を以て定法となすべし。

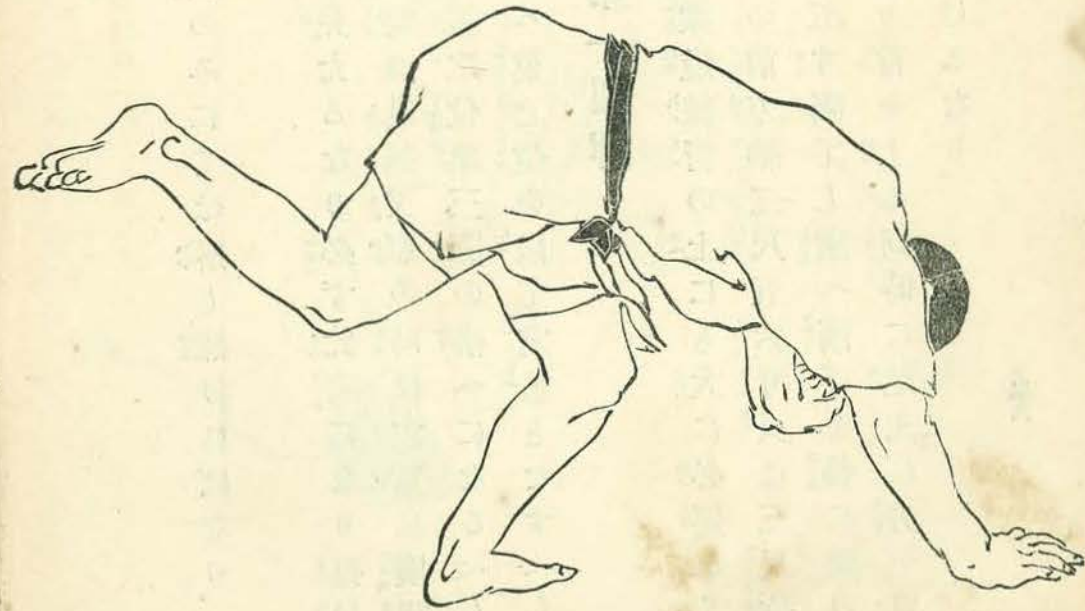
柔術逆立の稽古第一圖解

此の逆立と云ふは體育の上にも柔道練習の上にも大に必要なり。
 是れを學ぶには羽目板か又は柱の前方約二尺五寸又は三尺位
 を隔つて立ち羽目際より一尺四五寸隔てし處へ兩手を疊に附け
 て横一文字に圖の如き姿勢になり首を上る同時に足先に力を罩
 めて跳ね上がり羽目板へ足を附けるなり。

是は兩足先に力を入れて首を持
上ると業が好く出来るなり。

逆立稽古の第一圖

兩掌を疊に附て向て既に
逆立せんとする處なり

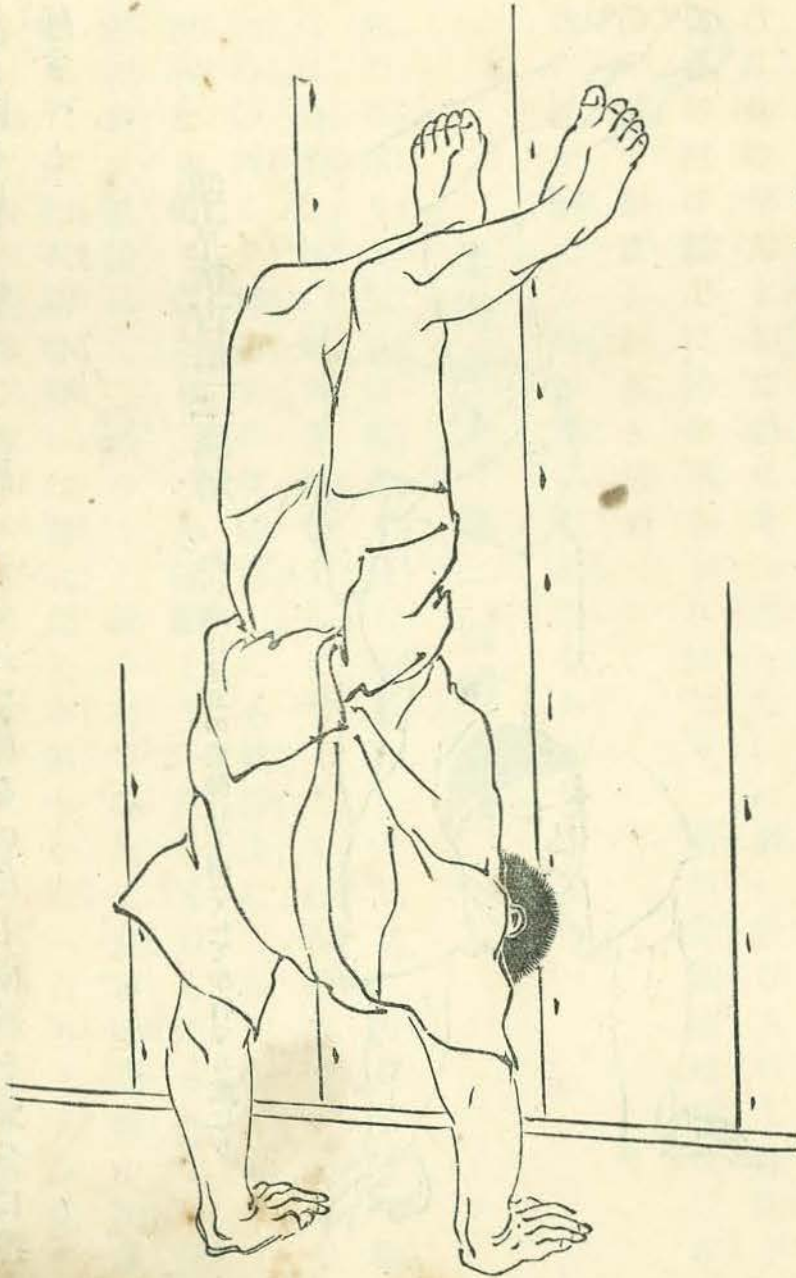


前の如くにして兩足を羽目板
に着けたる圖なり。此の様に
して中心を保てば歩行が掌に
て仕得る様になるなり。

同第二圖解

逆立稽古第二圖

兩足先を羽目板に附たる圖なり



第三圖を見て知るべし腰に力を込めて腰をのばし兩腕を充分に押延すべし。

逆立稽古第三圖解

此の處は逆立の姿勢にて兩手にて歩行する處なり



前の如くにして次第に馴れたれば兩掌にて歩行し得る様になれ
ば亂捕の稽古上甚だ徳なり。何となれば敵に投げられし際兩手
を疊に附け地上に體を落さざればなり。昔の柔術家は指先二本
にて逆立を爲したりと云ふ。常に是を馴たる時は萬事に必用をかんずるなり。

柔術車返り第一圖解

此の車返りと云ふは練習上最も必要のものなり。投げらるゝ時
には身體を地に落さず起き上るに早くして好都合なり。是れを
初心の内より稽古すれば體育上にも練習上にも身が軽くなりて
便利なり第一圖より二三と接續して一度のものと知るべし。元
警視廳世話掛にて二級なりし故中村半助氏は良移心頭流の師範
なりしが此人初心者には最初此の車返りを教へたりと云ふ第一
圖の如く眞之位第二圖より起りて兩手を擴げ右手を圖の如く下

柔術車返り第一圖解

車返り第一圖

此圖は今既に横に返にらんとす處なり



柔術車返り第一圖解
にし左掌を上うへに向け兩足りやうあしを横一文字いっもんじに開ひらき。第二圖だいにづに移うつるなり。

同第二圖解

此圖は圖の裏を勢姿りよ見を爲るた寫にゆへ讀者に逆に見てもいしめる知となるに先に手右い



車返り第三圖

前より第一第二圖に直に上りたるなり



左掌を地に附けて右手を疊に附けると同時に右足先に力を入れ
 第二圖の如くに爲して直に横に成るなり。
 最も是れは順序を早くすべし腰業なれば第一圖より第二圖の如
 く兩手を擴げたるまゝ起き上る迄は唯腰だけの働なり。
 是は總身を軽くして横へくと道場の廻りを數度なす時は次第
 に上達する最も亂捕には大必要なる事後に知るべし。

同第三圖解

第一圖より第二圖に至り此の三圖に於て壹手の形となるなり。
 第一は左手を上にして第二圖になり此の起き上る圖になるなり
 即ち第三圖は第一圖と反對に右手を上にして左手を下になるなり。
 能く圖の手足の働き方に心を留めて勉むべし手を執りて教ふる
 事能はざれば讀者熟讀して習ふべし。

柔術飛上り稽古圖解

是は高く飛び上る事の稽古なり流儀に依れども昔は最初より飛

飛上り稽古第一圖

兩手握手一足飛に構へなり



飛上り稽古第二圖

此は飛上り力を入れたる足兩は爪先
を下にけなり足兩を揃て止る



四尺

三尺

二尺

上りを教へたるものなり。最初のうちは亂捕を教ふる前には必ず返り、反り、車返り、高飛を教へたるなり。
柔術家としては體育上及柔術練習上必要なれば上達する様稽古を爲すべし。
高飛を爲すには第一圖の如く兩手の拇指を掌の中に折り込み兩足を爪立ち爪先に力を入れ口を結びて下腹に力を單め身を軽くし飛ぶ心得なり。
廣き地所の有處にて二尺斗の高さの土堤を築き又其上に罌粟種を蒔て次第に延るにしたがい高く飛べる様になり舛。順次三尺余にのびる時は五尺余も飛上る事が充分に出来る事あり。

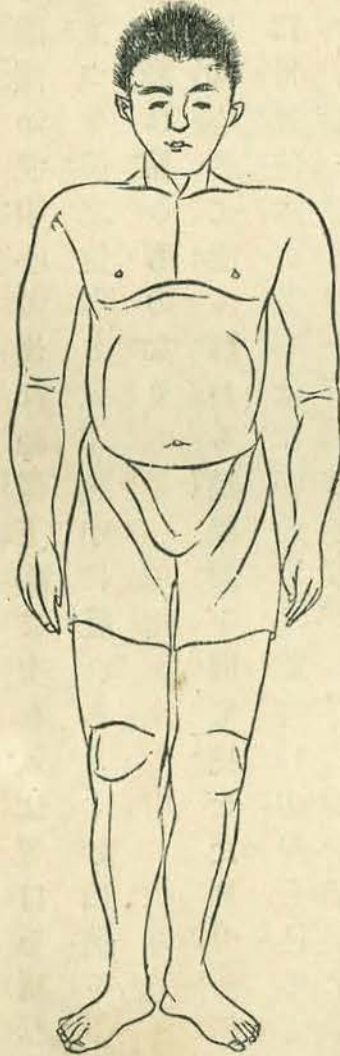
同第一圖解

兩足を縮めて飛び上り下る際は爪先を揃へ身を軽くして下るなり。此圖は飛上りたる處なり初心のものは最初二尺位の土手を

眞位の第一圖

何氣くな直立をしをたしをる
是眞之位第一と云ふなり

柔術眞之位第一圖解



築き其上に芥子の種を蒔き次第に延て花の咲くころ凡そ二尺ほどとなりし上を花に觸れぬ様に次第に稽古する内に身も軽くなるなり。自宅又は道場にて爲す時は紐にて圖の如く二尺位より次第に高くすべし終には四尺五尺と高く飛ぶ様になるべし。

總て柔術は眞之位が第一の心得なり。凡武術斗りでなく總身を

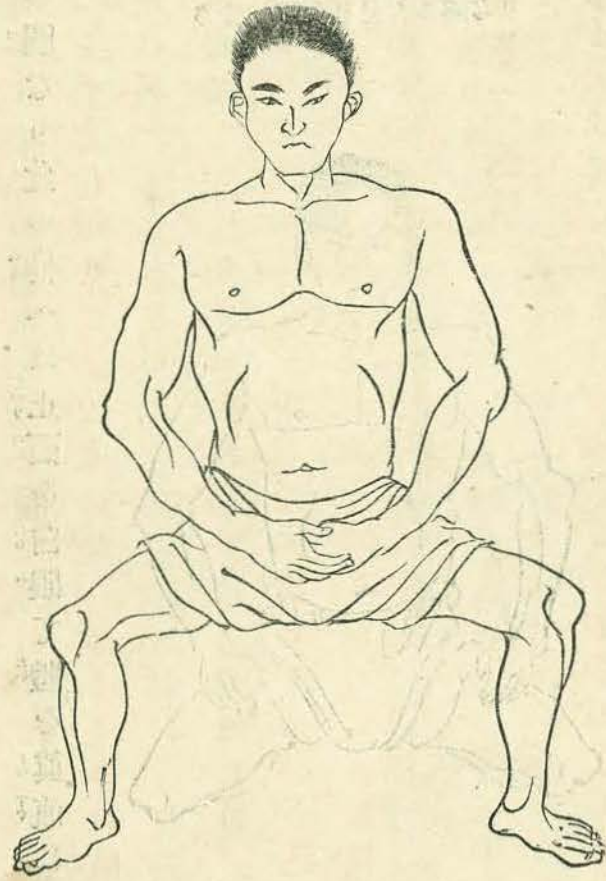
働かす業をなすものは眞之位取と云ふが大事なり。
 此の圖は第一直立眞之位にして變化は種々あれども眞之位と云ふ事は身體傾かず中心の崩れぬ様下腹に力を入れて口を結び無念無想に立つを眞之位取と云ふ腹中に亂れあるときは臍下の氣息抜ける故倒れ易きものなり。
 此圖五種は初心者に能く解かる様裸體を以て見せたり。
 又眞之位に付此位六ヶ敷事はないのです總身に力身を込ると又身體堅くなり氣が満る又位張と云次第にて前に云ふ無我無心と云ふ心を持って氣を鎮着てする事大肝要なり。

同第二圖解

眞之位の中身と云ふて正面を白眼兩手にて陰囊を圖の如く圍み兩足は横一文字に開き爪先及下腹に力を罩め腰を少しく下げて總身に氣息充分満ちたる處を云ふなり。

眞之位第二圖

兩肩より下腹に氣を込めたる處なり



眞之位取五種とも總て形の基本なれば充分に會得すべし變化自在の構へにて第一より順次を追て卷中にも眞之位第何圖と云事

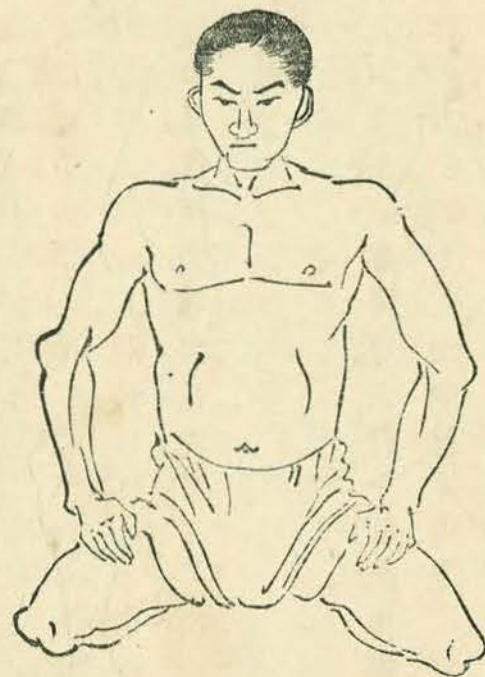
あり故に此の定式法を能く心得るべし。

同第三圖解

眞之位平座の圖なり此の構へは正面を白眼て體を眞直にし下腹

眞之位第三圖

らかいを肩構の身中位之眞
りな處るた見を面正にすさ



に力を罩め兩膝を開きて座し兩肩を下げ兩手を股の處へ載せ口
を結びて總身に氣息を満たし中心の崩れぬ様に爲すべきものな

同第四圖解

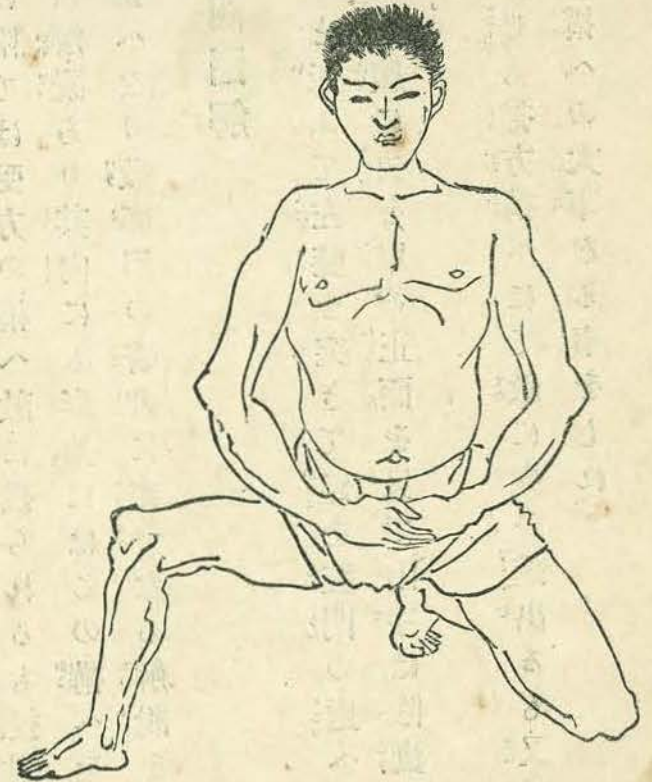
り
都而柔術手合形及亂捕の稽古を爲すに當り位取の心弱ければ隨
而て業も速かならざるものなり。
最も此中眞之位に附ては受方の構へ敵に投られるも投倒すも殘
心附る迄の種々の解説あり其内にも形捕にはこの構へを以て居
捕の時は大事の構へなり教師用の著書に充分なる解説をなす。

此の形は平一文字と云ふて左膝を突きて踵を肛門の處へ當て右
足を開きて爪先及下腹に力を罩め正面を見て兩手は陰囊を圍む
を平一文字と云ふ。

柔術の形捕の切は必も捕方構へにて敵に向ひ進出るも又敵を投
て殘心を附るも此構への大事なる事をしれ。

眞之位第四圖

此の構は本文に云ふ通りなる方
此の圖は俗に一字と云ふ

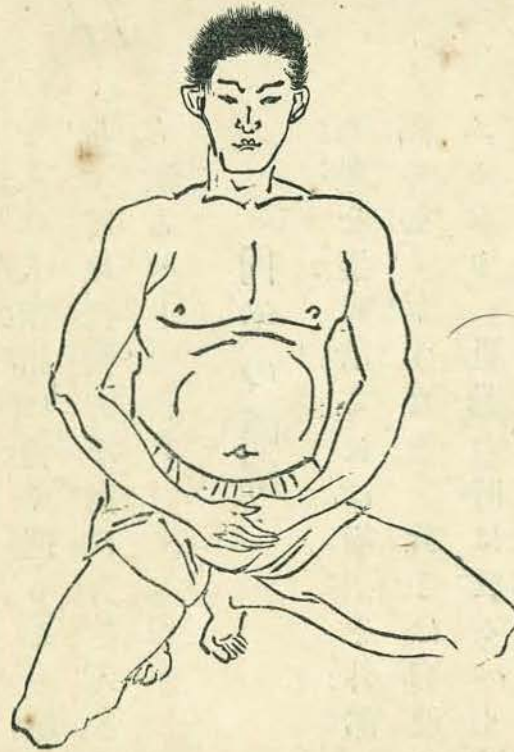


同第五圖解

此の圖は平の構へといふ。第一圖の位取に兩膝を開きて地に突

眞之位第五圖

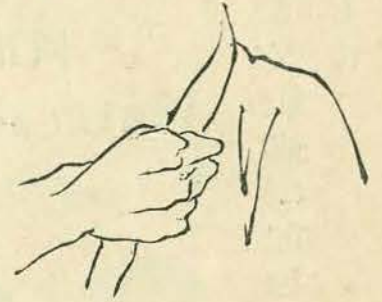
正面眞之位の構へを著したるなるり



き兩足とも爪立ち身體を眞直にし下腹に力を入れ正面を白眼で
兩手は陰囊を圍むことおなじ圖の如し。
此も形の捕方の構へにて右膝頭を疊に附て左り踵にて肛門の處

へ當る又亂捕に立上り前には一時は此構へより崩れて捕に掛る
者としれ。

右襟の取り様の圖解、同逆の圖解、左襟の取り様の圖解



右襟の取り様の圖解、同逆の圖解、左襟の取り様の圖解

右襟の取り様の圖解

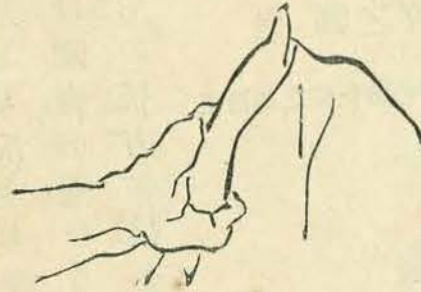
右襟を取るときは小指より紅指と順に力を入れ人指指は軽く握ること總じて襟を取る時は、拇指と小指に力を入るゝが定法と知るべし。

同逆の圖解

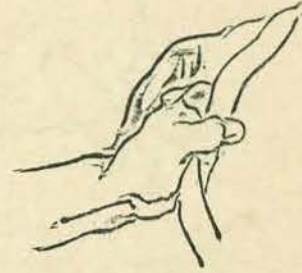
右襟を逆にするには拇指を外部に現はし圖の如く爲すなり。此手は形及絞めに用ふるなり。亂捕の時は成るべく逆手は用ひざるが宜し。

左襟の取り様の圖解

同逆の圖解



左襟の取り様の圖解、同逆の圖解、右襟の取り様の圖解



同逆の圖解

右と別に違ひなし唯左襟を左手にて捉むたるだけなり。敵の襟を取るには双方共に肩より下四五寸の處を捉むを定法とすれども人には身體の大小其他の都合もあれば必ず其れとは定ず其場合に臨み定法に大差なき程度にて取ることゝ心得べし。

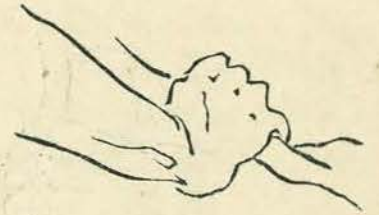
同逆の圖解



右の逆の反對なり他に變る所なし攔み處の名稱は左右襟帶袖口上下八ツ口等は一定の捉む所なり形亂捕等は總て以上の所を攔みて種々の業を施すなり。

帶捉み處の圖解

帶を捉みたる圖



同逆捉みの圖解、喉締の圖解

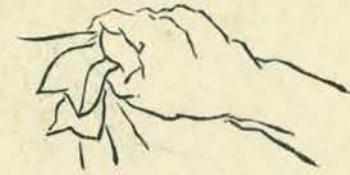
八〇

都而柔道稽古の時は帶は必ず前にて結ぶべし。是れは結び目が後にては仰向に倒れし時危険なればなり。握み方は袖襟同様に握り前後左右を圖の如く握むなり。

同逆捉みの圖解

逆と云ふは掌を上に向け握むを逆と云ふ掌を下に向け握むを順と云ふなり。解り易ければ説明の用なし。是は掌が下になり居は誤なり。

帶を逆に捉みたる圖

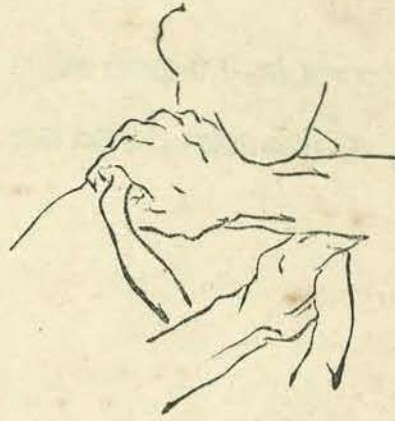


喉締の圖解

此の締方は種々あり亂捕組打の時に締めるは圖の如く爲すを利益ありとす。

敵の内襟を右手の拇指を深く襟裏に入れて握み左手にて敵の上

喉締の圖



襟即ち左襟口に拇指を襟の表にし、て握み兩腕を横に張り敵の脛の下を締るを定法とす。締方の解説は卷末の締固めの部に種々あれば此には略す。

亂捕禮式立合の圖解

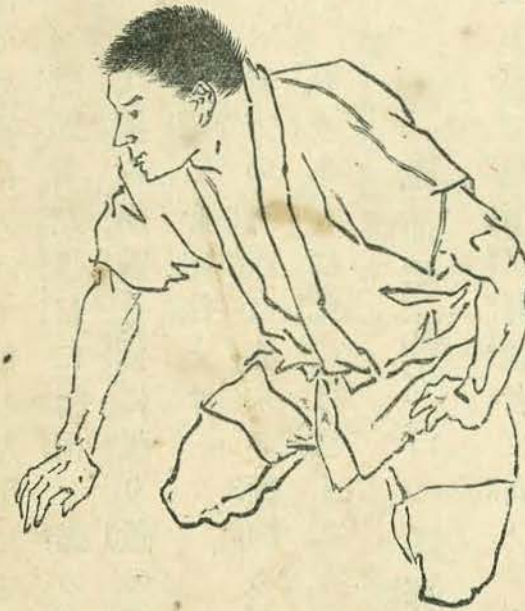
禮式法には雙方東西より立ち出で見所又拜觀者に向ひ一禮を爲して四角或は東西に立つ検査役及中央に控へ居る助技者に一禮して東西に別れ五六尺を隔て、相對して一禮す行事も同時に中央に出で△形に成るを三角或は魚鱗の構と云ふ定法式に位取をなすべし。

眞の位第五圖構へを爲して雙方注目して他に目を散らさぬ様慎亂捕禮式立合の圖解

甲者一禮を爲す構の圖解

甲者一禮を爲す構の圖解

甲者一禮を爲す構の圖解



甲者一禮を爲す構の圖解
 此の圖の如く構へ居れば行事は「しつかり」と勵ますなり。
 同時に一禮して立上り雙方共同じ捕方を爲すなり右手にて敵の
 左襟を取り左手は敵の右の袖口なり八ツ口なりを握むなり。敵
 の身體の大小又は力量などを見るには前條に述べたる通り試る
 べし。敵の腕前を見抜くが第一なり。

左の一禮すな構の圖

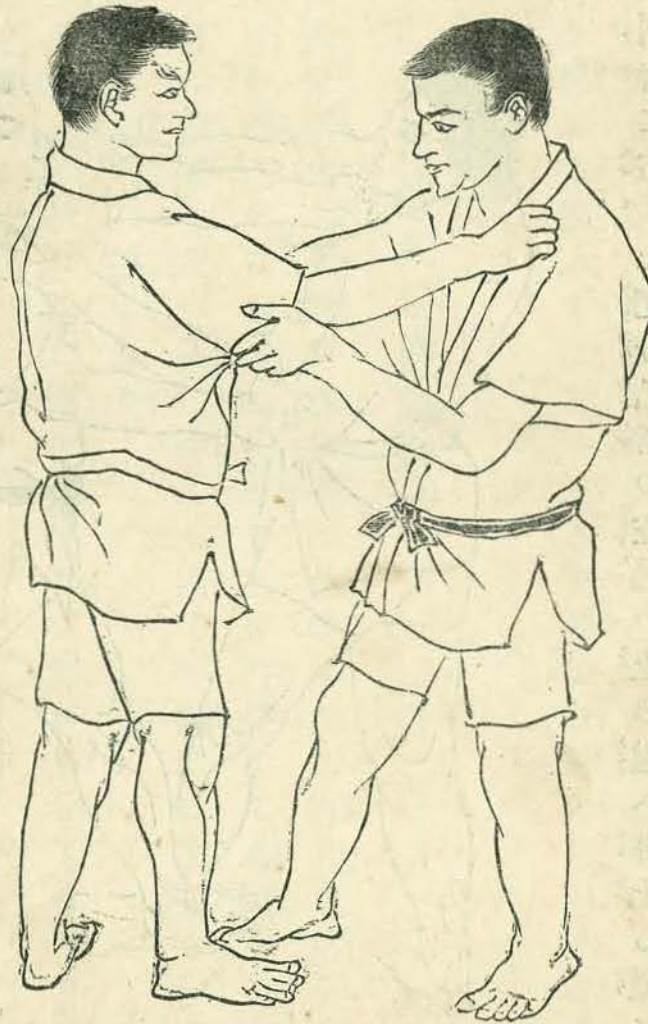
乙者は甲者の顔を以て見右掌を以て

疊て打を禮して立上り掛の圖なり



定法式は右左より出づると同様なるも右より出づる者を我より
 上手と心得べし。上手なりとも臆する勿れ。勝負は時の運な
 り先が引かば我亦引いて心見るべし敵の様子を見て常に得意の
 業を充分に振ひて勝も見事に爲すを宜しとす勝負濟み次第元の
 如く一禮し監査役及見所へ兩人並んで禮を爲し引下るを定法な

甲乙者は法式定に上立襟と袖口の
を掴みたる處の圖なり



柔術足拂の圖解

甲者は乙者を我が方へ引附けて見て引き出でたる時に乙者の右

りとす。
道場に於ける常の稽古は只教師に禮して。
雙方右手にて疊を軽く打ち同時に立ち上るを定法なりとす。
甲乙者ともに貴人拜觀者ある時は東西の控所有も正面に向ひ前
條の通り兩人立揃て立出て禮式をして下り道場の中央を定て亂
捕に取掛るべし。

雙方立ち上り圖解

都而立ち上る時雙方は圖の如く爲すなり。是れより何業にても得
意の業を掛けるなり。最初凡そ三尺程の距離を隔て、立ち上り
雙方共に右足を一步づゝ踏み出すと同時に雙方注目しつゝ右手
を以て雙方の左襟を掴むこと前條に述べたるが如し。

襟取り居る圖

足拂圖

甲者が右手を延てし左下へ引附の足裏
に横に拂ひ敵を既に倒すとす所の圖



柔術足拂の圖解
足の外踝の處を左足裏を以て掬ひ上ぐる心持にて横一文字に拂

ふなり其同時に右手を充分乙者の左乳の上の處へ押上る様

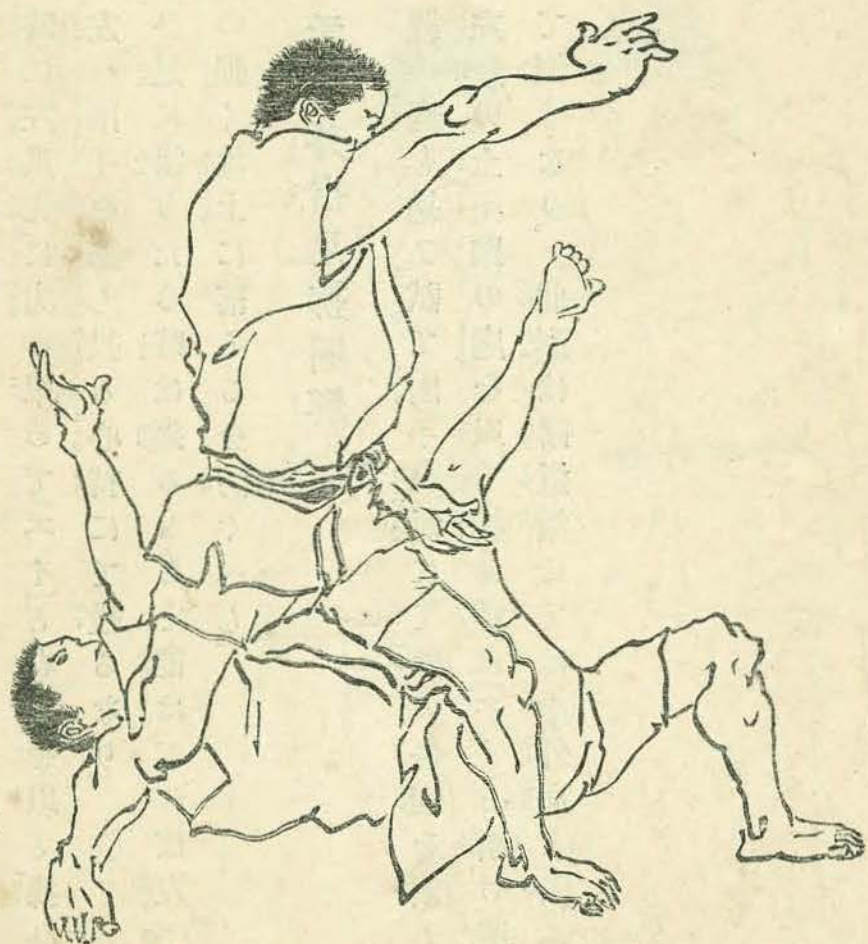
左手は下へ引きながら我が體に引寄せ乙者の身體を斜に崩し同時に右足を拂ふて倒ふすなり。注意甲者は右足先を一寸右の方へ向るべし。

柔術釣鐘足拂圖解

此の業は敵を引出して敵の體の崩れかけたるに附入り左手にて敵の右袖口を握みたるまゝ上に引き上げ右手にて右襟を持ち上ぐるると同時に我體を左へ斜に少しく開くと同時に右足を以て右膝裏を點線の如くに拂ふなり。敵の身體を釣上る故に足に隙を生ずれば倒れ易きものなり此の形を講道館にては大外刈と云ふ。

釣鐘足拂第二圖

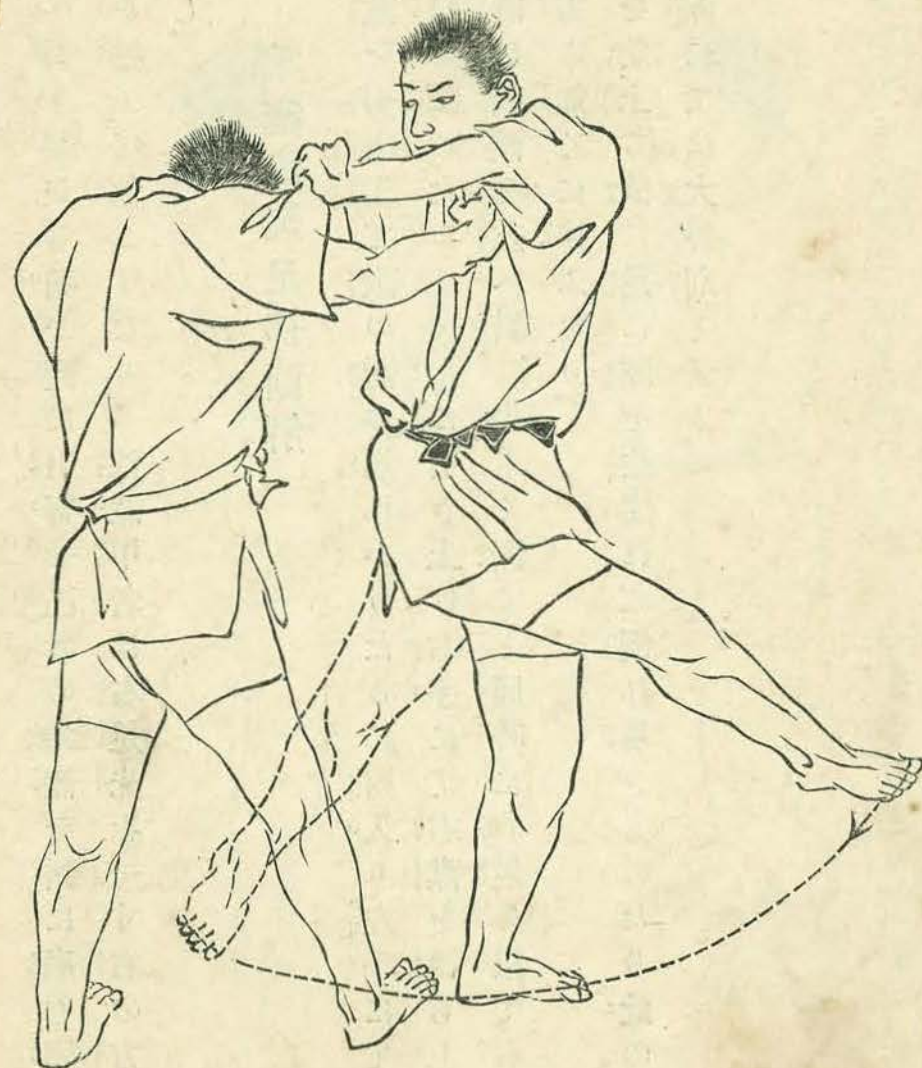
甲は我を敵は左に協へて勢を起し見るに圖なり



釣鐘足拂第一圖

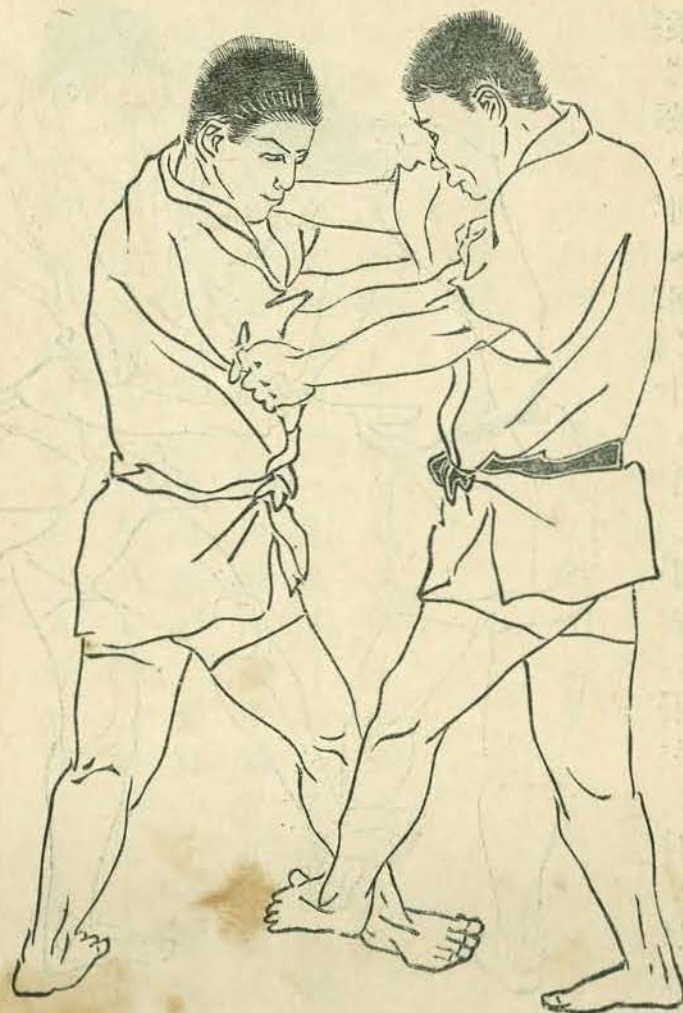
甲は乙の體を崩し乙の膝裏の點の處を拂ひ

既に倒れんとす處の圖なり



外掛足拂圖

此の體の方崩しを方捕の
前々足の拂と一同の様
なもる敵の節黒外今
りな圖の所る掛にら
がなひ拂を處の



柔術引込足拂圖解

柔術外掛足拂圖解

柔術外掛足拂圖
九〇
敵を投げ同時に左爪先に力を罩めて(エイ)と右足を以て拂ひたる
と共に我が左へ兩手を廻し投る心持にて投るなり。
敵も此の拂ひ足に掛りたる時は遁るゝこと能はざれば左手にて
疊を打ち體の強く地上に落ちるを防ぐべし。

互に足の外踝の處を拂ひ試て兩手の働にて敵の身體を崩し弱腰
に成る處を左足の土不踏の處を以て掬ふ様に(エイ)と掛け聲と共
に足を拂ひて倒すなり。此形は講道館にては小外刈と云ふ。

引込足拂圖

此は文中章にふよる甲乙の者
 身を斜に崩して引込て敵の草
 左足の土に踏ふ處の圖なり



敵を向へ押附くる心持にて押し行けば敵は押されじと押戻すな

柔術押附足掃の圖解

右にて敵の左の肩口を押し附け左手にて右袖下口を下へ引いて
 敵の身體を斜に挫けば敵の足に隙を生ずる故直に左足の土不踏
 の處にて敵の右足の草靡の處を拂ふて倒すなり。

此の押附と云ふは前と反對にて敵を引き附る心持ちにて二三歩
 後へ下るなり敵も引れぬ様身を後へ引かんとするなり其の機に
 乗じ敵を突き戻すと必ず上半身に氣の満ち居る爲め足の弱くな
 るものなる故右手を充分延して左手は敵の右袖口の下を掴みた
 る儘左足の土不踏にて横に拂ふべし右手は押し、左手は下へ引き
 附け、左足にて拂ふ、此の三つ柏子にて(エイ)と投げ附くるなり。

内 黒 踝 掃 圖

此形は敵の内黒踝の足を土不踏にて
よ外へ大拂きしべ足が掛られ
に兩手に敵の體身を倒し崩すべし



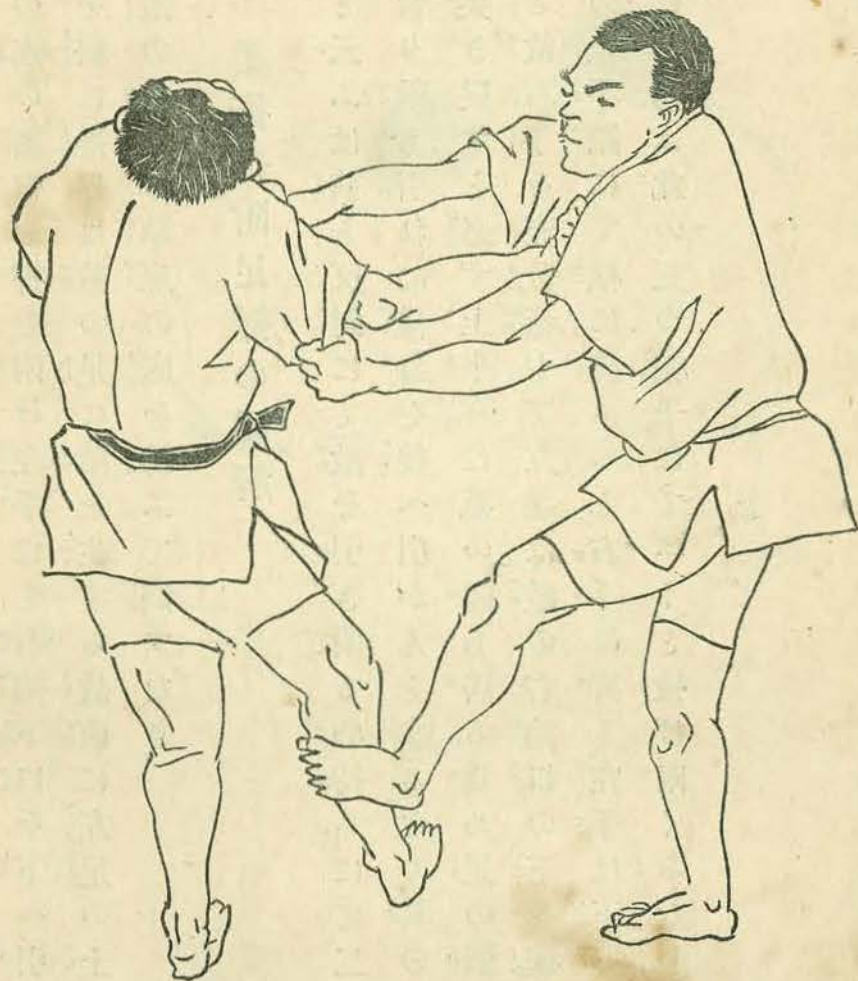
柔術内踝掃圖解

雙方共に兩手は同じに取り互に引き出さんと爲すなり。敵の左

柔術内踝掃圖解

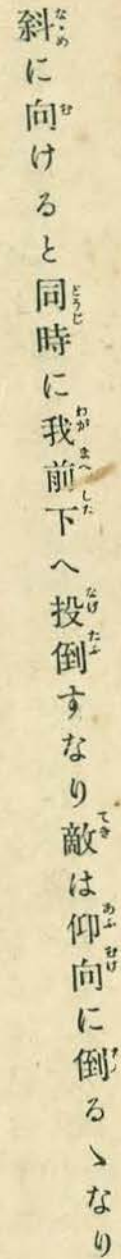
押 附 足 掃 圖

此形の前はと反對にしに敵に向へ附身
の崩れを見込で足を拂ふ處の圖なり



柔術内踝掃圖解

に共方双に故事るれをの骨と分隨は投股内大の此
成に手上はてし意注に古稽共成しべるへ加を意注
しべるすに様る掛てつ向に手上らかいくにり



足出る時左足の土不踏の處にて内踝の處を外へ掃ふと同時に兩
手にて敵の身體を斜めに崩して是れも三拍子揃へて術を施すべ
し。乙者は足を掛させぬやうに足を引て跳るべし。
左外れたれば又右足にて爲す兩方數度して内腰を崩し兩手のき
きたるとき敵は必ず我が術に掛かるなり。
總て亂捕の始めは斯の如くして試みるべし。
この形は講道館にては小内刈と云ひ眞揚流にては内踝拂ひと云
ふ。四肢の働き充分ならしむるが肝要なり。

此の大内股と云ふは大亂れに組打を爲す内に我が左手は敵の前
 帶なり八つ口或は袖口を握り右手に敵の上襟の首際を取り兩手
 にて上半身を崩すと同時に敵の兩股へ我が右足を差込みて敵の
 左内股を押上ぐる心持にて兩足先及兩手に力を罩め爪先を左へ

柔術内股投圖解
 試合及稽古の時は負けたる者は疊に手を打ちて負を示すべし投
 げたる者は直に眞之位第二圖の姿勢となるべし。共に倒るゝ時
 は双方身體を打附けて痛を感じることにあり故に注意すべし。

柔術内股投圖解

双方大亂に組打つ内左手を敵の右袖下なり八つ口を捕へ右手は
 敵の右首際の襟を捕へ兩手に力を罩めて我が體の左斜に引き附
 て左足を後へ一步引と同時に敵の兩足の中心の處へ右足を差込
 みて敵の左足を持ち上る時は必ず腰挫けるより此の機を外さず
 右足を點線の如くに高く持ち上げ敵を左へ腰を据ゑて廻はし投
 げに倒すなり。
 兩手と右足の業なれば腰弱くて敵上手なる時は己れが先に倒る
 る事あり。
 此形は前の大内股と同じことでも前とは違足先をまげずになす

内股投圖

此の形の如く成にとる敵は腰を挫く第
 一は時上持てれ入を力に先足右が我てしと一
 りなものも倒へ横り左が我は敵も又



柔術外股拂圖解

外股掃圖

此處は敵を抱込に如の線點に既で込抱を敵は處の此
強拂く時三拍子揃へて力を入る肝要の處なり
圖能く參照し線點に心を留るべし



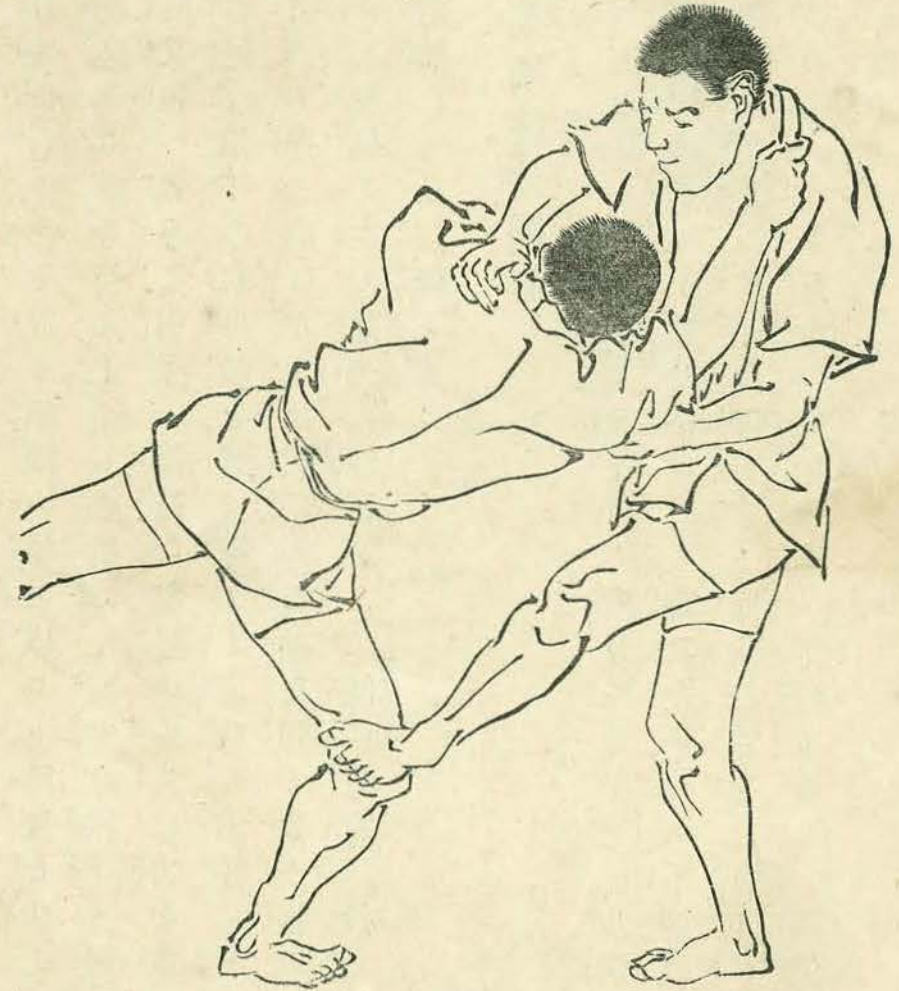
此の圖は双方共に八つ口を取り相撲の様に成りし時腰を少しく
後へ相手を抱込み其體を持ち上ぐる心持にて爲せば相手も腰を
引くなり其時又後へ我身を引くと同時に左足の爪先に力を罩め
て左へ向け右足は相手の右外股を強く掃ふと同時に右手にて相
手の左襟を持つて押し附け左手は相手の右袖を強く我が腰の邊
まで引くなり。點線と左り足先に注目せよ。既に我左へ投るな
り此形を講道館にては浮腰と云ふ。

柔術膝挫圖解

此手は前と同じなるが相手より我を押し附け来るを二三歩退き
ながら相手の右足に重みが乗りかけた時我左足の土不踏の處
にて一圖の如くし相手の膝頭に押し當て同時に右手は押上げ左
手は強く我腰の邊へ引き落すの三拍子揃へて行ふなり。講道館
にては是れを膝車と云ふ。

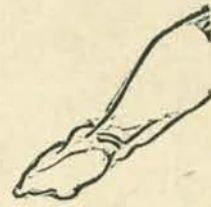
膝朽木圖

敵の右膝裏の處に折るかのみへ我が左足が先掛り
既に三拍子に投て倒す處の圖なり



圖と本文を能く参照すべし。

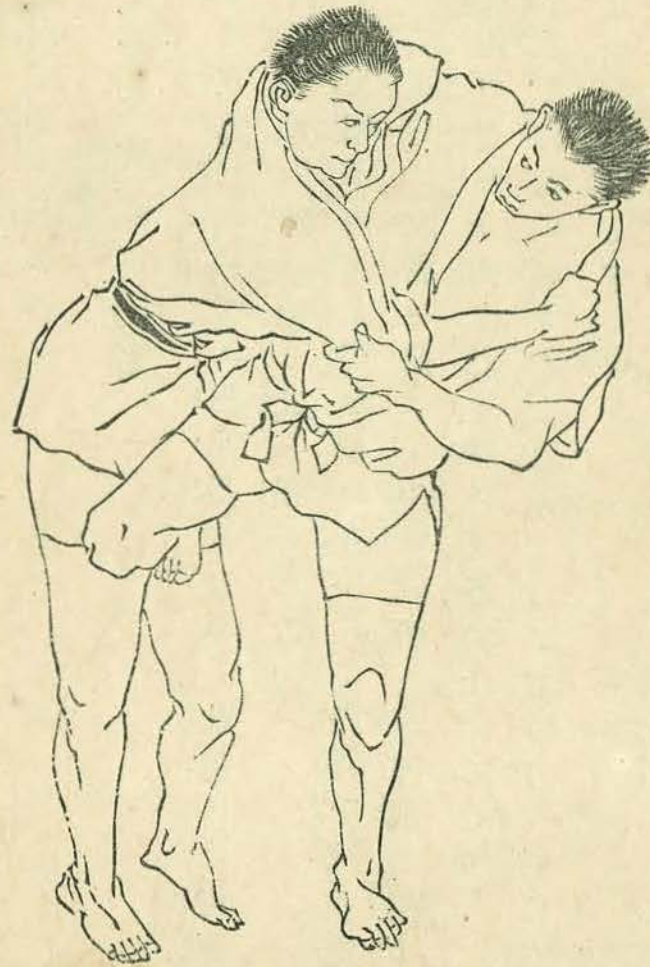
柔術拂足圖解



此の拂足と云ふは左手を圖の如くに相手の右手袖口の上を取り右手を押延して敵の右襟際を攔て相手を半身に反身にて斜に爲し我體に引附んとすれば相手も右手にて何か業を掛けんと爲すに
より其れに先じて左足を成るべく左へ爪先を向け右足裏にて
圖の如くにして相手の兩脇の裏の處を強く掃ふなり。
此の形は眞揚流にては股拂と云ひ又裏股とも云ふ。
稽古の時は投けても左右の袖一ヶ所の袖口を攔みて手を放さぬ
様に爲すべし。

右 跳 腰 圖

右膝業故腰の調子に敵て
は自由によ投にげられ者なり



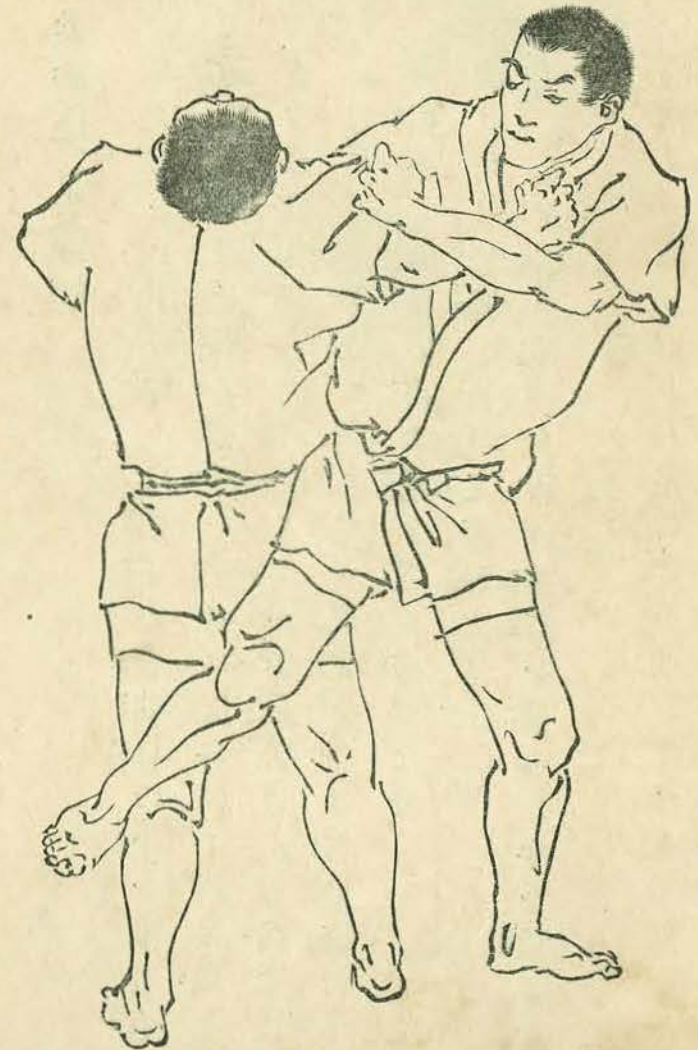
跳腰と云ふは相手の後の帯を右手にて掴み即ち抱き込む様にし

左手は相手の右袖下の處を取り右足の膝を曲げて少しく腰を下

柔術右跳腰の圖解

拂 足 圖

此圖は我はよ敵の背後に足を押當て
るに勢姿此に處るに先足右し延押を
手右附引に腹脇左が我しべるな圖ふ拂
を裏膝兩てめ込を力



柔術右跳腰の圖解

柔術拂足圖解

柔術左跳腰の圖解

一〇六

げ我膝頭にて相手の兩膝の上を摺り上げる同時に左手を強く引
て相手を我が左前方へ落すなり。圖の如く左足先に力を罩めて
爪先を左斜に向て術を行ふべし。

柔術左跳腰の圖解

凡て柔道の業は左右何れにても出來得るなり。亂捕には尙更に
て右に掛けて外れたる時は直に左に掛けるなり。
此の形は右手にて相手の左上襟を取り左手にて腰帶を掴み抱き
上る様になして同時に左膝を曲げて相手の臍下へ押當て相手を
我が右斜に引附けて我が曲りたる膝にて跳ね上ぐるなり。
右足先に力を罩て右前に倒さんと思ふときは右の方へ斜に右爪
先を向けて立つて定法とす。
相手は美事に我が前に倒るゝものなり。是を左膝落とも云ふ。
此手は近頃流行の手なるゆゑ下手者に試みるべし乙者も直に手

を打て仰向に倒るべし。

左跳腰圖

此の圖は左の掛り處の相りな方四肢
合工の能く能く照しべし

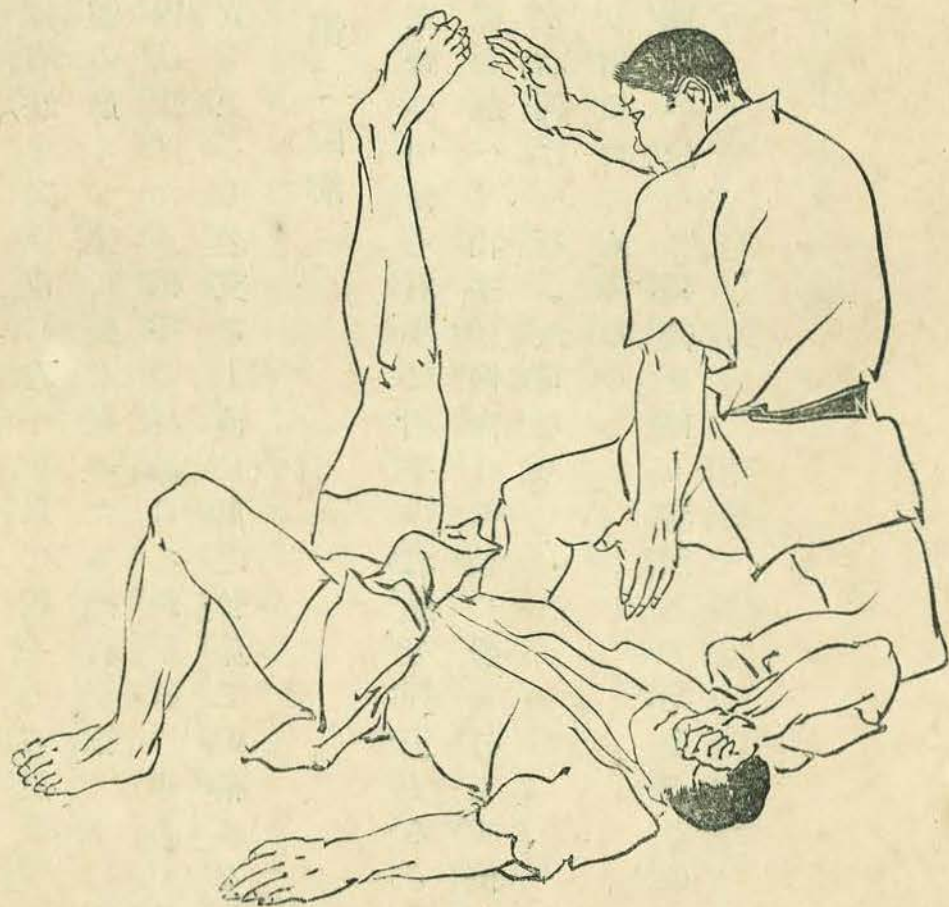


柔術行連の投第一圖解

此の形は入り亂れて戦ふうち隙を見て相手の襟首を左手にて掴

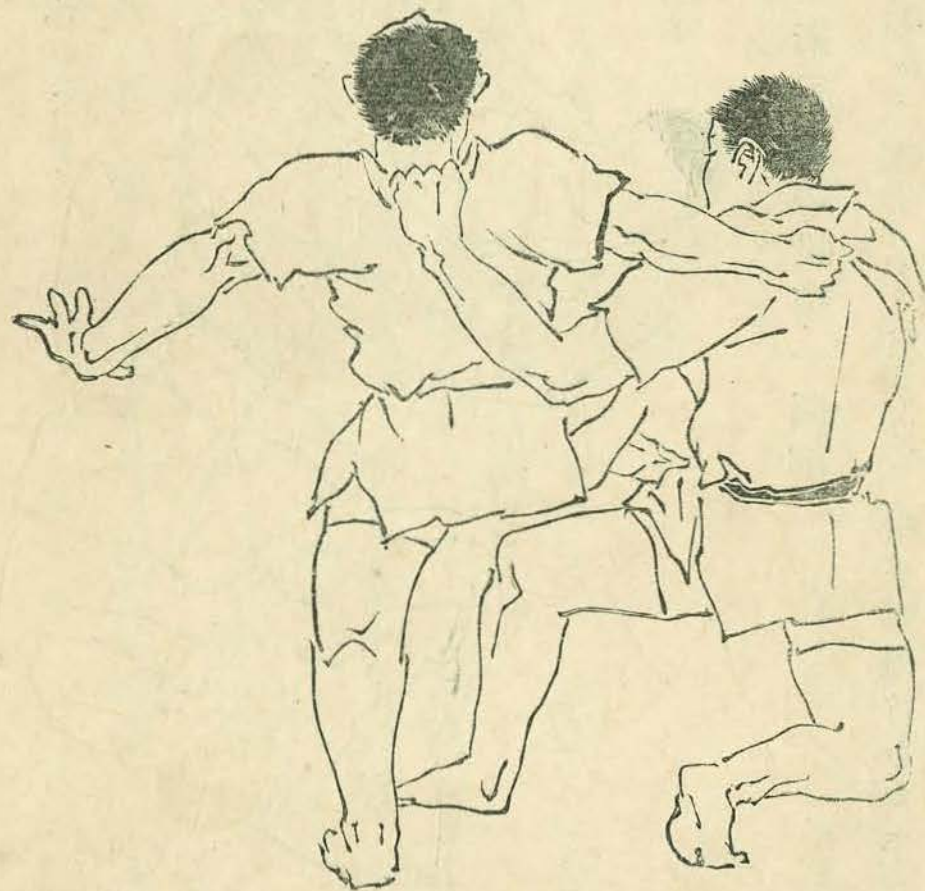
連行の投第二圖

我が背後に倒れし乙は手足を打て
て倒れたるなり



連行の投第一圖

此乙の手に掛たりたる能く参照し
べし



同第二圖解
 二〇
 むと同時に我は右膝を突き直に右手を以て相手の右股を下より
 持上げ相手の體の崩るゝ機に乘じ攔みたる襟首を強く下に引く
 なり。初心の内は投げたる相手の身體にて踵を打つ事あり故に
 倒すと同時に立ち上るも差支なし直に眞之位第二の構になれ。

同第二圖解

左手にて我が左後へ引落し右手は相手の右股を押上ぐると同時
 に我が左足の膝を越へて相手は仰向に背後に疊を打ちて倒るゝ
 なり。是れは左右何れを行ふも可なり。

殺當流の形より出でたるものなり。
 第一圖及第二圖迄の處をば挿畫を能く參照して業をおこのふべ
 し。

柔術引込業圖解

此の引込業と云ふは双方三尺餘りの距離を隔て氣合を計りて相
 手の右手首を我れより先に敵を引攔み引込む時は身體の重みに
 て右足を集まり中心傾きて倒れかゝるなり。

又圖の如くなりし時透落なり背負投なり種々業は掛るなり。是
 れを解かんとするには五指を揃へて爲し指の先に力を入れ(エイ)
 と一聲斜に下すなり如何なる強力の者と雖も解けるものと知る
 べし。

我も亦相手が解かんと爲す前に早く業を掛くるなり。
 總じて武術は先ずれば人を制すと云ふ喩の通り心を靜に相手に
 先んじて速に業を掛けるが肝要なり。

引込業圖

乙者は甲者に引かれ時堅く成らぬやうにな
る故に業の者甲とるなくたか體身しべす



甲者敵の首を引附けるに
は四肢と腹下を込めしる

柔術首投の圖解



是は相手が我が胸倉を左手にて取るを我が右手を高く延して相
手の腕を押下げ外れたる時に相手の左脇下へ右腕を指込みて
相手の顎に五指を―圖の如くに掛け同時に左手を相手の左股を
下より持ち上げ我が身體の右後へ開くと同時に(エイ)と掛聲と共

首投の圖
 甲は右脇へ乙を廻し投に倒しなす
 乙は右掌で打て仰に向倒しべる



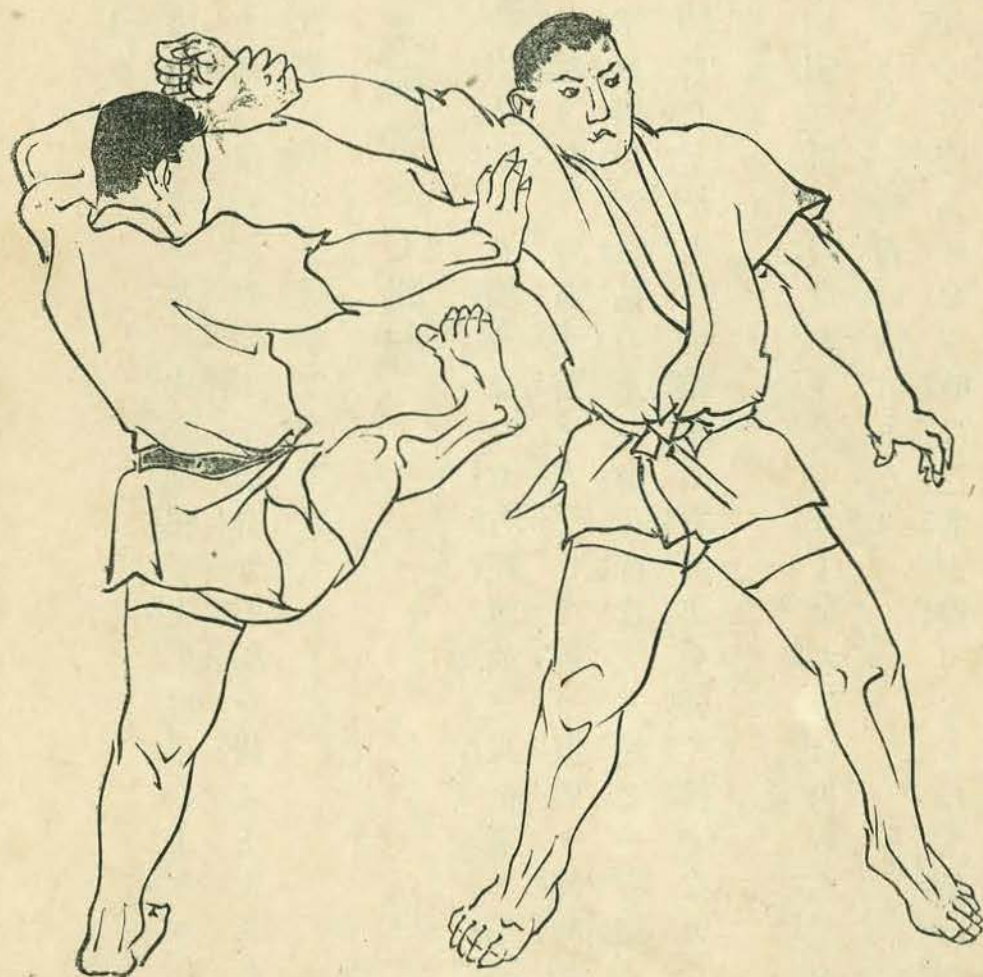
に投げ出すなり。
 此の首投は淺山一傳流の名人故金子勝平先生得意の手なり。
 圖にも記せし如く最初は對顔して居升が右腕を掛るとたんに此
 姿勢になる此業は随分と美事な形なり。

柔術蹴落とし圖解

是れは前圖の引込業より續くなり双方距離約三尺を隔て第一眞
 之位の構にて起り相手の右手首を左手にて握り我體を同時に魚
 鱗へ引き右掌を相手の右乳の上の處へ押當て左足を一步深く踏
 み出すと同時に右足を上げて相手の右股裏を強く拂ふなり。是
 れを裏落とも云ふ。
 相手が仰向に倒れ掛る時は左手を引き上げ右手は押し右足を上
 ぐると共に(エイ)と一聲投げ附けるなり。
 甲者は圖の如くの形になる時は乙者が堅くなるほど敵は強く

蹴落し圖

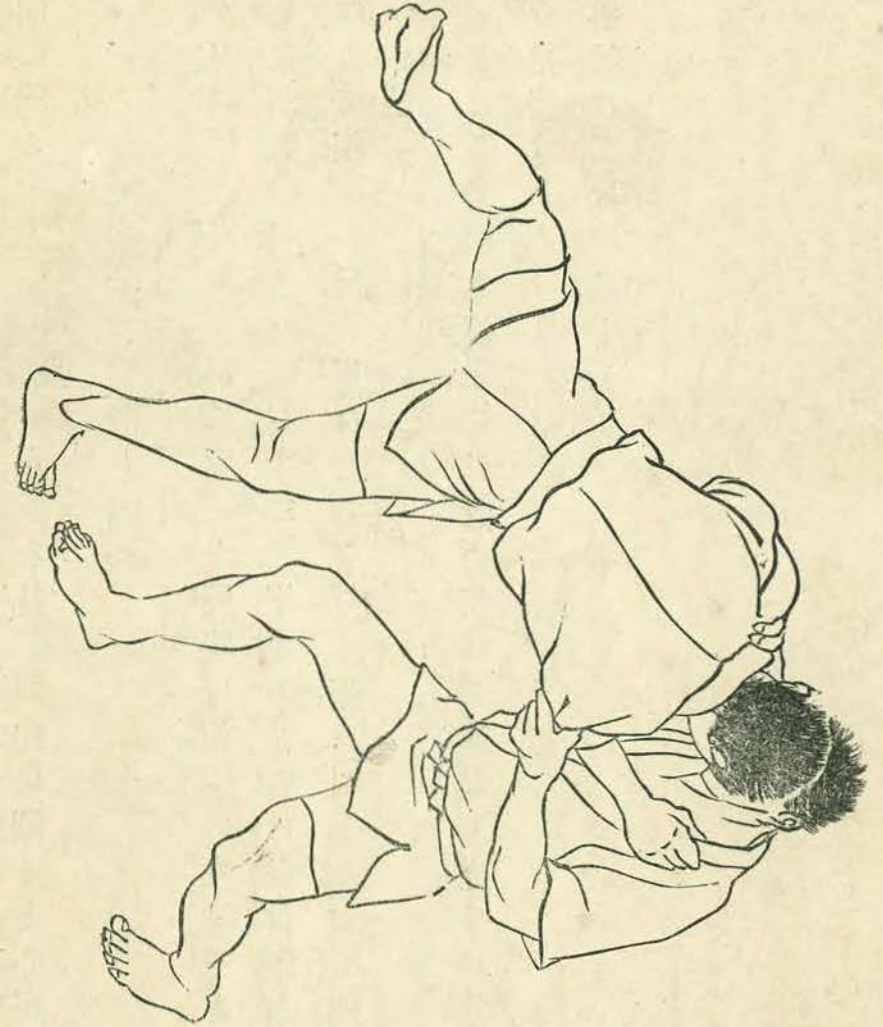
甲は者乙に股右同を裏に力に込め
仰向に倒るべし



仰向に倒るべし。乙者も左掌を打て仰向に倒ると心得るべし。

柔術透き落し圖解

我が身體二尺斗り左斜に引くと同時に相手の左袖下を握み居る
手を我が體へ引き附け右手にて相手の左肩口襟首際を取り手を
延ばして相手の體の崩れたるを見て腰を引きながら四肢先に力
を入れ左へ斜に投げるなり。
此の業は互角の者以上には骨の折れる業なり充分に修業して妙
處を自得すべし。
講道館にては浮落と云ふ。



透き落し圖
甲乙者共に此の形は充分に能く掛りやすから自得すべし

裏股拂圖

柔術裏股拂圖解



互に業を戦はし居る内相手の身體を斜に崩して我左爪先を左へ

横車圖

此の方圖は生寫の内に能く取つてあてられる處の圖
 此の方圖は生寫の内に能く取つてあてられる處の圖



柔術横車圖解

柔術横車圖解
 二二〇
 向けると同時に左手に掴みたる相手の右袖を下に引付け相手の
 左襟を取りたる腕を押延ばし同時に相手の太股裏の處を我右脛
 にて爪先に力を罩めて掃ふべし。
 相手は我左前方へ仰向に倒るゝなり。講道館にては大外落と云
 ふ少し違ひあるも大抵同じなり。

此の圖を初めに能く見て取組の樣を會得すべし。
 双方數度業を戦はし機を見て相手を三四歩後方へ引付け相手の
 引かれ来るに附入りて直に左手にて掴みたる八ツ口を我が左腰
 の邊へ引き附け右手に相手の左襟首際を持ち上敵の體を斜に崩
 すと同時に左足の土不踏の處にて相手の右足横を(エイ)と掛聲と
 共に拂ふて我が左隅の處へ投倒すなり。腰を捻る時少し右へ爪
 先を向けると業が綺麗見事なるゆへなり。

矢倉落第二圖

甲は我の前に乙の者、乙は左の手で抑へて向ける
に倒れたる圖



柔術矢倉落第一圖解

此の方の生寫に實に能くできたり
参照すべし

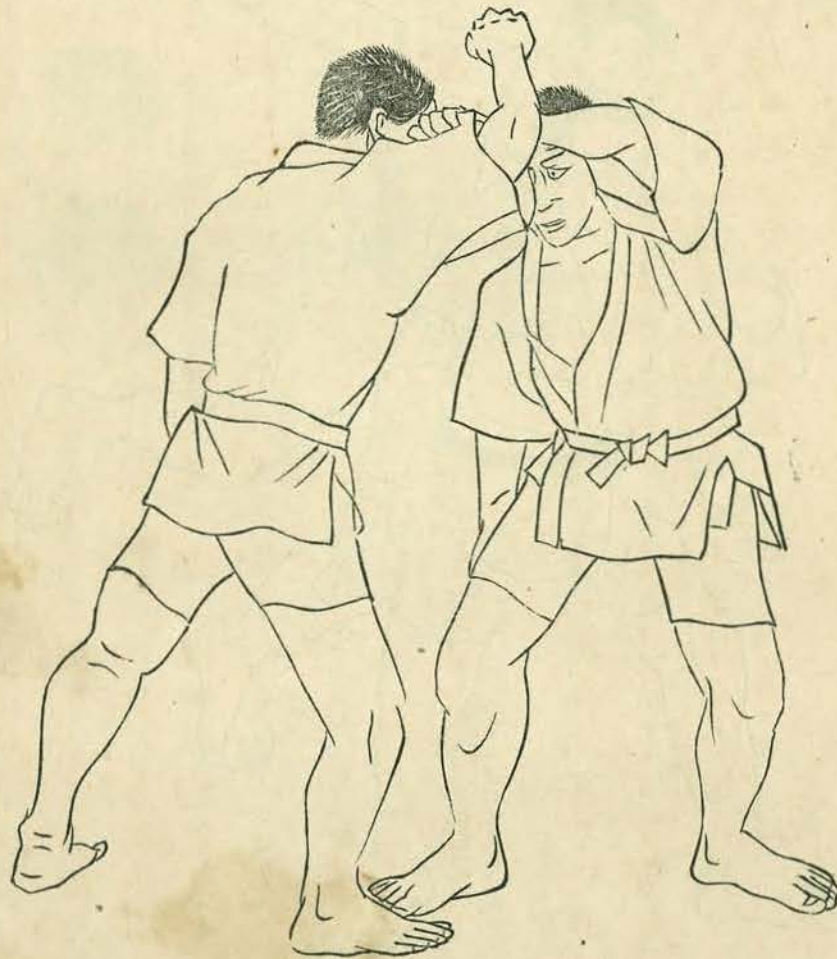


此の横車と云は随分諸流にても必ず有手なれば掛方をばなるだ
けされいになすべし敵の體の崩し方が肝要であり四肢の業の内
にも他流で多く用ふる手は成だけきれいにするを妙と云べし。

柔術背負投第一圖解

背負投第一圖

甲は者乙は者よ打込で腕たきを腕たきに如の圖に
直になるべし



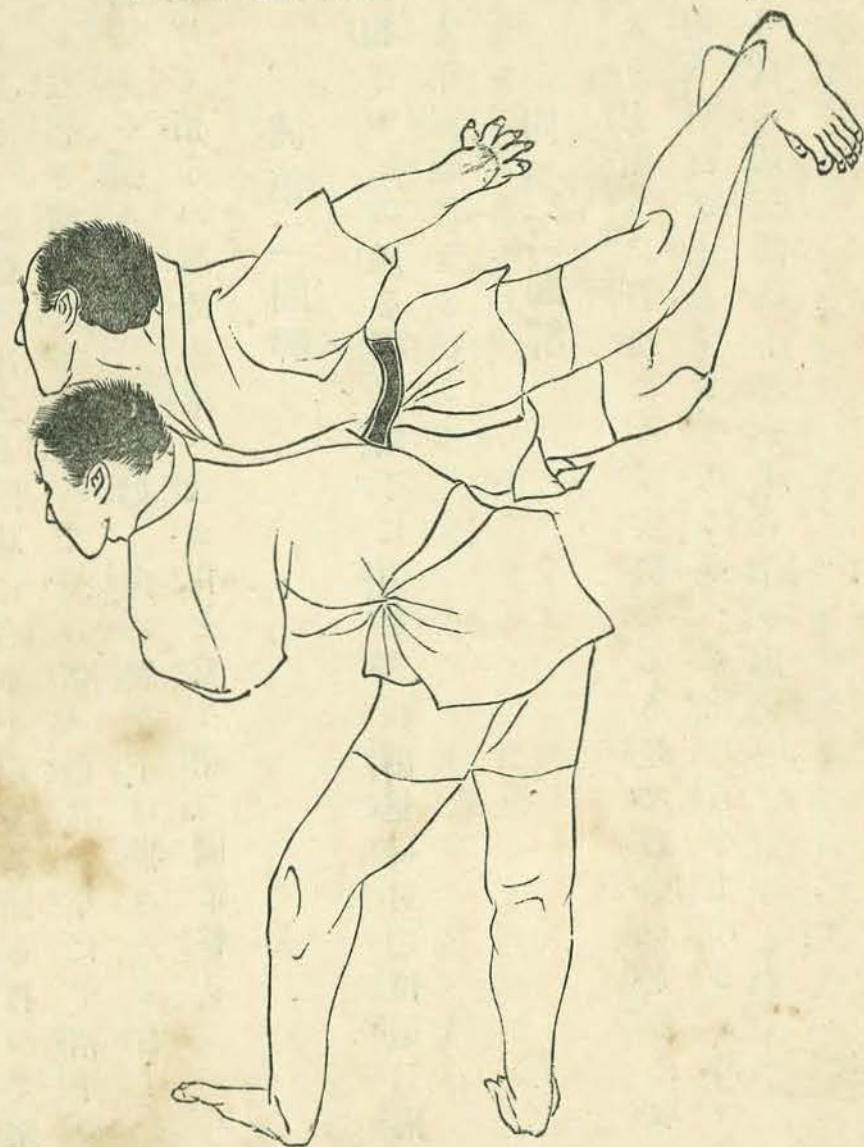
此の形は最初に行ふものなり双方相手の様子を見計り第一圖の如く我が左足を後方へ三尺餘引きて膝を突き爪先を立て右膝を圖の如く立て腰を下げる同時に左手に掴みたる袖口を左隅へ引附るなり。右手は一旦引附て直に押上ると共に相手の足を我が足にて妨げ其體の崩れたる處を左手にて引落すなり。

同第二圖解

此圖は我が前へ引落したる處を示すなり。相手は左手を打つて倒るゝなり。總て背負投、股投、衣被等の業にて相手を投げて我身は眞之位第三圖の如く構へて左右の袖なり襟なりを片手丈は持ち居る事を失念すべからず廣き道場に於て多人數稽古を爲す場合遠く投ぐると他の者に突き當る等の失態を生ずるなり。

同第三圖解

此處の兩人は繪の首にもと居てぎすり上たれたらし察と故しり困にのす寫に時の生寫に



背負投第二圖

甲は乙の腕を直に上げてつかめなを腕が我に直て上げつかめを腕の者乙は者甲しべす倒にへ前が我に氣



相手が右足を一步踏み出すと同時に右拳を以て我頭を打つて来るを我が左腕を横一文字に構へて受け留め直に左手にて相手の右手首の處を掴みし第二圖の如く速に腰を下け掴みたる右手を持ち上げて相手の腹部の處へ我が背を當て第二圖に移る。

同第一圖解

右手は相手の二の腕を掴み兩手に力を入れ兩足は眞之位第二構へと爲し第三圖に至る。

同第三圖解

第二圖より引續き背負投になす姿勢なるも是は寫生が充分に取されず兩人の首が上りすぎて居るゆへに繪に首を上げると書づらきゆく此の第三圖は小書を能く讀み玉へかし。

此の圖は横面を見せたるなり。我は相手の右腕を被ぎ込むと同時に左足を左後方へ引いて我が股を覗く心持にて投ぐる時は相手は向へ遠く投げらるゝなり。

同第四圖解

此の投げたる圖に注意すべし。第三圖の如くになると同時に（エ）と一聲我右肩を透して腰及兩手先に力を入れ相手の腕を早く外すべし遅くては相手と共に倒れて怪我をする事あり注意すべし。

しべる倒く輕て打を手左は者乙



るたげ投に向抑へ向を者乙は者甲
りな勢姿の處



背負投第四圖

柔術衣被投圖解

柔 術 教 科 書

双方入り亂れて術の妙を戦はし居る内相手の兩胸襟を右手にて一所に掴み相手を向へ押附け其の腕の下を相手の兩脇の下より潜り同時に我が右膝を突き爪立ちて左足を左後方へ大きく開き左手は相手の左足の向臍の處を持上げ我が股を覗く心持にて頭を充分に下げ右は引落す左手は跳るの三拍子にて(エイ)と一聲投げ附くるなり。

相手も投げらるゝと知らば右手は掌を外にし己の額の處へ附圖の如くし横に爲し右足を踏出して倒るべし。

此の業は眞揚流の形にあり背負投と云ふ流派もあり。矢倉落の第二圖と唯足の位置が違ふだけなり。

柔 術 教 科 書

衣 負 投 圖

此の手は諸流の内に有り手なれば亂捕にも能く用ふる者なりしを圖に能く參照すべし



柔術眞捨身第一圖解

眞捨身第一圖



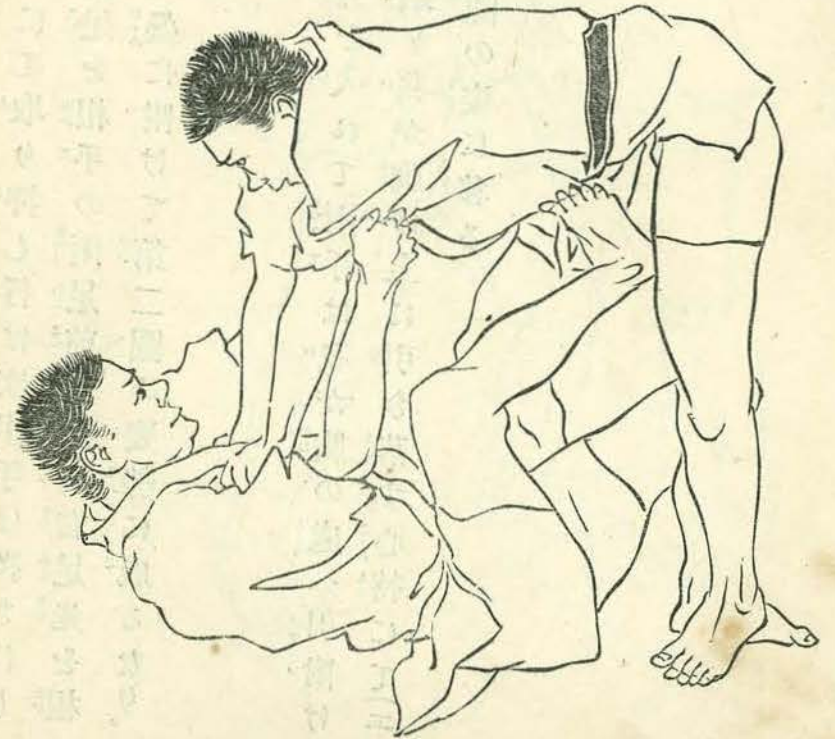
此の形は相手の兩襟を兩手にて取り押し行けば相手は押されじ
と押し返へす力を利用して左足を相手の兩足前に留め右足先を相
手の臍下に押當て直に臀を疊に附けて第二圖の姿勢に成るなり。

同第二圖解

兩手を少し締め左爪先に力を入れて兩手は我が胸の處へ引附け
右足は跳ね兩手は相手の頭を我が胸の上に引き落す心持にて(エ
イ)と一聲三拍子揃へて次圖の姿に移る。

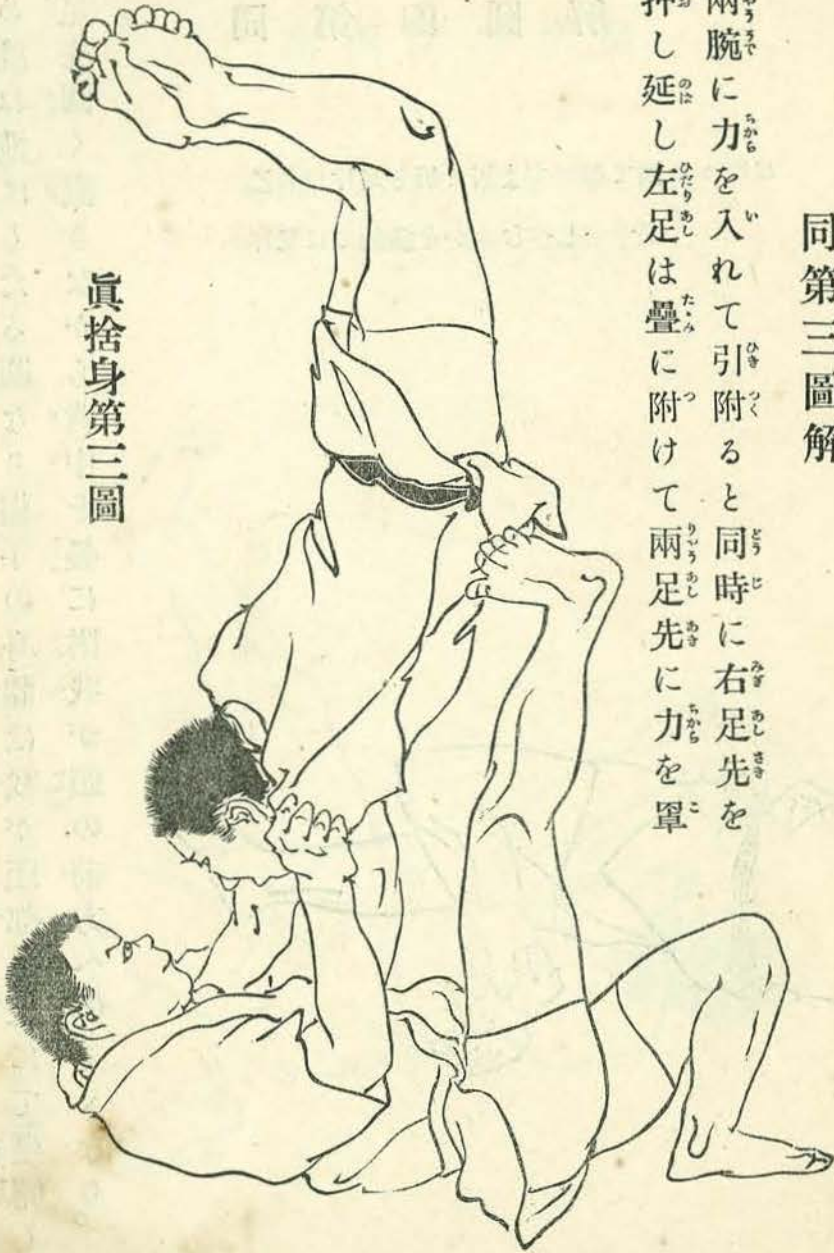
眞捨身第二圖

甲は既に乙を投ずるなり
甲は右足を延ばし、
胸を我の手に引寄せ、
附る處なり



同第三圖解

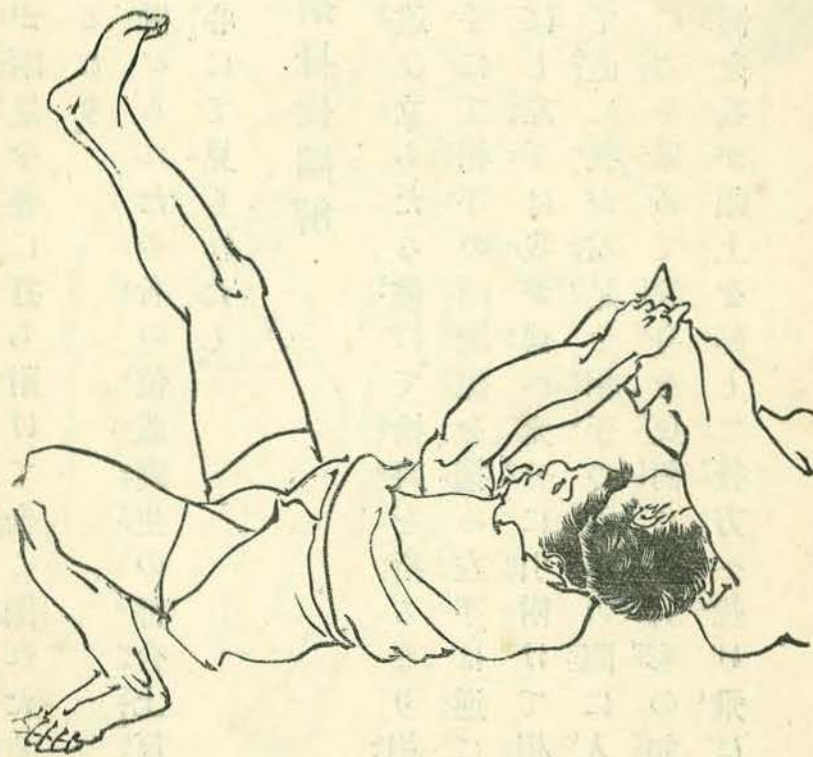
兩腕に力を入れて引附ると同時に右足先を
押し延し左足は疊に附けて兩足先に力を單



眞捨身第三圖

圖 四 第 身 捨 眞

起に直りよ足右てち放を手兩は者甲
るなにへ構の三第位之真て



此の手も一より四迄を連続して一手の形なり。次に注意

同第四圖解

解 圖 四 第 同

は時ゝる倒て都がすま居て折を足片は者乙
しべむこかを袋蔭てに足片

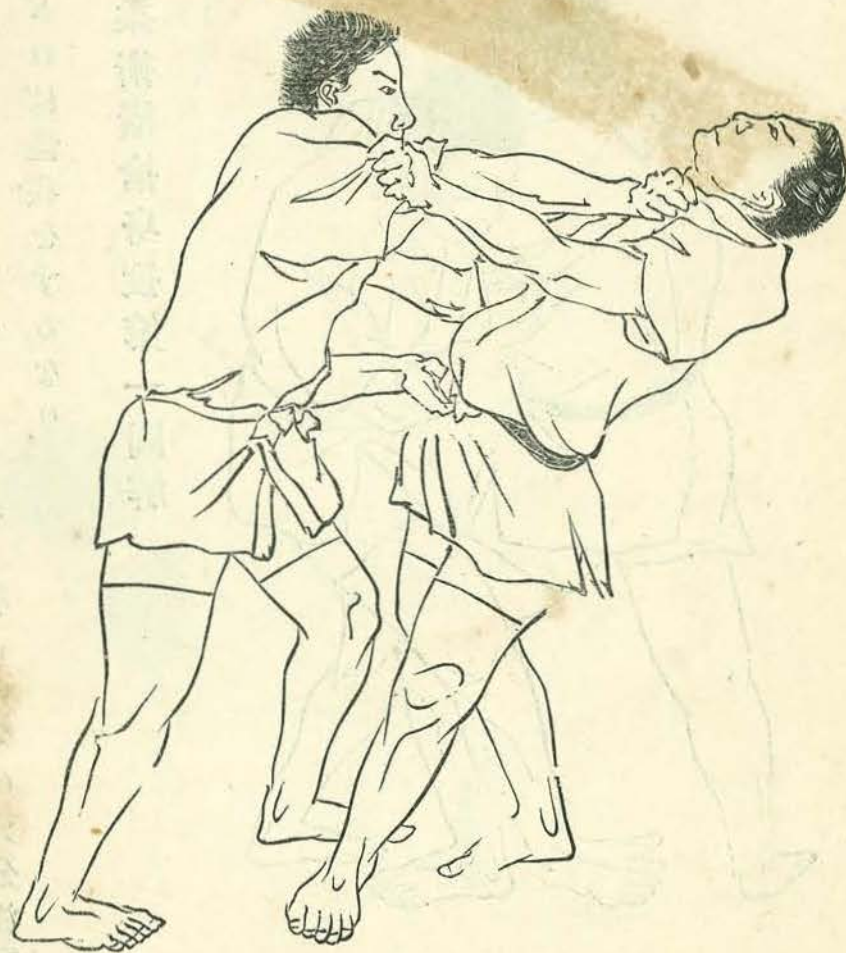


足先圓く畫きながら背中を疊に附我が頭の前方へ倒るゝなり。
め跳ね飛ばしたる圖なり相手の身體は我が頭部の上にて廻轉し

同第四圖解

立身捨投圖

此の業は甲が上手に實に美なる形に於て下手なるに氣を倒く早も者乙が事す打を肩の者乙とるや
しべる倒て打を手り



柔術立身捨投圖解

我は臀を少し持ち上げる位に相手を跳ね飛ばすも兩手は放さず
るを宜しとす。相手が兩足を疊に打ち附けて全く倒れたる後兩
手を放して立ち起上るなり。
業を掛けたるものと掛けられたる者の位置寫生の都合上反對と
なりしにより讀者其心にて見られたし。

此の形は眞捨身とは違ひ立ちたる儘にて捨身を掛るなり相手を
隅へ押し附け行き右手にて相手の兩胸襟を掴み左手は逆に前帶
を取り右手は押し延ばし左手は我が前へ充分に引附けて相手の
身體を反り身に崩して直に我が右足を相手の兩足の間に入れ左
足は其儘に爲し下腹に力を罩めて我身を反對に半月形の如く充
分に反りて相手の身體を我が頭上を越して後方へ投げ飛ばすな
り。

横捨身投第二圖

諸流に此の横捨身はなす處へ又圖にても
ま處あるに此位で略す



横捨身投第一圖

此横捨身は實に寫生にしきく者故
掛口を記す圖なり



柔術横捨身投第一圖解

柔術横捨身投第一圖解
實地の場合は充分遠くへ投ぐるなれど稽古の時は充分注意して業を施さざれば怪我をするなり。

柔術蟹挾投圖
柔術蟹挾投圖

此の形は最も他派の掛すりやすき手にて常に此の
形を充分に稽古を強勉すべし者なり



此の横捨身と云ふは相手の上半身を崩して左脇へ我が右足を踏
み出し又左足を以て相手の右膝を押附けて相手を釣り込みなが
らに我より倒れる體の重みと右足を以て投げる事第二圖の如く
なり。

同第二圖解

相手の踏み出す右足を我が左足にて妨げ同時に反り返つて我身
を後方へ捨て身體の力で投げるなり。
此の業は最も四肢と腰業につき實に書畫にて云事眞につくしに
くき者故に上手に附て教を受けるか又教師に附て覺るべし諸流と
もに此形はある手なり。

是れは相手の右袖口の上を左手に掴み左足を相手の臍下の處へ突き出すと相手は必ず足首を握るなり。然れば直に右手を疊に突きて横に倒れ圖の如く右足先に力を入れて相手の膝裏に押し當て兩足を挟み左手は左後方へ引附右足先に力を罩めて相手を後へ引落して投げ倒すなり。此の手は随分美事に投げ得るものと知るべし。

眞揚流にては故吉田千春先生最も得意の業なり。

柔術倭返圖解

此の形は立捨身と反對にて相撲の大間貫と云ふ形になり相手が我が腰帶を持ち業を掛けんとする時我は又相手を上から抱き込みながらに下腹に力を入れ足は眞之位第二圖の構へになり我身體を半月形に反り返ると同時に(エイ)と掛聲して兩腕に力を入れ我が頭上より後方へ相手を抱上げ投げ附くるなり。

倭返し圖

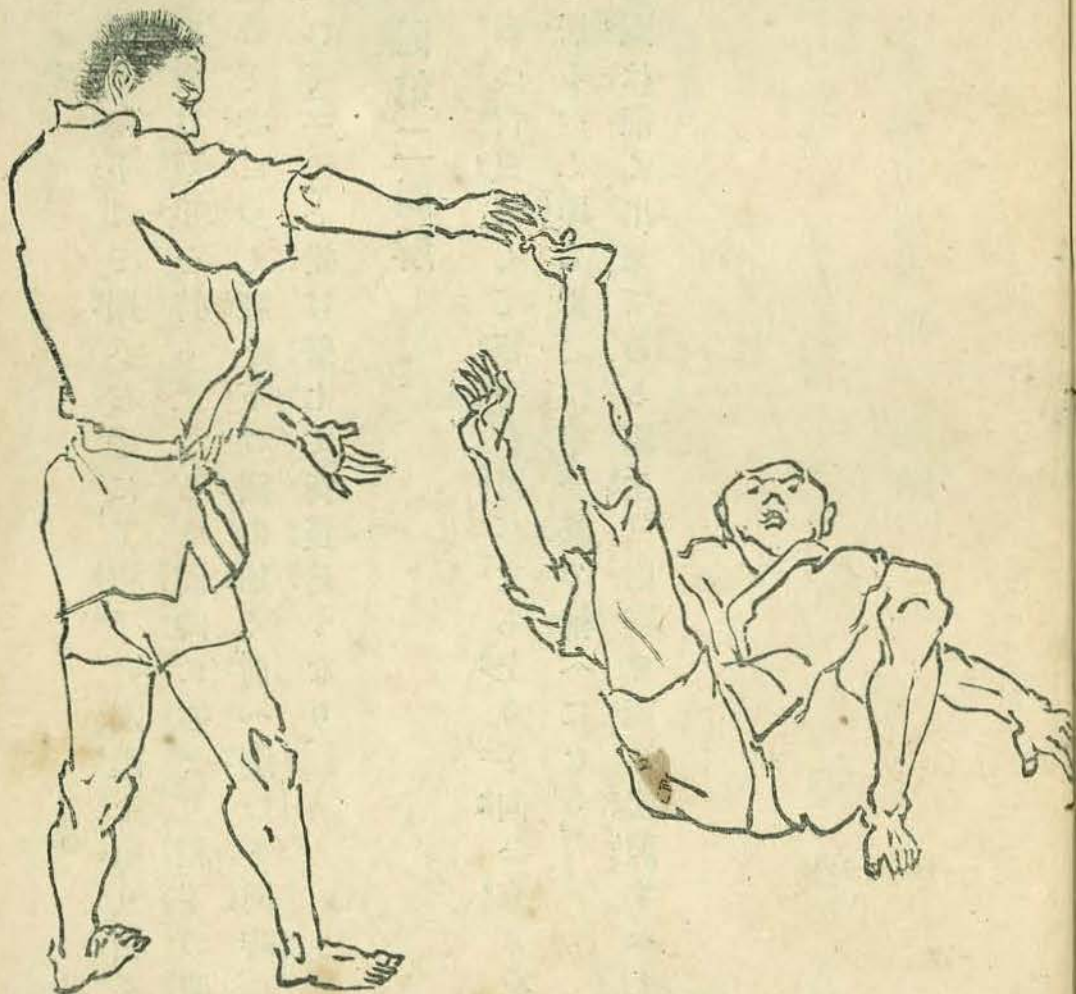
此は能く人のやる手なれども見所の
立時は注意すべし



總じて頭を越して投げる時は必ず首を左右何れにか傾けること

背負落第二圖

甲は我右肩よりし倒て腰に眞之位第二の構へ
乙は左を掌りて打仰に向し倒し圖



背負落第一圖

此の背負落は澤山あ追々讀者
の巧風をすべし



柔術背負落第一圖解

なり投げらるゝ者も共に注意を要す。
柔術背負落第一圖解

同第二圖解
一五〇
是れは右上袖を左手にて掴み右手にて相手の左襟を取り相手を左向ふ隅へ押附け兩手を持ち上ぐると同時に右より相手の腹の處へ廻り込むと共に少し腰を下け圖の如く前へ跼むと同時に總身に力を入れて(エイ)と掛け聲して背負落すなり。

同第二圖解

相手を我が前へ背負落して相手が再び立ち上り手向ひ來るを待つ心得にて居るべし即ち眞之位第一圖の構へになり。
最も此の二圖は能く出來てある寫生に附圖を能く參照すべし

柔術山嵐投第一圖解

前のと稍同じ様なるも是は相手を前に引出して直に右手を以て

山嵐第一圖

甲が既に敵を投げんとする圖なり



相手の右肩口の稽古衣襟を掴み左手は相手の右袖口を取り同時に我が腰を少し下げて圖の如く姿勢右太股より足先に力を入れて

山嵐第二圖

敵を我の前に倒し左袖口を保持する處



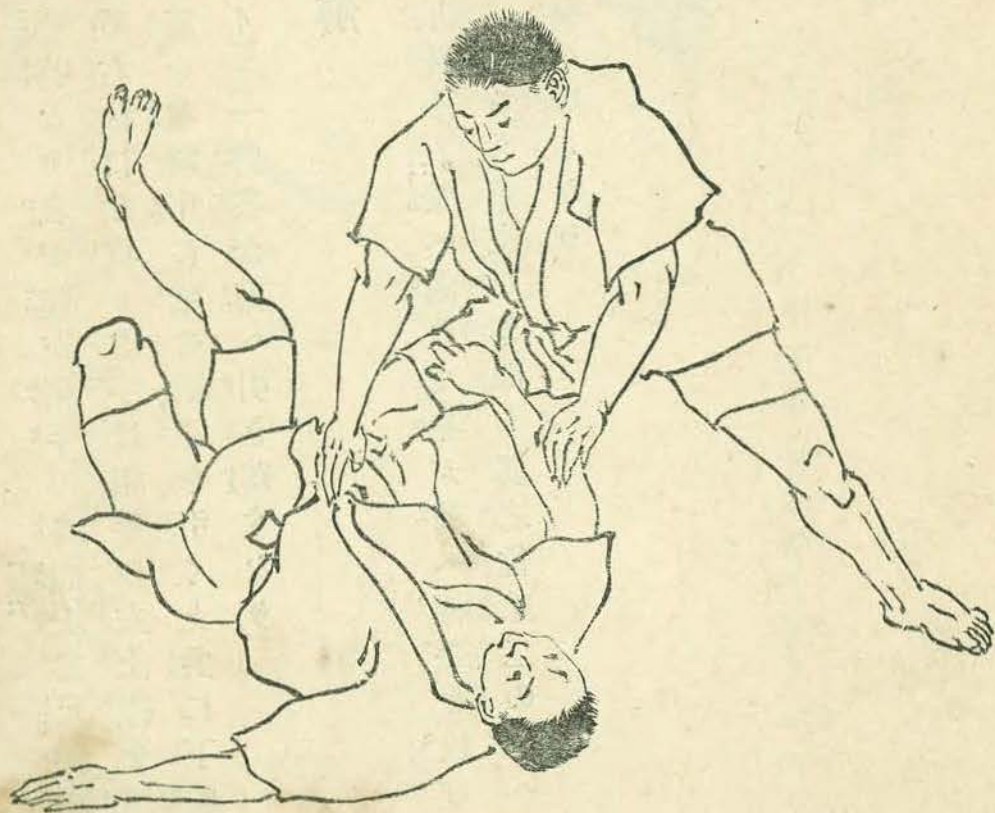
同第一圖解

相手の右太股に掛け足先より持ち上げて相手の身体を浮かせ同時に我が肩に掛け背負投げる心にて我が前へ引落すなり。投げる時左爪先を左斜に少し向けると美事に投を見へるなり。

此の手は背負投拂腰等を合併たる様な形なれども此は兩手足の業にて投げるときは美事に常の稽古の時試るべし。此業は相手を投るも稽古の時は片手は袖口を持ち居るを宜しとす。此の山嵐と云ふは講道館にて附けたる名なり。揚心流眞揚流、關口流にては山落と云ふ。最も此形を他流にて能くする者ゆゑに大略の文章にてしめす事なり。圖を能く参照すべし。

手操り投第一圖

乙は倒るる時左手を打て仰向に倒るべし



手操り投第一圖

敵をつかぎ上げたる處の圖



柔術手操投第一圖解

此の手操投といふは前の背負落と略同様なり。是れも相手を釣

同第二圖解
 一五六
 り出して背負投げるの心持なり我が體が相手の身體と二尺餘隔
 ち居る時に左手は相手の右袖口を取り右手は相手の左上襟を逆
 に攪み圖の如に相手の腹を我背中に載せ兩手を引くと共に下腹
 四肢の先に力を入れ(エイ)と一聲我が前へ引き落すなり。

同第一圖解

相手を投ぐる時に左足爪先を左後へ向けて我が前へ相手を投げ
 直に起き上り打ち掛かり來るも差支なき即ち眞之位第二の構へ
 にて下腹に力を罩めて構へ居るなり。

腰投第一圖

此圖は腰入と同様のなり

柔術腰投第一圖解

我が右腰を相手の腹部へ差入左手にて相手の右上袖を攪み右手



にて相手の左後方帯を攪みて押し相手の押返す力を利用し左足

同第二圖解

腰を人て敵を抱上たる處の圖

同第二圖解
 を相手の右足右方に置き右足を相手の兩足の間へ突き込むと同時
 に腰を跳ね上げ左手を強く引くなり此の三拍子を揃へて行へ
 は美事に倒せるものなり。



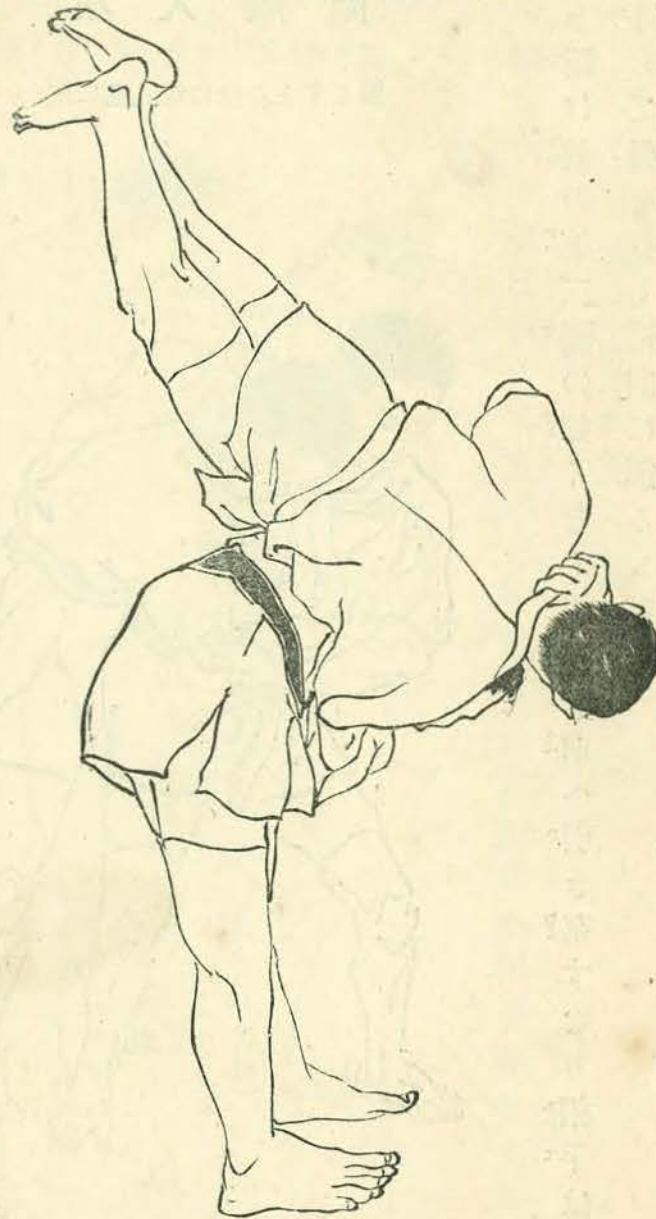
柔術右入腰投第一圖解

我が腰の掛たる處の圖

足先に力を入れて左手を引き相手を抱へ込みたる圖なり我が前
 へ落とし投げるなり。相手も左手を打ちて倒るべし都而腰業は手
 を引く時に兩足の先に力を入る事なり腰の構へは眞之位第二圖
 の如き姿勢になるなり。



右入腰投第二圖



柔術左入腰圖解

此の圖は前の二圖とは反對にて我は右手にて相手の左上袖を取

同第一圖解

此の入腰投と云ふは左手にて相手の右の袖下を掴み右手にて相手の左襟首の處を掴み兩足を揃へて相手を少し押し附け行き押返す力を借り直に腰を臍下に入れ跳ねると共に左手を引き右手は一旦押して引く心持にて(エイ)と一聲我が前に引き落すなり。

相手を引き込んで我が腰を下に跳ね上げて前へ投げ倒れかけの圖なり。兩足は爪先を八字形に踏み投げ終らば左足を約一尺餘り横に開きて構へを爲すと知るべし。又投げられたる者は左手を打ちて兩足先と共に倒るべし。最も此投形は都而同構へてに投倒す者と知るべし。

大腰投第一圖

敵を抱込に身入にたりなる圖



柔術大腰投第一圖解

此の圖は前と又反對にて左手にて相手の右袖口を掴み腰を少し

下て右の方へ入身に腰を持ち上る時は必ず相手の身體崩るゝ故

左入腰圖

左に抱込に投とすなる圖



引き附け前の第二圖の如くなして我が前へ引き落すなり相手は右手にて疊を打ち仰向に倒るゝなり

り左手は後帶を持ち相手の右より我が腰を深く差入れ相手を抱き込みて我前へ(エイ)と腰を跳ねると同時に右手を右腰の邊まで

に右手を敵の右腰の邊を抱込兩足先に力を罩めて引附くると同時に腰を跳上る時は第二圖の如くなるなり。
第一圖より第二圖に至る姿勢を能く見るべし。

同第二圖解

此の第二圖も前々と同様なるが兩足の踏み處が少し違ふなり。
入腰、腰投、大腰等は、大略同じ業なるも少しの違ひある爲め名稱も夫々違ふなり。
我が左前へ引落て投げ倒せば相手は兩足と左手とを疊に附けて仰向に倒るゝなり。

大腰投第二圖

腰を切上抱上て既に我が前に投げ落す處の圖



柔術右抱落投圖解

此の圖は相手の左脇の下へ右手を差入れ相手の左腕の自由を妨

圖一第投落抱右

相手の右の奥外袖を掴み相手を抱き上ぐる姿勢となり右腰を横に持ち上ぐると同時に左手を強く引き右手先に力を罩め次圖に移る。



我が左腕を圖の如くに高く相手の袖を掴むも宜腕にても場合により隨意とす。我が體は相手の腹部へ右脇腹を附けて左手は

柔術右抱落投圖解

圖二第投落抱右

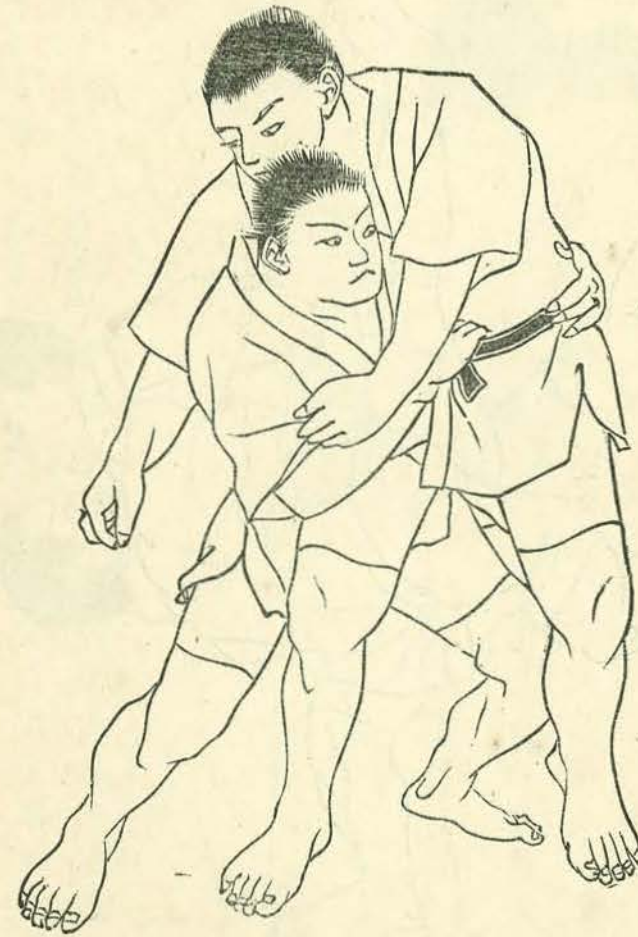
乙は者左手打て早く倒し手しはをれ知とるすをちまやあに身自ばずさな



柔術左抱落第一圖解
前圖の姿勢の如く三拍子揃へて我が左前へ投げ倒すなり投げたれば直に眞之位第二圖の構へを爲し殘心を爲すべし。

柔術左抱落第一圖解
左抱落第一圖

我より乙者を左抱に込腰を引て持



是れは前と反對にして我が左横腹を相手の腹部に附くると同時に左手を右脇の下へ差込んで腰の處を深く抱き込み右手をば逆に持ち兩足先に力を入れて少し腰を下げ直に腰を延ばしながら第二圖の姿勢になるなり。

同第二圖解

此の形は兩足を寄せて腰を延ばして立ち上ると同時に相手を抱き込みたる處の圖なり。我が腰を左へ捻ねりながらに我が左後方へ投げ落すなり。相手は右手先を打ちて俯向に倒るゝなり。我は左足先に力を入れて左後へ開き殘心を附成相手が起き上り再び掛り来るを待つ構を爲すべし。此の第二圖は抱き上げたる處にて是より直に後へ投げるなり。講道館にては此の第二圖を

は帶落と云ふ。

左抱り落し第三圖

抱込で既に左へ腰を延し落す處

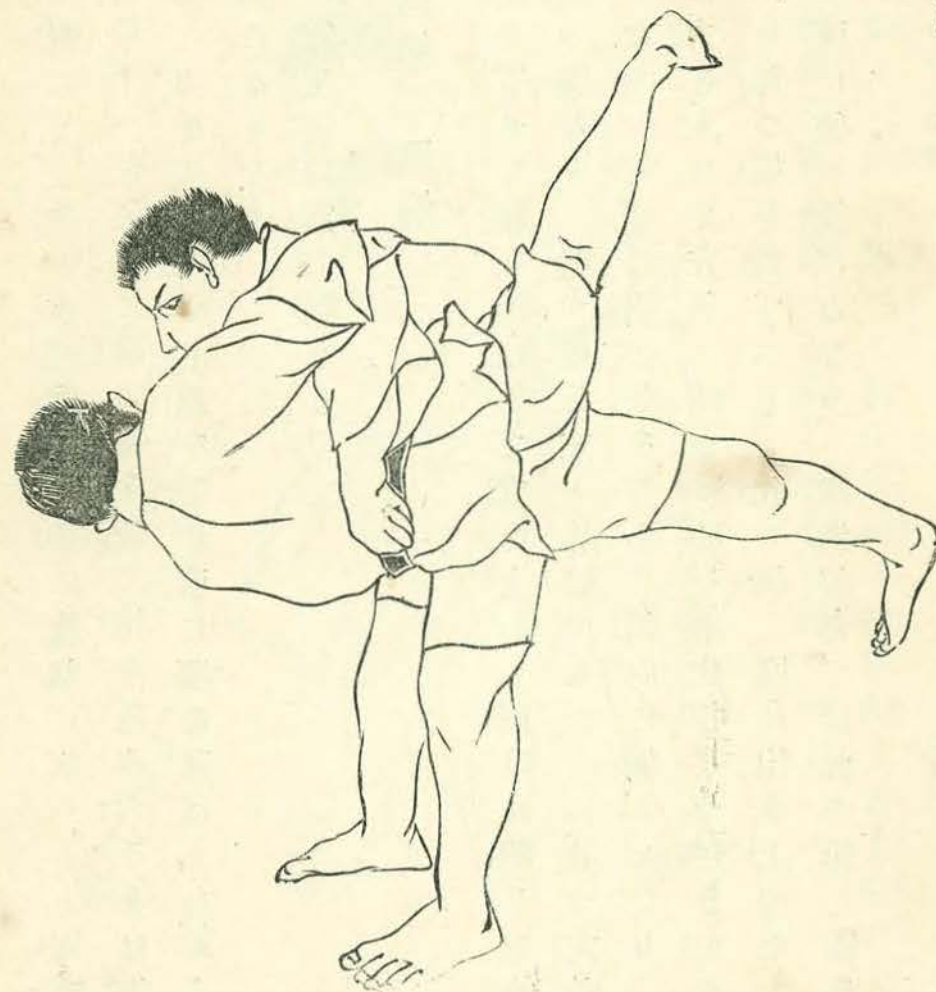
同第三圖解



同第三圖解

左抱り落し第二圖

兩足踏揃て左手を敵に抱込で地を達するたれ
處の圖なり



同第二圖解

卷落の圖

此の形の諸流にて能く形なるなり



我が左手にて相手の右袖口を取りながら我が體にて相手を背負

此の圖は横面より見たる様に寫生したるなり畫師が苦心の存する處を察せられよ。

柔術卷落圖解

ふ心持ちにて圖の如くに爲し右腕は相手の右腕に重ねて手首を持ち直に臀を持ち上ると同時に我が右肩口より相手を兩手を引くと同時に巻き込みながら我が頭を左斜に背負投同様の心持にて前へ倒すれば相手も我が體に巻き込まれて倒るゝなり。此の形は講道館にては外卷込と云ふ是も左右出来るものなれば其場合に応じて業を施すものと知るべし。

柔術卷込投圖解

此の卷込と云は前の卷落よりは實に美事に業が掛るなり只右手を相手の左肩口より首を卷込み左手は下より相手の右奥袖を取つて我が腰を相手の右下腹の處へ兩足を揃へて少しく腰を下げて圖の如き姿勢に至れば直に臀を跳ね上ると同時に我が右肩より我前へ兩手と腰との三柏子にて投げるなり相手も左手を打つて仰向に倒るゝなり。

卷込投圖

此は敵の腕を持て身體を浮たし圖なり

柔術後腰圖解



投げ終らば眞之位に爲る事は度々云ひたる如し。

柔術卷込投圖解

後腰圖



此の手は倒る時強く頭を打事あり
未熟の内は早く手を打て倒るべし

柔術後腰圖解

移腰圖

此の圖は乙が抱上て既に投とんとす處



柔術移腰圖解

此の後腰と云ふは講道館にて附けたる名稱にして他流にては後
 捕と云ふ。雙方術を戦はし居る内隙を見て相手の背部に廻り直
 に背部より左脇の下に我が左手を差し入れ襟を取り右手は帯の
 前を掴み同時に相手を反身に爲し腰と兩足に力を入れて圖の如
 く敵を抱上げて直に左へ投ぐると見せて右隅へ投げ又は右へ投
 げると見せて左へ投げるなり直に俯向に倒る故に相手の上手な
 る時は投げらるゝも身體を地に付けず四肢に力を入れて四つ這
 ひになるなり。初心の内は投げられたれば右へなれば左手にて
 左へなれば右手にて疊を打ちて倒れるを宜しとす。

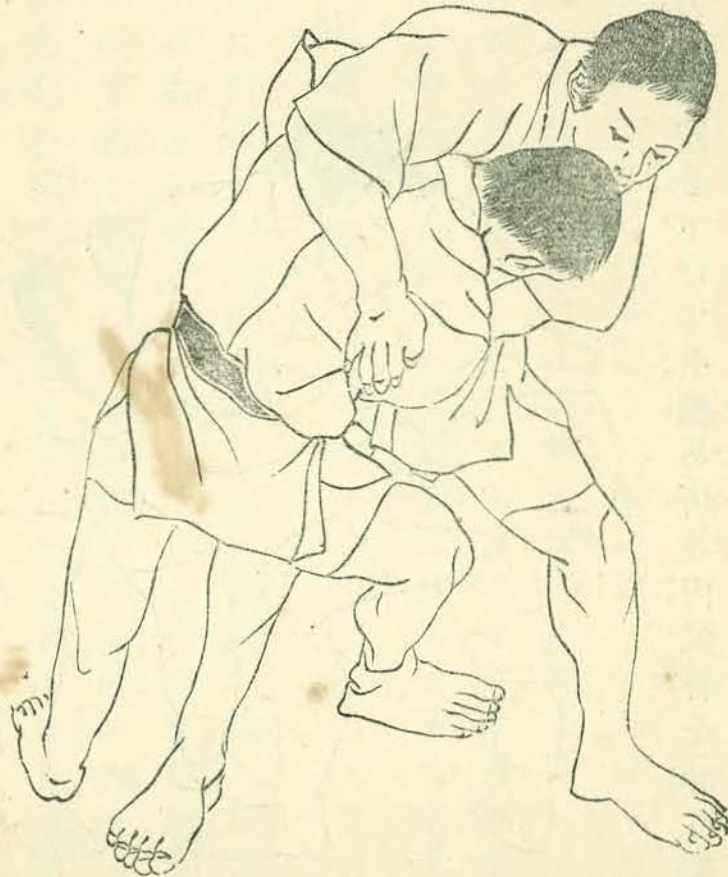
柔術釣腰圖解
脇へ投げるなり。圖は抱き上げて今正に投げんと爲す姿勢なり。
相手も右手を以て疊を打ち仰向に倒るゝものなり。
左横腹と我が右横腹の處を抱き合ふて居る我が體を右へ捻りながらに投るなり圖を能く見るべし。

柔術釣腰圖解

相手の身體を引附けて左手にて右袖口を取り右手にて相手の左腕の外部より背部の帶を取り又右足を持ち上ると同時に相手の身體を崩し下腹四肢に力を入れて相手を釣り上げ同時に入腰投の如き心持にて我が身體を左へ捻りながら倒るゝ勢にて相手を投げ倒すなり。

釣腰圖

敵を抱腰で上持て我が前へ倒らすなり

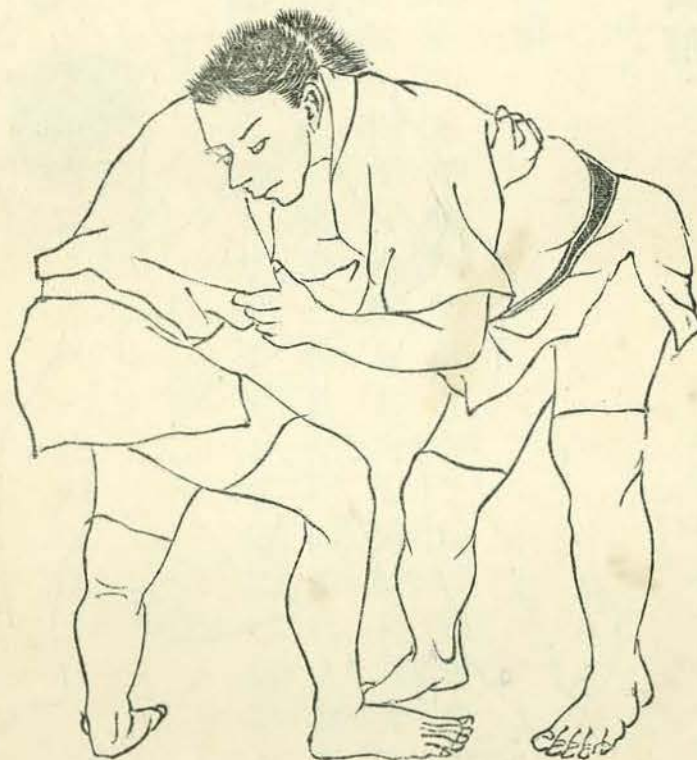


柔術腰固圖解

此の圖は双方共相摸の姿勢の如くに成り居る處なり。

腰固圖

此の方捕は圖畫が面度のなゆるへ次圖を略す



柔術腰固圖解
双方共左手は右袖口を取り相手の左脇帯を右手にて取り相手は

私の背部を掴み双方共に腰を下げて引締め居る内氣合を計りて

我は腰を延ばすと同時に右足先に力を罩めて右より左の方へ跳ね上る同時に腰を差入れて左へ倒すなり。斯の如き仕合は双方互角の取口なり。圖にては業の掛け工合解り兼ねる點なきにしもあらざれば釣腰の如くにして業を掛くも宜しとす、是れより種々變化あれど右足を外より跳るか又臥業に成るを宜しとす。

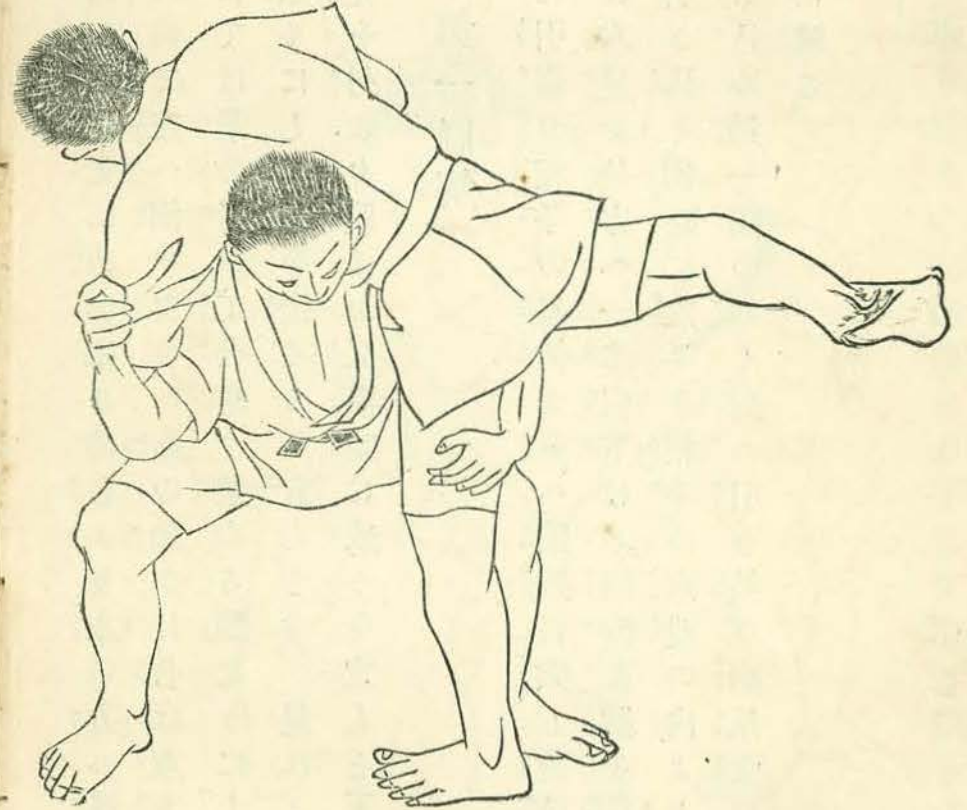
柔術肩車第一圖解

相手の左袖口を充分に引張り相手の身體が前へ蹠跟に乗じ尙強く引き右手に力を入れ右足を後方へ一歩引下げる同時に腰を踏めて圖の如く相手を引き込め同時に左手を相手の兩股の内より差入れて左太股を抱き込み第一圖の如く肩へ引き被ぎ兩爪先に力を入れ直に第二圖に移る。

肩車第一圖

敵を腰で込引を下に直げ延に採し處の敵

柔術肩車第一圖解



肩車第二圖

腰を延てし右肩口より乙者を既に投る處

同第二圖解



同第二圖解

下腹及兩爪先に力を罩め腰を延ばして被ぎ上げ右肩口より我が前に引落し投ぐるなり。
稽古中投ぐる時右手は相手の袖口を持ちて手を放すべからず相手も足を先に疊に附け手を打つて前に仰向に倒ると知るべし。
第二圖の被ぎたる手足の働きを能く見るべし。此の形は外見能く又掛り易き手なるが初心の内は可成相手の身體の我れより大なる者に掛けるは宜しからずと知るべし。

柔術隅返し臥業圖解

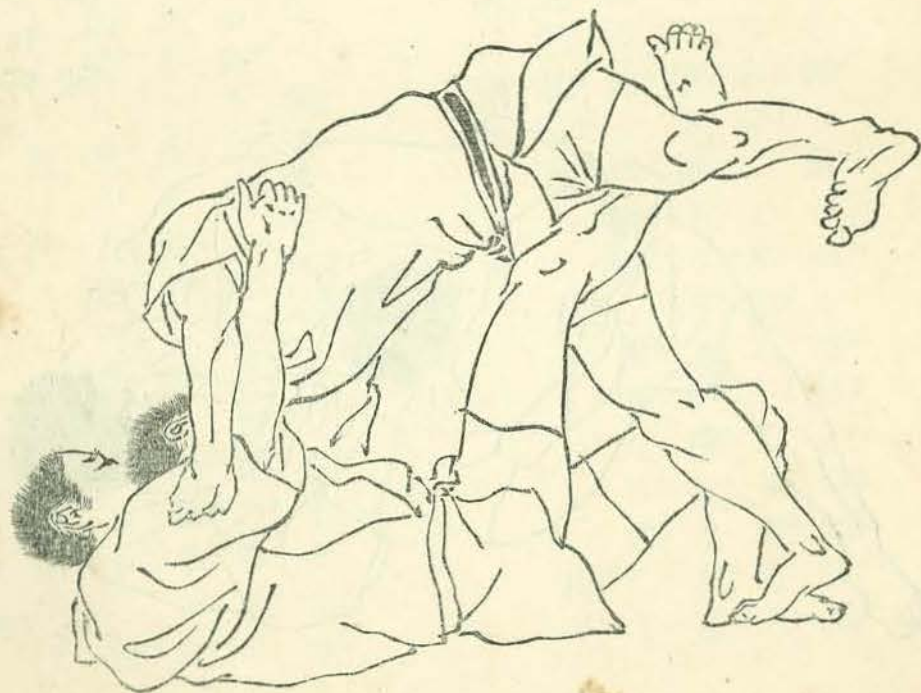
此の形は捨身業第二圖に似たる處あれども總じて臥業と云ふは柔術家には得意のものである臥業は手足の働きを自由に爲し離れ業が出来ものなり。
此の隅返しと云ふは双方共定式法にて出で我より臀を疊に附けて相手の下に成り相手は是に附入りて押へ込まんと爲す故に我が

胸の處へ相手の頭を左手にて引附けて右足先に力を入れて相手の左内股の上の處を跳ね上げ左足は相手の右足元へ附けて右

隅返し臥業圖

此の業は眞捨身のくすれから
是に至る事あり面白き形なり

手先に力を罩め相手の左脇の下の處へ押當て(エイ)と右手右足を押上げ左足は疊に附けて左手は充分に引き附け掛聲と共に我



柔術操隅返圖解
 が左隅の處へ投げるなり相手は仰向けに左手を打つて斜に左隅へ倒るゝなり。

柔術操隅返圖解

操り隅返圖

此の形は圖がよく出来てある
 参照すべし



此の操り隅返と云ふは相手が我を押し附け来る時態と仰向に倒れて左手にて相手の左襟際を取り右手にて左脇の下より差し入れて背部の稽古衣を掴み右足先の甲を相手の臍下に押當て左足裏にて相手の右内股に押當て圖の如くの姿勢に成りたる處にて直に我が右隅の處へ(エイ)と一聲三拍子揃へて返へすべし。相手は我體を越へ右手を押つて仰向に倒れるなり。

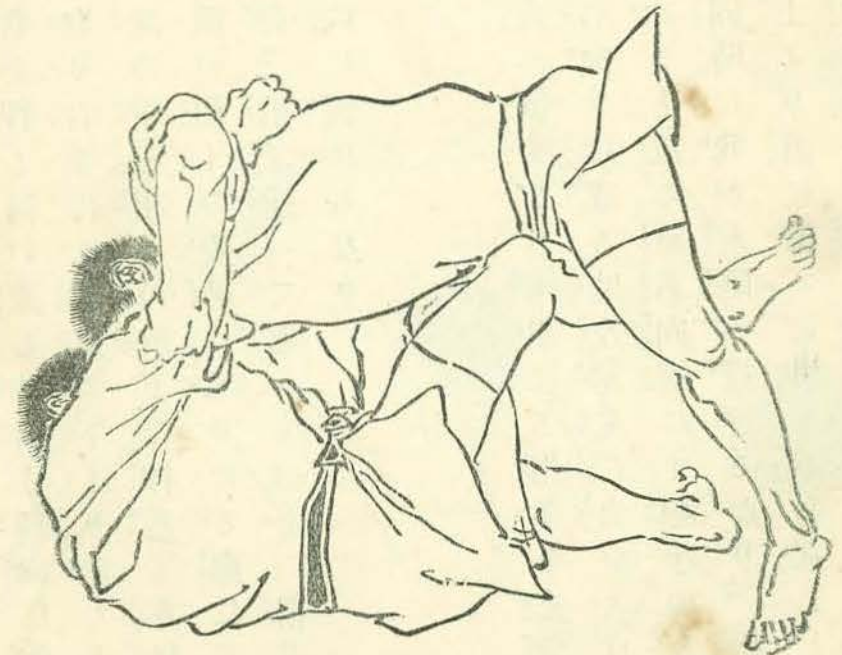
柔術達摩返圖解

此の形は右へ投ぐると見せて左へ倒すなり兩手にて相手を充分に我が胸の處へ抱き込み最初右向きに成る時左足先に力を入れ一寸倒すと見せて直に又左向きと成る時右向臍にて相手の左内股の處を強く跳ね上ぐると同時に我が左隅へ投げるなり。相手は倒れても手を解かぬ時は上より直に締めに掛かるを宜しとす。相手の腹部に馬乗に成り兩膝頭にて腹を押し附けるべし。

達摩返圖

右足先が敵の左内股に掛りて跳掛の圖

柔術達摩返圖解
隅返と少の違ひなり。



柔術引込返圖解

此の引込返も相
手の右手を以て
強く突張り來た
る時我が兩腕で
抱込みて後方へ
下りながら臀よ
り仰向に倒れて
右足を相手の兩
股の間にに入れて
左膝を立て爪先
に力を入れて臺
に爲し我が身體
を右の方へ向と

引込返圖

此の足業に足を留て敵を倒すべし



橫落圖

敵を抱込て左横へ落す處の圖



柔術橫掛崩圖解

柔術橫掛崩圖解

柔術橫落圖解

柔術橫落圖解
同時に右足先に力を罩め高く跳ね上げ相手を仰向に倒して我は直に起上り眞之位第二圖の構へを爲して相手が再び掛り來るを待つなり。我亦直に締め掛るも他の業を施すも可なり。臥業は手より足の働き肝要なり。

是れは相手の右袖の外より腕を我が左手にて圖の如く巻き込み八ツ口を取りて右手は相手の左脇の下より背部を抱へて我が臀を疊に附けて倒るれば相手は上より押附け來ると同時に相手の右足を我が内股に入れ右足裏にて足首に押附けて圖の如く兩手を先に力を込めて直に我が身體を左後方隅へ振向く心持にて我身を捨て其勢にて相手を投げるなり相手も左手にて疊を打て倒るること横捨身の如くなり。是れは講道館指南役故横山作次郎氏の得意の手なり。

橫掛崩圖

本圖如左直に投へる處



我が左手は相手の右袖外側の奥を取り右手は表襟を取り我は二
 歩後方へ後ると同時に我右足を相手の右足の外に踏み止めて

柔術跳越圖解

臀を疊に附け兩手先に力を罩めて左肩を左へ向ると同時に(エイ)
 と右膝を枕として我體を捨てながら左後方隅へ引落投ぐるなり
 相手も左手を打ちて仰向に倒るゝなり。此の形は講道館にては
 横分と云ふ。此は兩手を強く引くと同時に横捨身を掛くる心持
 にて業を施すものと知るべし。

此の業は入り亂れて戦ひたる後の臥勝負になり。我が兩手にて相
 手の兩袖口の外部を掴みて我は仰向に臥し兩足にて相手の左股
 に押當て左足は右脇の下へ掛け相手が我が腰帶を引締めて袖を
 取らんと爲したる時兩手兩足先に力を罩め相手の左足の膝を立
 て居るを(エイ)と一聲投ぐるなり我が身體の上にて廻轉し頭部前
 方へ投げたる形は眞捨身にて投げられたると同じ様になるなり。
 此の業は兩手は強く引き兩足は跳ね上る心持が肝要なり。

橫掛崩圖

本圖如直左へ投處る

柔術橫掛崩圖解
我が左手は相手の右袖外側の奥を取り右手は表襟を取り我は二
三步後方へ後ると同時に我右足を相手の右足の外に踏み止めて



柔術跳越圖解

此業は入り亂れて戦ひたる後の臥勝負になり。我が兩手にて相
手の兩袖口の外部を掴みて我は仰向に臥し兩足にて相手の左股
に押當て左足は右脇の下へ掛け相手が我が腰帶を引締めて袖を
取らんと爲したる時兩手兩足先に力を單め相手の左足の膝を立
て居るを(エイ)と一聲投ぐるなり我が身體の上にて廻轉し頭部前
方へ投げたる形は眞捨身にて投げられたると同じ様になるなり。
此の業は兩手は強く引き兩足は跳ね上る心持が肝要なり。

跳越圖

引込て既に頭上を越して向へ投る處
の圖

柔術固業の解説

總じて固業に成ると初心の内は成るべく他人の稽古を見學して我が業の上達してより行ふを宜しとす。
此の業は相手を組伏せて起上られぬ様に防ぎ又は我を押へ込みたる上の者を跳ね除ける術なり。



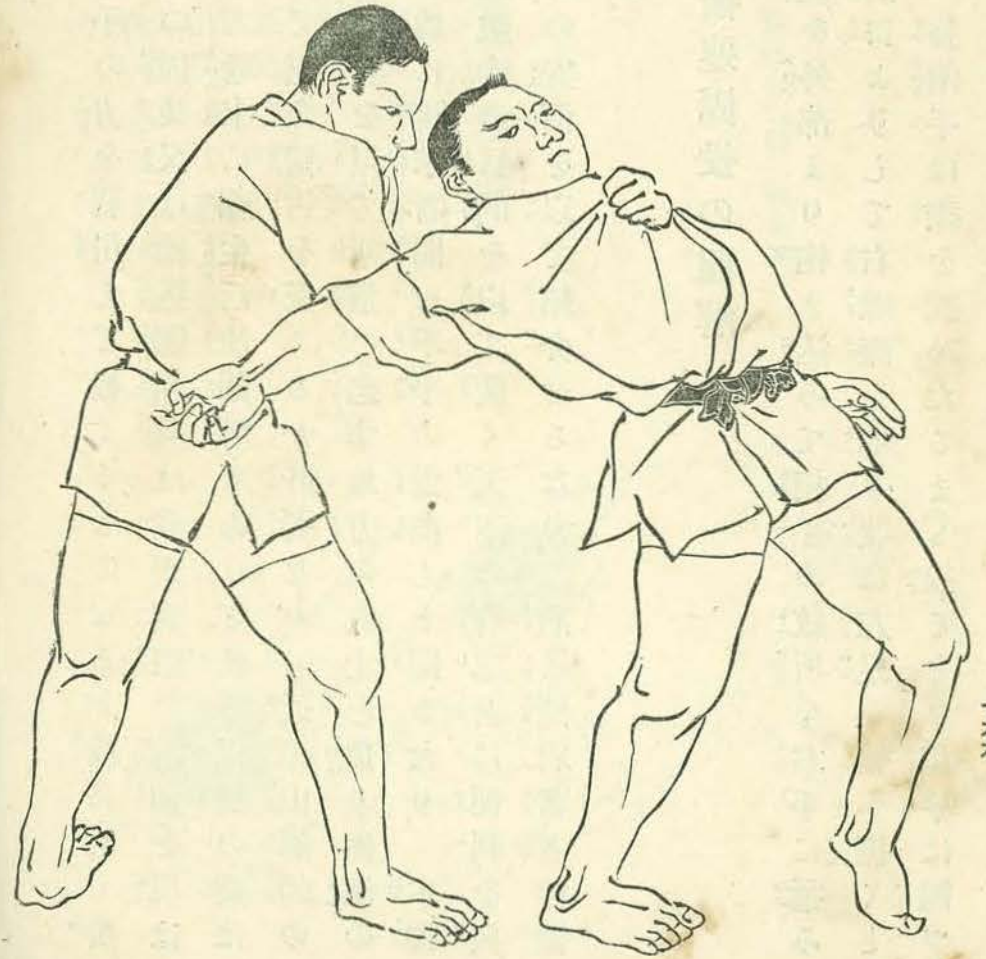
今迄の立業は相手の力を利用して投ぐるものなるが故に業も掛け易かりしが此の固業又は締込關節業は我が實際の腕前を現はさざれば出来難し巻末に蘇生活法圖解もあれど此の以後の業は上手の者に就いて充分稽古を受くるが肝要なり。近來山師的の者が大々的新聞廣告を以て斯道に志す地方の人士を偽り無法の金圓を貪り取り爲に購求者間に不平の聲高しと聞きたり。本書の如きは武士道鼓吹の目的を以て廣く天下の有志者に便利を與へんが爲め格外的安價を以て紹介せるなり。讀者諸君著者の微意を諒せられよ。

柔術連固投の圖解

是は相手の右腕を外より抱き込みて相手の紋所を右手に握み左手を以て左肩口よりして右襟際を取り我は左足を後へ開くと同時に(エイ)と一聲兩手は襟を絞めたるまゝ投るなり相手は四ツ

連固投の圖

甲が絞るなり乙は早は者乙時るなり絞が者甲しべす示を負く



這に倒れるなり揚心流にも此形あり。

柔術襟四方固圖解

此の形は我が右手先にて相手の左肩口より襟を掴み左手は相手の左脇下より右襟を取り兩股にて相手の頭を挟みて兩臂を疊に附けて起さぬ様に爲すべし我が頭にて相手の臍の處に押當て一寸横向に成りて腕を締めるなり。



襟四方固圖

柔術腰四方固圖解
 相手も前の如く兩足先に力を入れ臂より起き上る事を心掛るなり。起き能はざる時は負を示すべし。下に成りたる時は兩手先を以て倦くまでも起き上る様に心掛べし。此形は種々に崩れる事あり故に講道館にては崩上四方固と稱す。

柔術腰四方固圖解

腰四方固圖

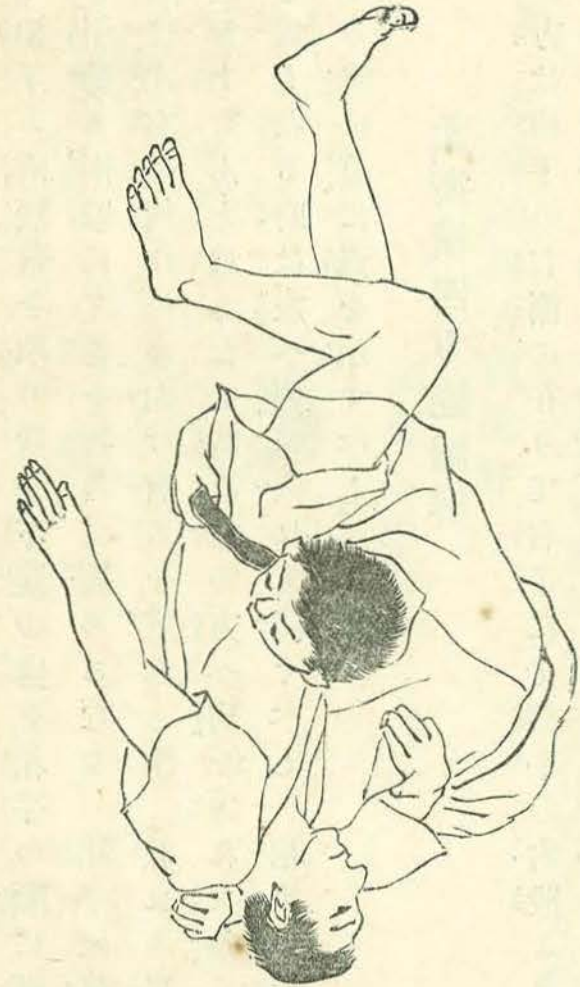


是は兩膝を曲げて太股の處にて相手の頭を挟み兩脇の下より兩手にて相手の兩腰帶を取り我が下腹の處を相手の顔に押し當て兩腕を引締め兩股にて首を挟みて固めるなり。相手は眞向き成るも顔は左右の何れにか向け居るを宜しとす。我れも又相手が右に起き上らんと爲したる時は右の方へ力を入れ又左に起き上らんと爲したる時は左へ力を入れて防ぐべし。相手も起き上る能はざる時は直に負を示すべし。

柔術横四方固圖解

此の固方は相手の右側に在りて右手にて相手の内股より差入れて帶を取り左手は相手の右脇の下より首筋の襟を取り我が胸部を相手の腹部へ押當て兩膝を開きて引き締め固む相手が起き上らんと爲す時は力を罩めて起きぬ様に防ぐなり。又押へ込まれたる者は此れに反して左手を延ばして上の者の左肩口より帶を

柔術袈裟固圖解
取り右手を添へて起上る事を勉むべし試合等に際し行事ある時は何分間とか時間を限り其の間に起き得ざる時は負となるなり。

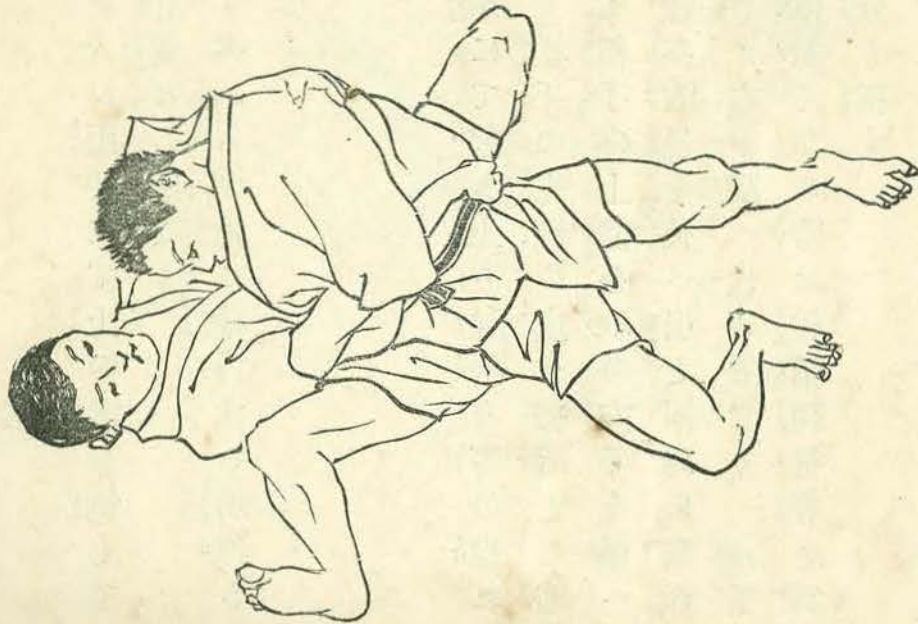


横四方固圖

此の固方は圖の如く我は相手の腹部へ右脇より掛かり左手にて相手の右腕を巻き込み右手は相手の左肩口より背部の紋所を攔みて相手の自由を妨げ兩足は少し跼めて充分に相手の腹部へ右

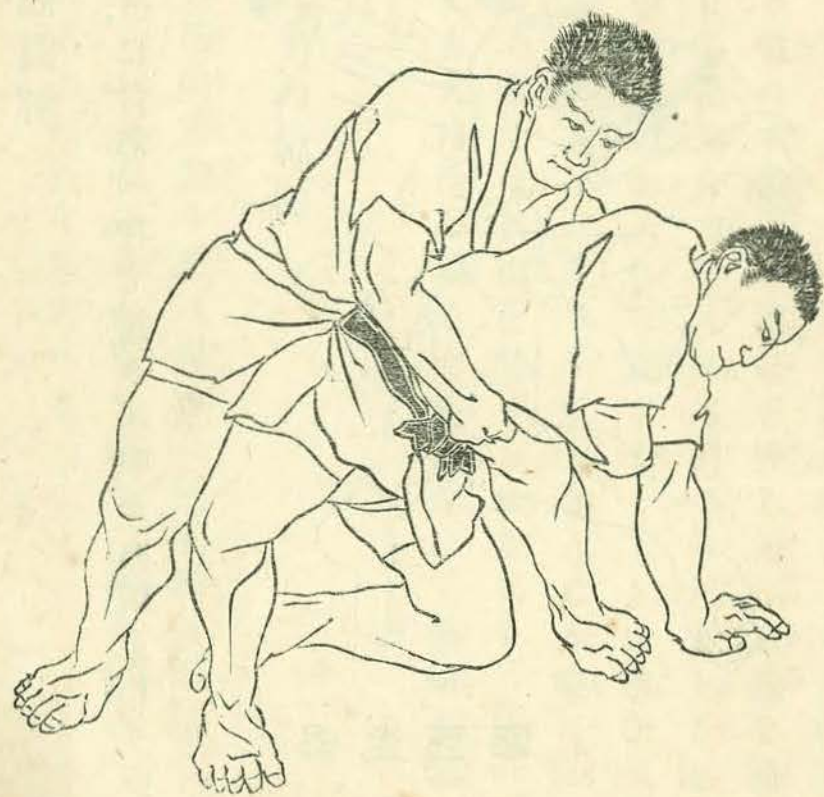
柔術袈裟固圖解

袈裟固圖



抱 返 圖

此の抱返は敵が打を負はしめるに如く
の本文は時ぬ打を負が敵はし返抱の此



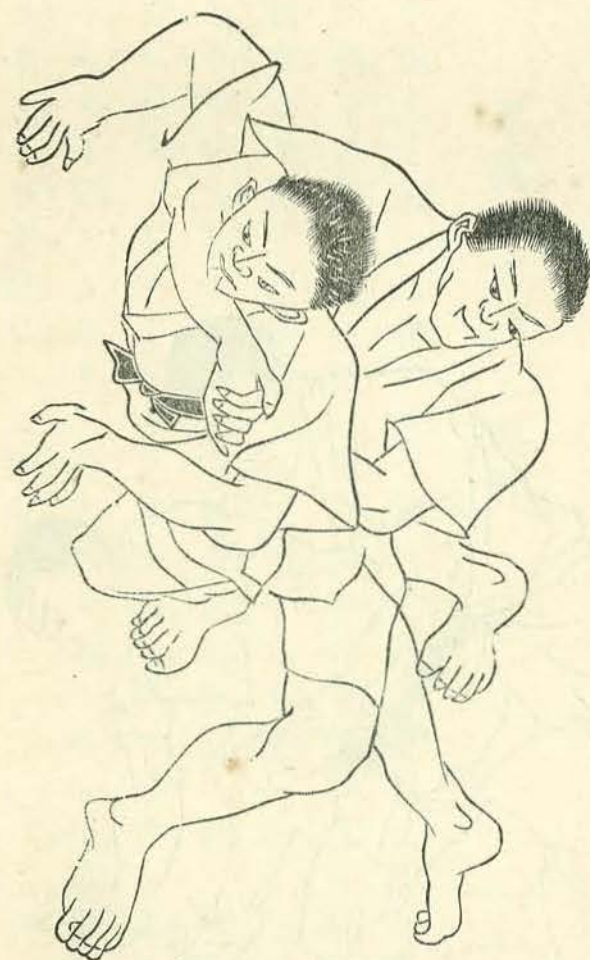
脇腹を押付けて固めるなり。
相手は例の通り臂より兩足に力を入れ兩手にて上の者を倒して
起き上らんと勉むるが臥勝負の肝要なる處なり。
臥勝負は狹隘なる場所にては爲すべからず他に稽古する所無き
時は充分注意して稽古すべし。

柔術抱き返し圖解

此の抱き返しと云ふは押へ込の崩にて起き上り又捨身等の崩れ
たる時に相手の脇の處へ摺り寄り相手の左腰の處へ密着して右
手にて背部より抱き込み手先にて相手の上襟を取り左手を添へ
て左足を相手の左脇の處へ踏み込み右足を後へ引と同時に我れ
より仰向に捨身となりて相手を我が右後隅へ役けるなり。相手
も右手を打ちて倒るゝなり。此の如くなる時は後捕裸捕等を爲
すも差支なし。講道館にては抱分と稱す。

柔術喉頭固圖解

是は俯向に倒れたる時直に背部へ押し掛りて我が右腕を相手の



喉頭固圖

柔術教書

柔術教書

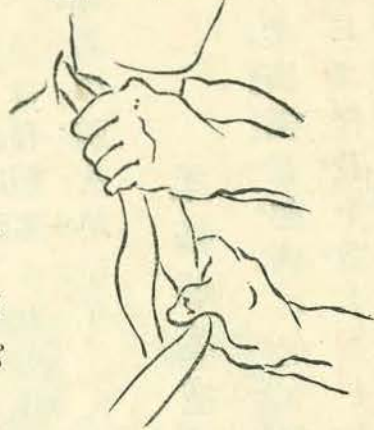
右肩口より喉に圖の如く掛けて左手は相手の左腕下より左脇へ差し入て兩手先を組み我は右脇腹の處にて押し附け右腕を締めて右膝を曲げ左膝を立ち足先に力を入れて相手の起き上るを防ぐべし。相手は四肢の先に力を入れて起き上ることに勉むべし。我は咽喉を右腕にて締め相手が左りに力を入たる時には我が左り手を持ち上げると相手は自由を妨げられるなり。此の押へ込は種類多くあれども大略は記載せし故此位にて擱筆す他は諸君の腕次第なり。

柔術締込逆手の説明

凡そ柔術極意秘傳に近き締業逆業の類は場合に依り締落假死し逆手にて怪我を爲すことあれば殺活法を能く心得て術を行ふべきなり。教師又は先輩の者と稽古を爲すべし。

柔術左片胸捕締圖解

左片胸捕締の圖

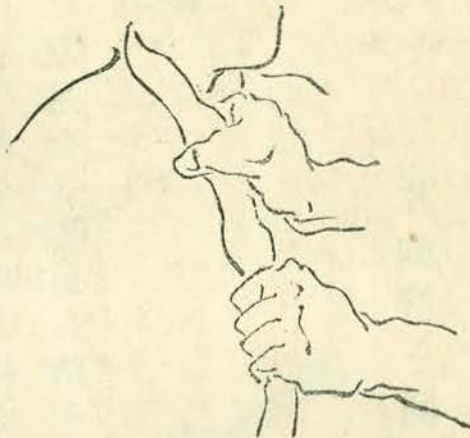


居る右襟を掴み同様に開く時は解るものなり。我は左を解か
れたれば直に右に替へ前に同じ形にて業を行ふなり。

柔術右片胸捕締圖解

右片胸捕は最初前と同じ相手の襟をば搔合せて右手にて握り小
指より拇指に力を罩めて圖の如くに爲し左手を添へて下へジリ

右片胸捕締の圖

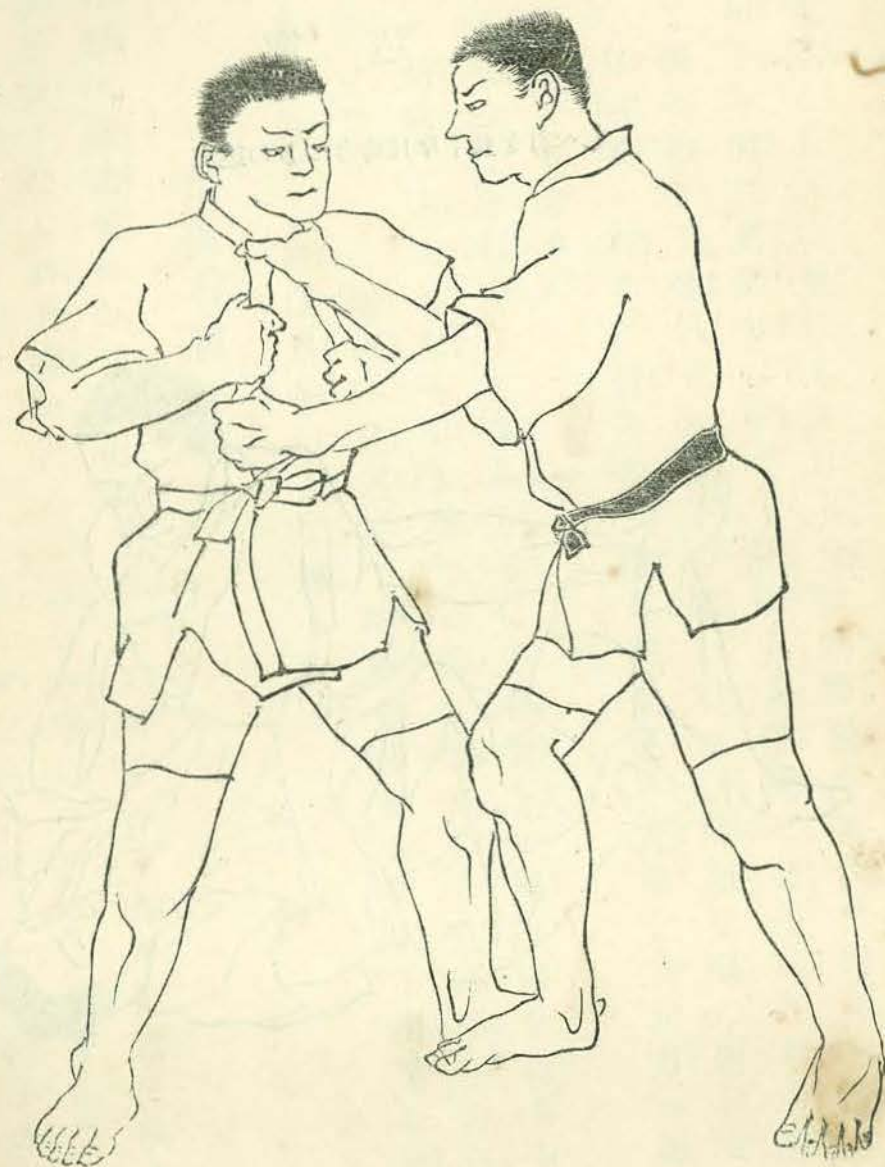


ジリも引き締るなり。
相手も是を解くには前と同じく
左右の手先にて掴まれたる襟を
持ち臂を張り開くなり圖の如く
直に解けるものと知るべし。左
右捕方の圖を能く見るべし。

柔術逆業の解説

逆業と云ふは固業よりも危険なる故に能く熟達の上にて已より
先輩の者と稽古すべし。講道館に於ても授業を専門とし次に固
業迄位を教へ逆手は教へぬ事に成りありと聞けり。故に試合等
には逆手は用ゐざるを宜しとす。唯無法者等を捕り押へる等都
て護身の時には心静にして充分術を施すべし。

解きかけ掛けたりるの圖



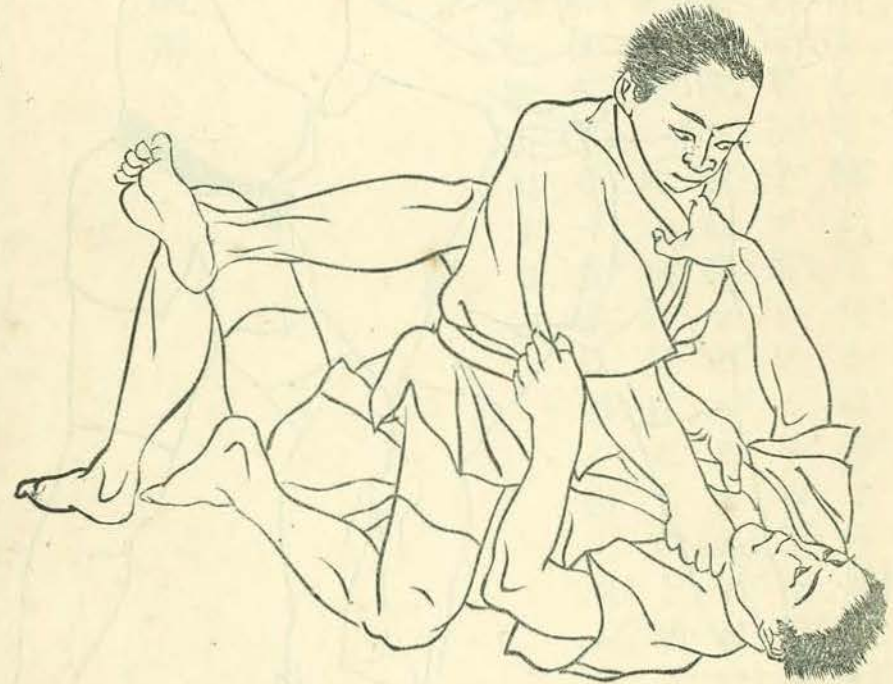
片胸解き圖

柔術片胸解き圖解

是は我が胸を搔き合はして攔まれたる時相手の眼を白眼ながら
 總身に力を單め兩手にて相手が握り居る手の下を我が兩手先に
 て我が胸を片方づゝ取り心靜に腰を下ぐると身體は一寸斜めに
 なり同時に臂を張りて開くべし速に解けるものと知るべし締め
 る方は右手が先の時は右足を一步前に踏み出し又左手が上にな
 る時は左足を一步前へ踏み出すなり。

柔術突込圖解
突込圖

突込の時きつは早いを負く打し



此の突込と云ふは他にもあれど今は臥勝負の場合を説くべし。
 是は相手の體に馬乗りになつて相手の表襟隅を右手にて取り左
 手にて圖の如く下襟の五六寸下の處を取り兩膝頭を疊に附けて
 相手の右咽喉へ右手に持ちたる襟を突き込み左手を我が方へ強
 く引き附くるなり。
 相手は私の襟を右手にて掴み左手にて右襟下を取り腰を持ち上
 げると同時に下より左へ引き倒して跳ね起るなり。我は相手の自
 由を妨げながらに襟隅へ突込みて咽喉を締めるなり。相手も起
 上る事能はざる時は負を示して終るなり。

柔術右腕挫圖解

此の形は諸流何れの派にもある形にて相手より右手を以て我が
 胸襟を取りたる時其握りたる手首を右掌にて押へて腰を引くと
 同時に相手の腕を逆に反らして直に我左腕を圖の如く相手の二

右腕挫圖

此圖は既に挫くに處なり



柔術左腕挫圖解

の腕の上より巻き込み其手先にて我が下襟を持ち右手へ持ち直して構へるなり。斯して直に腰を下に總身に力を罩め腕にて下へ押附る時は相手は耐へ兼て負を示すなり。

是れは前と同じなれど左にて行ふものと知るべし。我が二の腕を相手の二の腕の上に當て臂を下げる時は相手は我が思の儘になるなり。我が體を大きく後方へ引き下り右膝を突き左足を立てて手首の甲を我が掌にて握り内へ折込み右二の腕は押附け下腹に力を入れて圖の如く固める時は如何なる強敵も身動きも出来ぬものなり。相手は負を示して終るなり。

左腕挫臥勝負圖

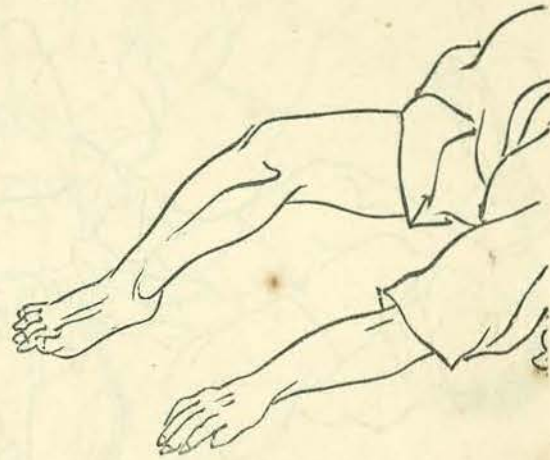
是は先手は力に込て絞る處なり

柔術左腕挫圖解



固方能力を圖く參照すべし

柔術腕挫圖解



我が左手にて相手の右腕を取ると同時に右手を添へ兩足は相手
 の咽喉の處へ圖の如くに押附け成るべく肩の方へ寄る心持にて
 兩手を引附けると同時に總身に力を入れて反り身になるなり相

柔術腕挫圖解

腕挫圖

此圖は能く寫生が出来てある

手は早く疊を打ちて負を示すべし。
圖の如く相手の腕が逆になる故一
時の力を入れて反る時は相手の腕
が折れる事あり注意を要す。

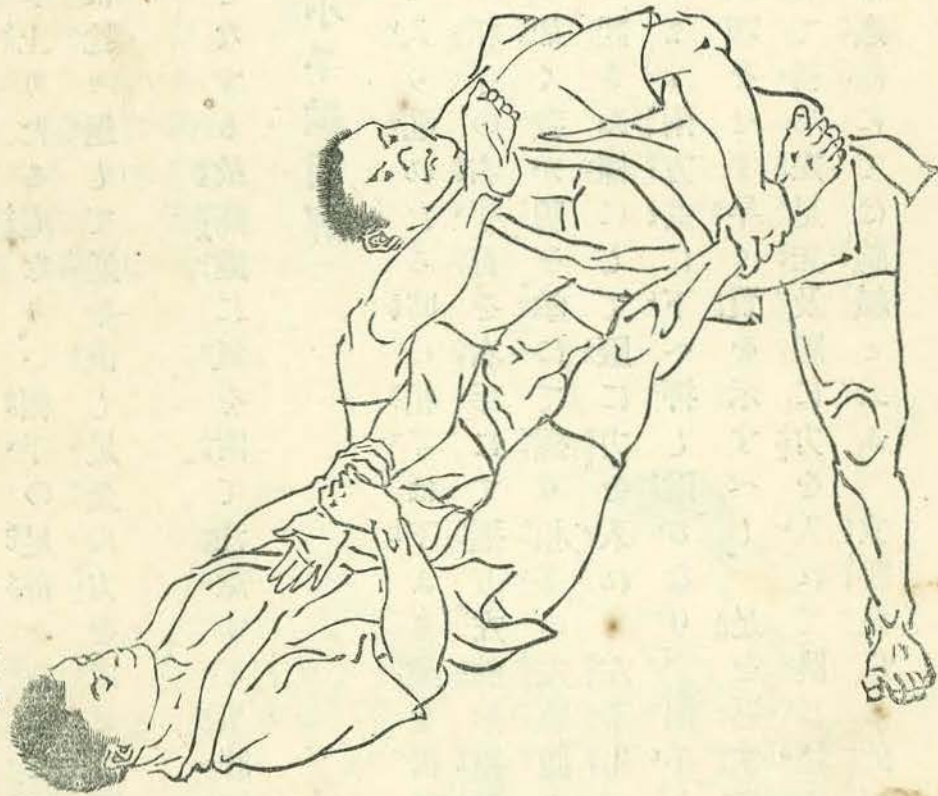
同第二圖解

同第二圖解



腕挫第二圖

此の形の腕挫は業の違ひにけだり種類あり



此圖は臀より起き上りたる處なり。相手の足首を左手にて取り挫かれたる右腕は捻り返して逆を直し足先に力を罩めて臀より起き上るなり。

此も双方共無理をなす。故痛處に氣を附て注意する事肝要なり。

柔術小手絨圖解

是れも臥勝負にて入り亂れたる時に相手は下より業を掛け心組の處を我れ先に相手の右手首を右手にて握り相手の左脇腹より上に腕下へ差込で圖の如く我が腕を掌にて握り相手の左手先にて我が手首を持ちたるまゝ兩方共に下へ押し附るなり。相手も此業に掛りたる時は無理をせず早く負を示すべし。是を返すには相手の腰帶を左手にて持ち左足先及腰に力を入れて跳ね起きれば解ける事あり。

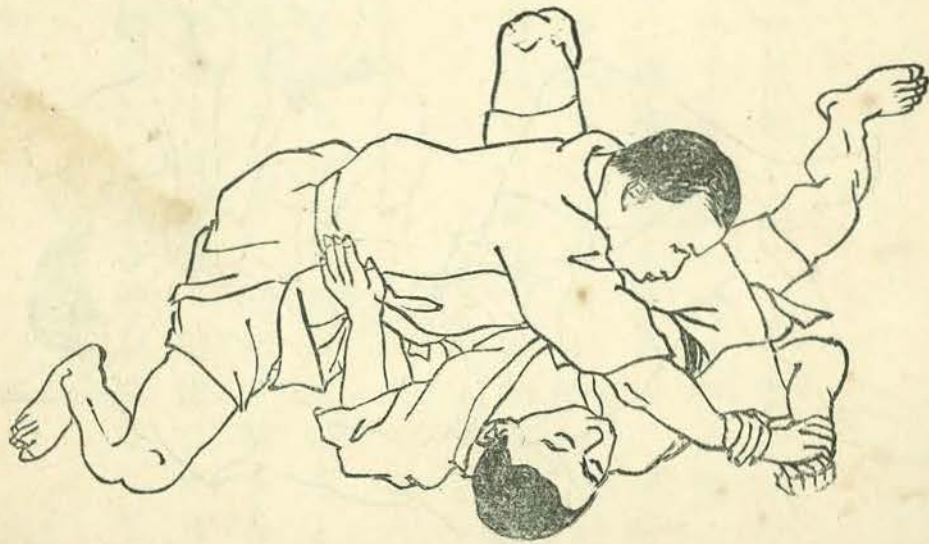
講道館にては腕絨と云ふ。立勝負にも此形あり。

小手絨圖

圖を能く参照すべし

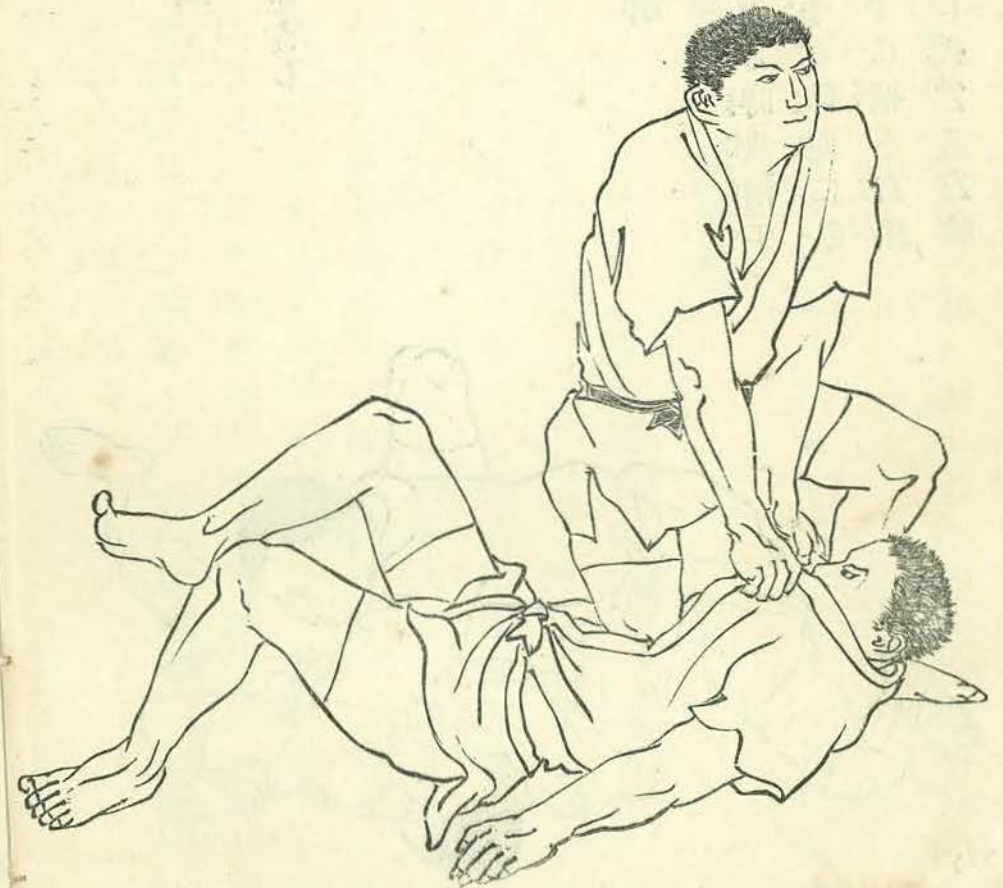
柔術膝固圖解

双方臥勝負に成りたる時我相手の右側に在りて相手の仰向に臥して居る襟元を兩手に攔み右膝頭をば相手の水月に押當て左膝



膝固圖

此の圖の如く固める時は大體ぬけられしと者る



柔術胸締圖解

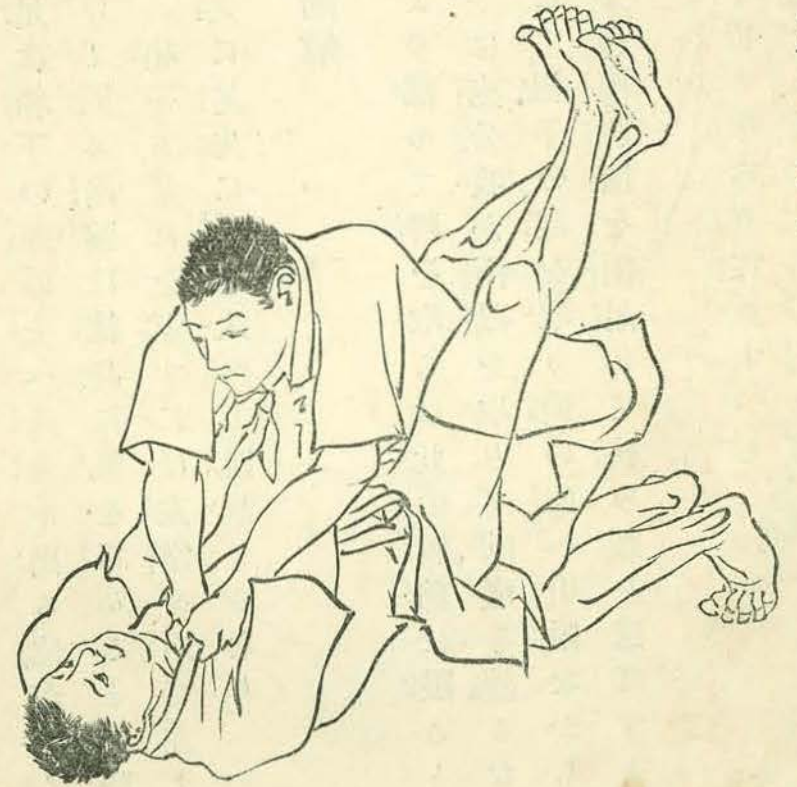
を立て四肢に力を入れ引締る時は相手は耐へ得ずして負を示すべし又圖の如く我が左足は相手の頭の先へ爪先が出る位が能く利くなり。膝頭は押附けて固め兩腕は總身に氣を罩めると同時に引締る事を肝要とす。相手も是れを返すには左掌を以て左より右へ押拂ひ除けると共に足先に力を入れて跳起きるなり。

押へ込みたる相手を下より締めて勝を取るは此の胸締に限ると知るべし。圖の如く相手は充分我が兩襟を取りて咽喉を締るなり我は兩足を開き兩手にて相手の襟を取り胸の處へ引附ながら咽喉を締ると同時に相手の兩脇腰を兩足にて挟み腰を延ばずと同時に胸を締めるなり。一時に急に締る時は骨を折る事あり注意すべし。是れを返すには下腹に充分に氣を罩め相手の片足を解けば逃れ

胴締圖

此の形は圖を能く參照し

得るなり。足緘又は絞り足とも云ふ。
柔術胴締圖解



柔術足緘圖解

足緘圖

第一圖に略す
込めしに圖入はしめながきへ



此の足緘と云ふは下より業を爲すものにて我は仰向に成ると相
手は是れに附入りて襟締等を試みんと左足を我が左脇へ突きた

柔術足挫圖解

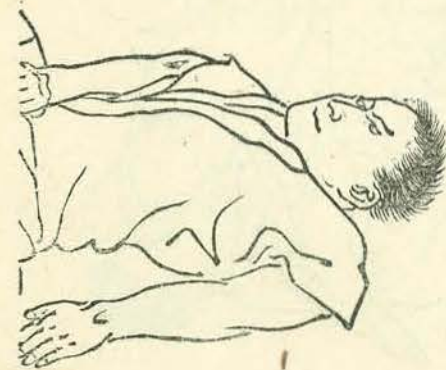
此時我右足を以て相手の股の上より廻して左足の草靡の所に當て左足先を添へて相手の左足を固めると同時に右手にて體を我が胸へ引附け左手にて相手の右二の腕を巻き込みて締るなり。是は足の門とも云ふ次第なり。

柔術足挫圖解

此の臥勝負は相手は仰向に倒れ居て足先を以て我に掬ひ拂足等

足挫圖

此の圖は能く參照すべし



を掛け来る時我は直に相手の右足首を右腕にて抱き込み左掌を向臍の處へ當て右手先を我が左手首の處へ當て圖の如く下腹に力を入れて相手の足首を逆に成る様に兩手先にて固める時は相

柔術締絞業解説
手は起上り得ず負を示すなり。

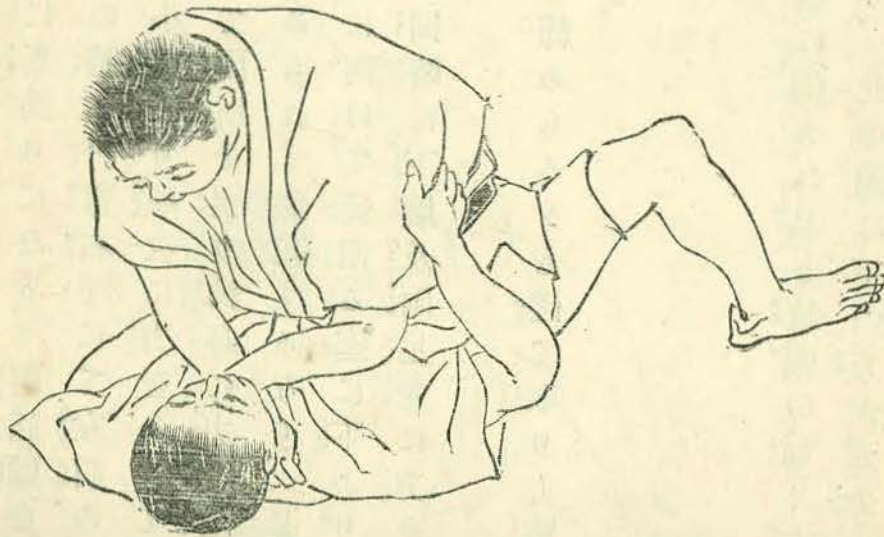
柔術締絞業解説

此の締絞業は固業よりも危険にて締めて居る内に相手がいつか呼吸が止り居ることあり故に人工呼吸術又は活法にて蘇生せしむるなり。
上達してより締業を用ふるは自由なれども初心の者は教師及先輩の者の同席無き時は逆手締業は掛けざる様心得べし。昔の柔術界にては逆締等最も流行せしも現今は一般に投業を専門とする傾向なれども流儀に依りて締逆を専門に教へる所もあるなり他流と組討をする時は先づ逆又締業を以て施す是を受ける心得が無くては如何と思ひ著す者と知るべし。

柔術十字絞圖解

十字絞圖

此の寫生本文に於て知るに今しるに既に首にゆるたり掛が手に分充りよ先指てげさりな者るたせ見を處るかかに締る



是は相手^{あひて}が仰向^{あふむけ}に倒れたる腹^{はら}の上に馬乗^{うまのり}になり。兩膝頭^{りゅうひざがしら}を疊^{たむ}に附^つけて兩足^{りやうあし}先^{さき}を爪^{つま}立て臀^{しり}を相手^{あひて}の臍^{へそ}に押當^{おしあて}右手^{みぎて}にて左肩^{ひだりかた}の襟^{えり}を握^{にぎ}り左手^{ひだりて}は右肩^{みぎかた}襟^{えり}の處^{ところ}を同じく小指^{こゆび}より順次^{じゆんじ}に力^{ちから}を入れて攪^かみ咽喉^{のど}に我が顔^{かほ}を少^{すこ}しく横^{よこ}に向けて兩肘^{りやうひじ}を張り總身^{そうしん}に力^{ちから}を込^こめて十文字^{じもんじ}に締^{しめ}る時は必ず相手^{あひて}は締^{しめ}められて假死^{かしか}するなり。是れを外^{はら}し逃^{のが}るゝには相手^{あひて}が兩肘^{りやうひじ}を疊^{たむ}に附^つけて締^{しめ}附^{つく}る迄^{まで}に下腹^{したはら}及^{およ}び兩足^{りやうあし}先^{さき}に力^{ちから}を單^{ひと}めて跳^はね除^のけるなり。

襟^{えり}を深く取^とりたる時は腕^{うで}先^{さき}にても締^{しめ}めらるゝも淺^{あさ}く取^とりし時は兩臂^{りやうひで}を疊^{たむ}に附^つくるまでに絞^{しめ}るべし。

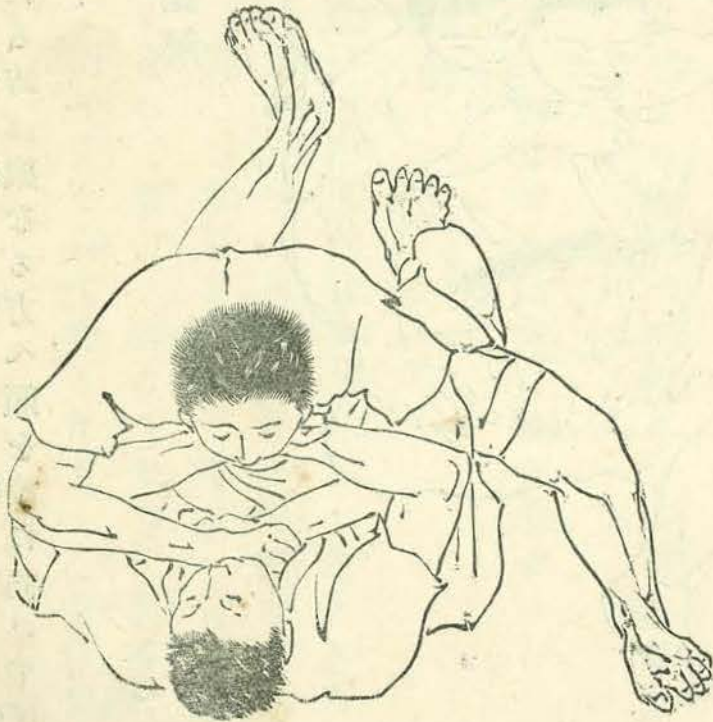
柔術雙十字絞圖解

上^{うへ}なる者は兩膝^{りやうひざ}を突き居^ゐる時は横^{よこ}に倒^{たふ}され易^{やす}き故^{ゆゑ}圖^ずの如^{ごと}く左片^{ひだりかた}足^{あし}先に力^{ちから}を入れて立膝^{たてひざ}を爲^なすなり。此^この圖^ずは下^{した}の方が充^{ちやう}分に手^て

雙絞圖

互角^{ごかく}の者の組^{ぐみ}打^{うち}ては勝^{かち}負^{負け}は成^{なり}る者^{もの}は上手^{うへ}に氣^きは付^つけしる

が取^とりあれば下^{した}の方^{ほう}の者^{もの}に勝^{かち}ある様^{やう}に見^みゆるも上^{うへ}の者^{もの}が七分^{しちぶん}の徳^{とく}あり上^{うへ}の者^{もの}は下^{した}より締^{しめ}られ又は跳飛^{はねとび}されぬ様^{やう}するなり。上^{うへ}に



綾絡締圖

乙者は右手に甲者の襟首を握り、甲者は右腕にて相手の左襟元を取り、左手は左脇下に突いて足の下に居るなり。



柔術綾絡締圖解

柔術綾絡締圖解
 二二〇
 ても下にてても充分に締めたる時は樂なる方へ顔を横に向けて居るべし。

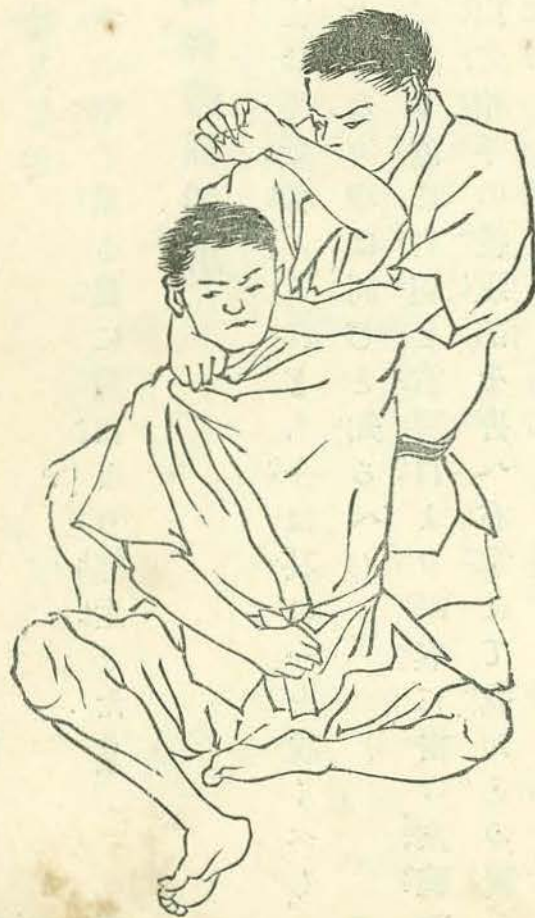
我は相手の背に廻り右手にて相手の左襟元を取り左手は左脇下へ差入れて相手の右肩口の稽古衣を握みて左膝を疊に突いて足の爪先を立て居るなり。
 右足は立膝を爲して頭をば相手の左肩へ押附けて兩臂を張り總身に力を罩めて締るなり。
 此の手に掛りたる時は逃るゝ術なければ速に負を示すべし。

柔術右後絡圖解

我れ相手の背部に廻り右腕にて相手の右胸を外より巻き込み手先にて稽古衣の紋所を逆に握み左手は可成相手の左脇の下へ寄り右肩口の襟を取るべし。然して左足を大きく後方へ引いて膝を突くと自然に相手の體が崩れて後方へ倒るゝなり。其時に右膝を立て下腹に力を罩めて兩手先を以て締るなり。乙者は前と同じ。

左後絡圖

挿畫の如く締る處の構へより
一歩後下とよく締るべし



是も前と同様なれども左右の違ひだけなり。

柔術左後絡圖解

我が左腕を相手の左脇の下より差入れて直に襟首なり又は紋所

右後絡圖

本文の如く十分に圖に參考すべし



裸體捕圖

此の掛口の圖を能く參照し



柔術裸體捕圖解

の處を早く取り右手を以て左肩の襟元を取り圖の如くし直に左足を大きく後へ引きて膝を突き立て足先を爪立て右膝を立て同時に兩手先にて締るなり。
前圖及此圖は讀者の解し易き爲に肩口より寫生したり。

此の裸體捕と云ふは手數種々あれども今は其の一を説くべし。
他は之を應用したるなり理は同じと知るべし。
我は相手の背部に廻り直に右腕を右肩口より咽喉に掛け左腕を左肩へ掛け掌を以て相手の後頭部を押へ右掌にて我が二の腕を握りて相手の身體を我が胸の處へ引附ると同時に腰は其儘にて大きく左右足を後方へ引き下ると共に左掌を向へ押附ければ相手は此れを解く術なく咽喉を締め附けられ早く負を示すべし。
左右とも能く利く捕方なれば勝手宜き方を早く掛るべし。

是は稽古衣ぬけて裸體になる時の形なり又眞揚流に裸身捕と云三種の形にもあり。
是れは如何しても解く事のできん形なるゆへためして見るべし。
亂捕の形は此位にして置又教師用には成丈明細に記べし。

柔術當身の解説

柔術を學びて初傳目録免許皆傳を許されたる者は皆殺活の法を知得せるなり。當身と云ふは唯圖を見或は假初に聞きし斗りにて猥に他人に此法を行ふも其効なきものなり故に師範より此者は初段の業有者に誘の活を許すとか五級の腕前ある故に何々の活法を許すと云ふ様に襟活法、陰袋活法を許し段級の進むに隨而目録免許と順を追ふて術の奥儀を習得するなり。されば僅か柔道の初手を學びて最早一人前の柔術家に成りたると思ひ猥に術を濫用し他人に迷惑を掛るは甚だ心得違ひの極めなり。

本書は全部參考として能く教へ能く戒めたり。此の書を常に讀み學びて其長を取り其の短を補ひて新に工風して天晴天下の名人となる様心掛くべし。

義 爲

習ひたる業をみだりにあらはすな

おのがいのちの瀬戸際にせよ

同 人

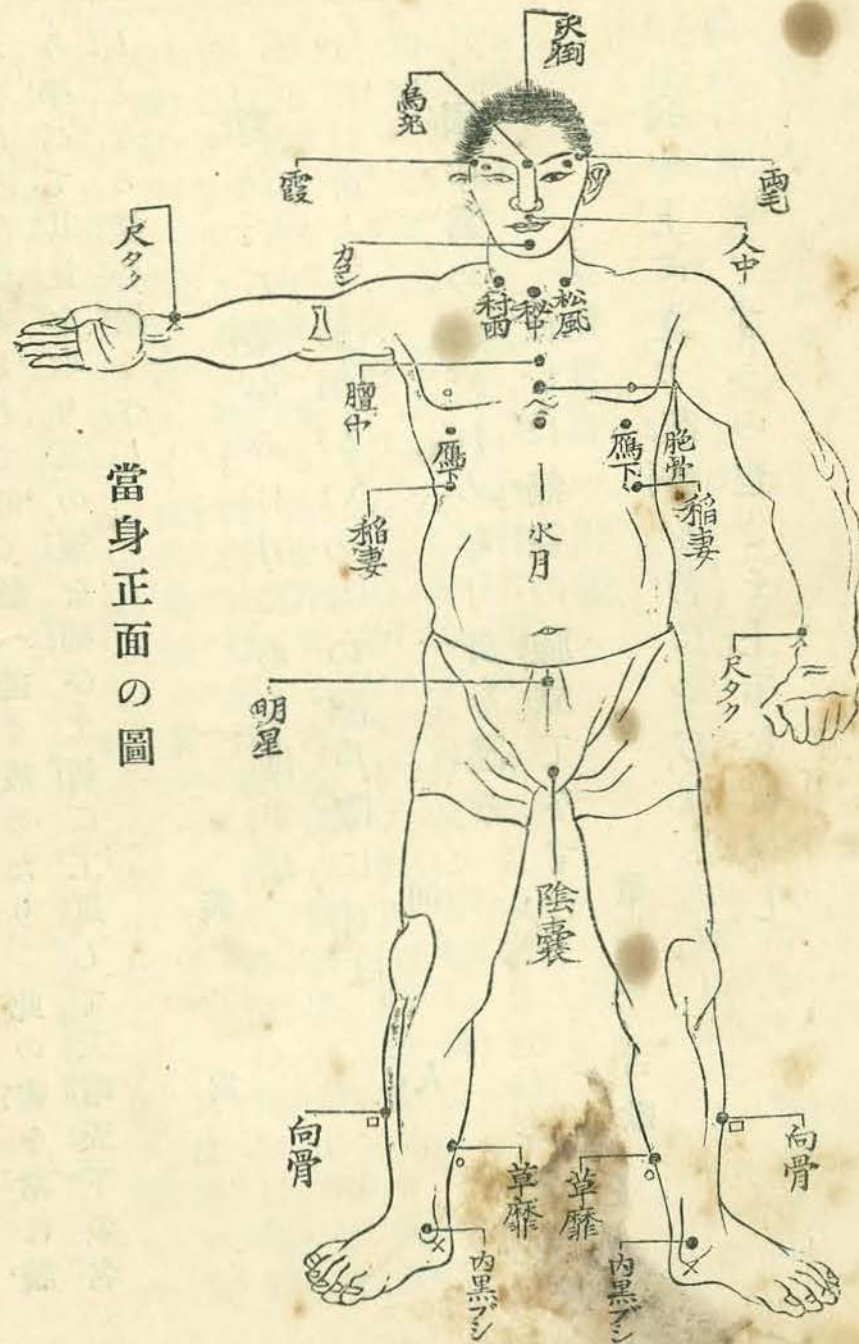
國の爲め己がためなり身を護る

ほかに無益の腕立てをすな

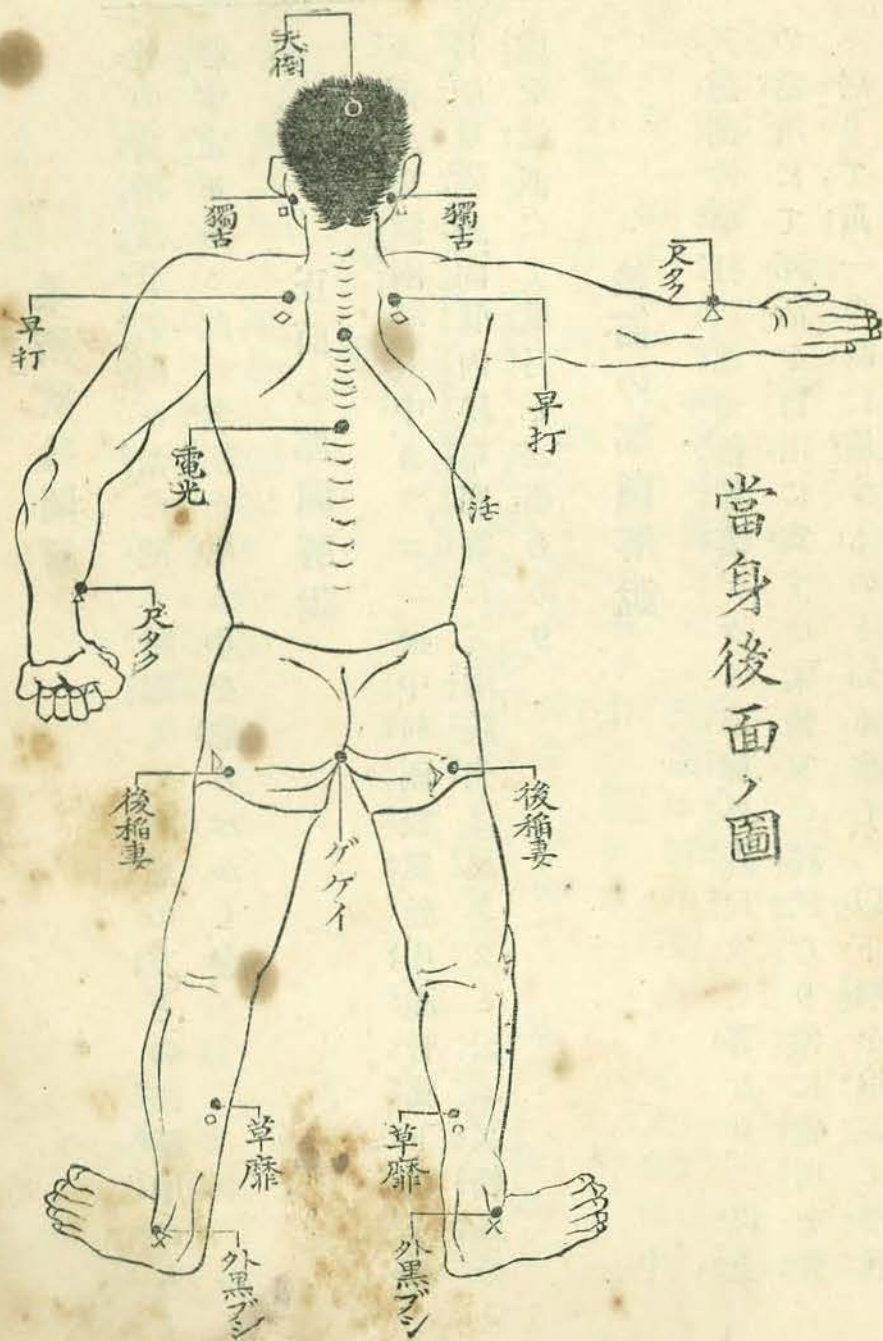
眞揚流 古歌

我が上に立つ藝術を苦にやむな

すきの道こそ上手なるべし



當身正面の圖



當身後面の圖

柔術當身圖解

此の當所及其名稱を常に能く暗誦して同志の友との談話中にも必ず定めある此の名稱を用る事を怠るべからず。

正面の部圖解説

天倒、烏兎、霞、兩毛、人中、カツコン、秘中、村雨、松風、腫中、脆骨、鴈下、稻妻、水月、明星、陰囊、向骨、内踝、草靡等にて兩腕先は尺タクと云ふ又松風の處を流派にて風月と云事もあり。

後面の部圖解説

天道、獨古、早打、活電、光後、稻妻、ゲケイ、草靡、外踝、尺タク等なり。以上の當所にて死活を自由に爲すは柔術家の秘法なり常に當所を覺へ居りて萬一の時に施すものと知るべし。以下順を追ふて解説

すべし委しくは後日教師用として出版す。

天倒

天倒及天道とは前頭骨の部を云ふ天道は頭の頂上にて天倒は小兒の俗に踊子と云ふて頭腦へ脈を打つ所を云ふ。天道を強く打つ時は頭の三大骨が開きて絶命す。蘇生の術無し。天倒を打ちて卒倒したる時は呼吸術又は誘の活にて蘇生す。心臓に達する大切なる急所なり。

烏兎

烏兎は顔の中心兩眼の間鼻の上部の處を云ふ。是を當てる時は眼眩て卒倒す。此の所より一寸位離れし處を打つても鼻血を出すほどの大事の急所なり。

人中

人中は鼻と上唇の間の眞中を云ふ極めて大事にて強く打ち當る時は呼吸術又は活法にては戻り難し顔面動脈神經鼻骨上顎骨三叉神經神經機紛擾呼吸妨害神經戟衡等の原因に依るなり是大事の殺なり必ず慎べし。

カツコン

カツコンと云ふは腮の上と唇の下之處を云ふ此の當も人中と同にして蘇生の術を施すも其効無し原因は前と同様なり。

霞

霞と云ふは顚顚骨俗に米嚙と云ふ處なり是に當る時は腦髓反劇諸神經攪亂の原因にて卒倒するなり。

兩毛

兩毛の當は前の霞の當と共に形に能く用ふるなり。此の當は兩眼尻の所にて霞より一寸下の處なり。此の處を當る時は前と同様にて卒倒するなり。

獨古

獨古は兩耳の後の處なり。是も形の時に多く用ふるなり耳朶の裏の處なり此處を當るときは耳筋の起點と後腮の間を強壓する原因にて血管及神經を壓迫すればなり。

秘中

此の秘中と云ふは形に於ても亂捕にても固締業にも能く用ふる第一の殺處なり咽喉の眞中胸骨部の上なり氣管を壓し呼吸器を

害し隨而肺臟等に其の累を及ぼす故卒倒するなり。

松風村雨

松風(風月)と云ふ流派あり村雨の當は肩胛舌骨筋の左右の處圖を見べし右を松風と云ひ左を村雨と云ふ是大事の殺なり。

膈中

膈中と云ふは俗に水落と云ふ處なり此の當は胸部胸骨の眞中にて是を當る時は神經震盪血行遽變呼吸氣絶に依り卒倒す然れども誘活心臟活裏活襟活にて蘇生するなり。

膈下

膈下と云ふは兩乳の下一寸餘四方を當るなり氣絶の原因及活法は前と同様なり。

稻妻

稻妻と云ふは浮肋骨部左右を云ふ俗に肋の三枚目と云ふ處なり氣絶の原因及活法は膈中と同様なり。

水月

水月は胃腑胸下端心窩の眞下を撃つなり神脈を刺戟するより反腦神經平衡脈の三原因にて氣絶卒倒す活法は人工呼吸術にて蘇生す是れにて蘇生せざれば裏活又は誘活にて復活するなり。

明星

明星と云ふは臍の下一寸餘四方の處を突當蹴なり大腸小腸及膀胱の二腑を劇格して絶息するなり襟活陰囊活裏活人工呼吸術にて蘇生す。

陰囊

陰囊の當は俗に云ふ睪丸を蹴り或は突き爲めに膀胱直腸睪丸交感神經系動脈等に害を受け絶息す陰囊活を施すべし睪丸環が腹内に入るあり大事に圍むべし。

向骨

向骨を當る時は唯總身に痛を感じるだけにて絶命することなし
萬一氣絶したる時は誘の活法を施せば蘇生す

草靡

草靡の當と云ふは俗に土不踏と云ふ處と圖にある如く「フクラツバギ」をも草靡と稱す處を當てるなり是を當てる時は全身に痛みを感じて倒るゝなり。

内外踝

此の踝と云ふは向骨と同事にて頭腦へ迄も痛を感じ絶命せざれども萬一氣絶したる時は誘活を施すべし。

早打

早打と云ふは針醫が肩の強く凝りたる時早打と云ひて針を打ち往々死に至らす事あり其時は胸中を摩り誘活襟活を施せば効あり之に當るときは腦髓肺及肋骨等に害を及ぼし絶息するなり猥りに針を打すべからず大事なり。

活

此の活と云ふは背骨第一骨より六七番の間の男子は左寄り女子は右へ寄りし處なり。此の活法は惣活法十三活の内一番多く用

ふる活なり。

電 光

電光と云ふは(一)背の第三推を當てる時は肺臓に感ず(二)背の第五推を當てるときは心臓に感じ(三)背の第六推に當る時は背髓中樞の激動に由て卒倒するなり。

後 稻 妻

後稻妻と云ふは圖の如き處にて是を當る時身體痛みを感じ倒るなり。此處へ陰囊活法を施すなり活法の部に委しく説くべし。

下 閨

下閨と云ふは肛門の處なり是れに關する説明は最も柔術家に必用に付卷中活法の部にて詳細に説明すべし。

尺 澤

尺澤と云ふは形に於て活用する處多し。撓腕長伸筋と總指伸筋の間を壓するなり。斯くすれば神経を刺戟し痛に耐へずして卒倒す。撓骨神経、尺澤神経、筋膜に痛を感じるものと知るべし。

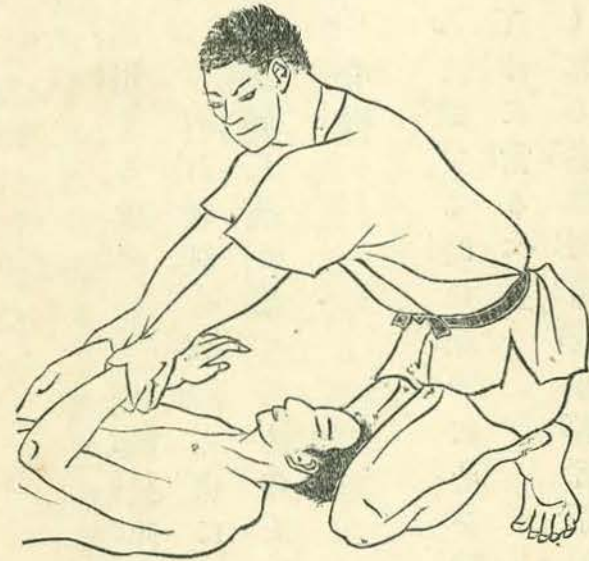
柔術活法の心得

凡そ呼吸術を活用爲さんと欲する時は第一に心を靜にし形を稽古すると同様の態度にて事に當るべし。道場に於て稽古中假死したる者は勿論絞首溺死高所より落下したる者及馬電車より落ちて人事不省となり又は産前産後血の爲めに假死したる者等は總て此の活法にて蘇生するもなり。活法を施すに當りて精神知覺運動の三機は勿論呼吸血行體溫等を能く調へて掛るべし。

工人呼吸術第一圖其の一

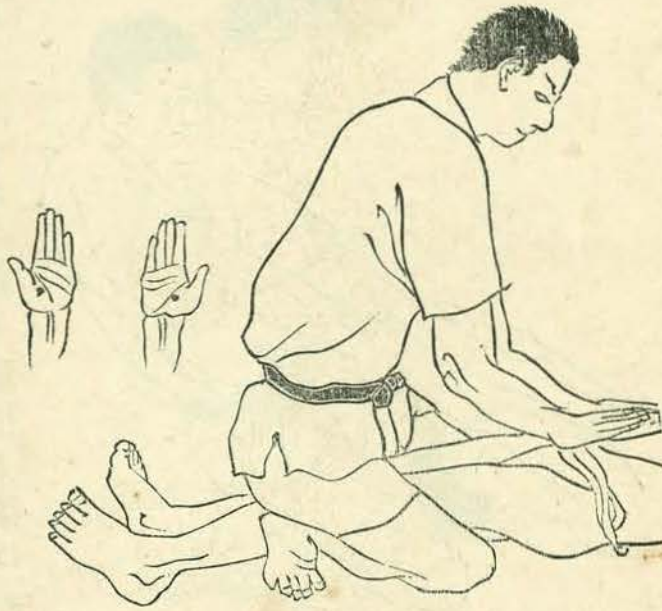
乙者は(ヤ)と手とを縮

め處るなり



假死者は全身冷へ氷の如くなり居るも脇の下に少し温度ある時は必ず蘇生するものなり。人體には八結と云ふて八つの穴あり即ち兩眼耳鼻口肛門を云ふなり。今此に人工呼吸術を詳細に説明すべし。

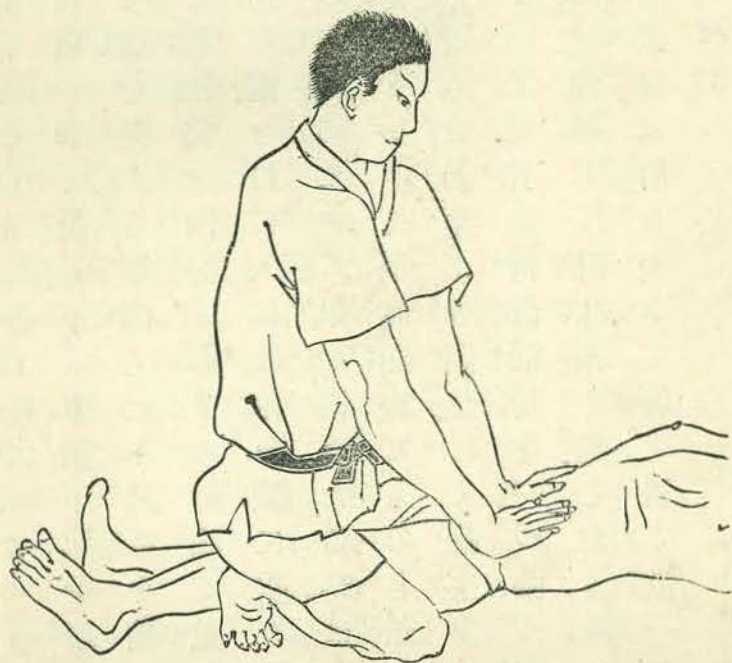
甲者は臍の下より兩乳下迄處るた上り摩でしべる摩でに處の點●の掌



此の法は近來各醫家柔術家及警視廳に於ても實施しつつあり。故に素人にも解し易き様挿畫を以て説明すべし。前にも述べた

一とす。急死は必ず骨が堅き故關節骨を折りては施術者の不覺

迄下臍りよ下胸兩と(イエ)は者甲
處るす下り摩



二の其圖一第術吸呼工人

先手兩と(一ヤ)は者乙
處るたし延引を



柔術活法の心得
る如く死者の身體冷却すれば全身堅くなるもの故甲者は假死者
の胸を兩手摩擦し全身の骨を次第に柔かになして乙者が頭部へ
廻り兩手首を持ちて我が兩股の處へ假死者の頭を圖の如く爲し
甲者は假死者を仰向に寝かせ全身を能く摩擦し柔はめる事を第

なれば能く心得て術を施すべきなり。
死者兩股の處へ勝がり甲乙者共に兩膝を突き爪先を立て甲者より乙者とかはりゝ氣合を掛けるなり即ち甲者がエイと掛聲を發しながら兩手にて挿畫の如く兩乳下より臍下迄を摩り下すなり乙者は甲者がエイと聲を發して摩擦したる其手を縮めたる時(ヤ)と答の聲を合せて數回爲す内必ず蘇生の氣味が見ゆる故其時は氷水なり其他氣附の藥を口に入れ冷水を顔に吹き掛けるべし素人の蘇生法は此に限るなり。氣の附きたる時は靜に床を取り寢かすべし其時に軒をかきて長時間寢るものと知るべし。稽古中假死したる時は五六分乃至十分間位にて蘇生するなり氣が附きたるときは拳を以て死者の背部活所を一つ強く打つべし。又絞首は二十分位の間を経過して蘇生術を施したる時に必ず前に述べたる如く廿四時間位は軒をかきて寢て居る故一二時間毎に度々名を呼びて起すべし。

柔術教科書

食物は牛乳を熱くして與ふべし地方にて牛乳無き所なれば薄き粥を與ふべし。
施術者は精神を死者の身體に集中すること即ち熱心事に當るが肝要なり。

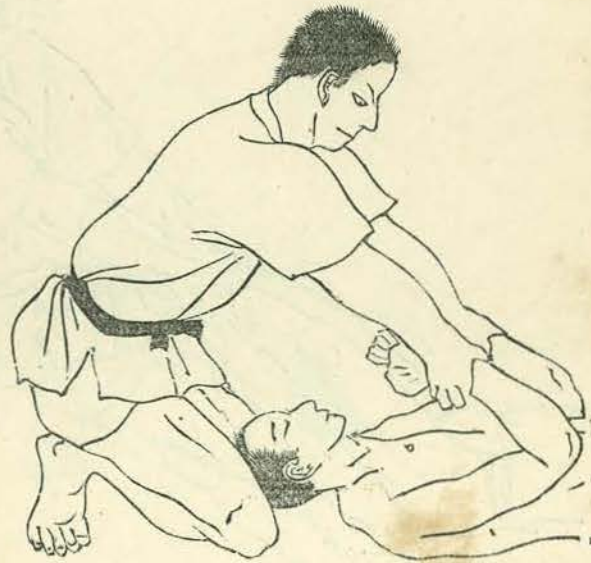
人工呼吸術

人工呼吸術を以て蘇生爲さしむるには輕き假死者は前の如くに容易に蘇生すれども重き首絞り等は術者が充分に氣合を罩めて假死者の指を延ばして甲乙兩者共に仰向に臥して圖の如く兩手首と兩足を持ちて双方聲を揃へて(エイ)と云ふ時には兩手足とも縮める事(ヤ)と云ふ時には又引延ばし死者の顔を見ながら斯くすること數回行ふべし頭の方に廻りし者は死者の頭を兩股にて耳に觸れぬ様に挟み圖の如く兩膝を突き兩爪先を立て全身に氣と力を罩めて術を施すべし。又乙者は足の方に廻り是亦甲者

柔術教科書

と同様の心得にて掛るべし。輕き假死者と云へ共氣と力の罩ら
 ぬ時は術を幾度施すも其効なし。絞首其他の變死者を見て驚き
 術を施すに當り周章るべからず斯る時は術者水を呑みて心を落
 附て然る後術を施すべし。又蘇生すべき者も術者の不注意にて

ため縮を手兩と(イエ)は者甲
 處る



工人呼吸術第二圖其の一

りな處るた縞を足兩と(一ヤ)は者乙



二の其圖二第術吸呼工人

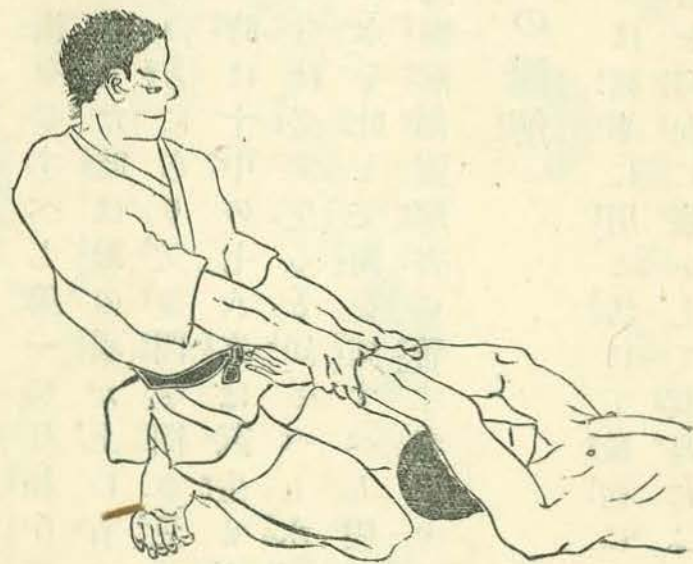
りな處るたしばの引を足兩と(一ヤ)は者乙

人工呼吸術

復活せざる事あり。活法呼吸術は十中八九迄は必ず蘇生するなれば充分注意して掛ることを心掛べし。然しながら永く病氣し



處るたし延引を手兩と(イエ)は者甲



も蘇生し難し。たる者及病中にて絞首其他の事變にて假死したる者は活法にて

呼吸術の秘法

既に大略は前にのべたる通りにて其効を見るもあり又此術を施すは甲乙者が手早く術をなすべし第一に死相中に眼中の色を見るべし他殺の首締をなした時は眼の環が上に有り又自身に首を絞る者は眼の環が下の方にあり又後門を開き見て假死者が閨口より大便をなし居る時は十中の七八迄は蘇生せず成共早き時は其効あり十分位迄の分は必ず生ると知るべし水死も同事なり水死者は第一に吞たる水を吐して術を施すべし假死者の時間は前と同事此の施方は柔術解剖圖解書に著す者なり。

誘活法の圖解

此の誘の活法と言ふは諸事に用る活にて最初に許す處の活にて圖の如にして假死者を仰向に寝かして其身にふれぬ様に又がり

圖一 第活誘



誘活法を施す處の實地圖なり指
先を第一骨より下六七骨の挿畫
通りにして點線の處を打處なり

誘活法の圖解

胸部をなで四肢を揃て靜に抱起して第一の高骨に中指を押當第六七部の骨の左側を挿畫の如くに掌にて強く當るなり其時に中指先を放べし此時術者は總身に氣を満て我が生氣を假死者に移し其効能實に神の如し此の形は極舊式なるも未だ此形斗り用ふる流義もあり。

誘活法第二圖

兩掌を以て兩胸の乳下の處の字なりに能く摩りて後引上る處なり



故に著者は此に第一誘の活法として著す處なり。

誘活法第三圖

誘の活法を用ゆる處にして(エイ)と聲を掛る處なり



誘又の活法圖解

此の活法は假死者を仰向に寝かせ兩足を揃へて靜に半身に起し術者は背部に廻りて右膝頭を背骨中部に押し當て左足爪先をば左斜に踏み出して圖の如く構へ假死者の活處の二三寸下の處に我が右膝頭を當て兩掌は第三圖の如く能く胸水月の處を摩擦して死者を少しく俯向かせ(エイ)と發聲と共に右膝頭は活處迄押し上て強く當て其切に右爪先に力を入れて術を施すべし兩手を兩脇の下より引上少しく仰向に爲す心持になすべし。

此の活法は何にも一番多く用ゆるものなり講道館にては初段に成らば此の活を許すなりと又町道場に於ては五級になる時は許されるものなる故折紙の價值は充分にあるものと知るべし。

充分に練習して後術を施すべし銘刀も切手が未熟にては木劍も同様なりと知るべし。術を施すに當り假死者の肛門を開き見る

べし締り縮まり居る者は必ず此活法にて蘇生するものなり。又口に手或は小鏡を當て息が少しにてもある時は早速に術を施し一回にて利かざる時は何回も施すべし。絞首等は手早く死者を下して仰向に寝かし其全體を摩り繩紐の跡附きたる處へは水にて能く摩り八穴を見て術を施すべし大便を洩らし居る時は術の効無きものと知るべし事二重に書きあるも大事の方法故くどく記す處なりと知るべし。

襟活法圖解

此の襟活法と言ふは術を施す迄は前と同にて第一に死相を見る事八穴を調て全身を能く摩りて其上にて靜に抱起して左手にて假死者を圖の如に抱かゝへて我が右膝頭を突き爪先を立て左足は死者の横後に立膝をして挿畫の如くに右手先をなし(中指に人指を重て)小指と紅指は折て親指と外二指に充分に力を入圖にし

圖 法 活 襟

以を手右處すめしを方施の法活襟
りな處る當の指に脇兩の星明て



めす通りに構て術者は總身に氣を満て口を結びて明星の處に右
の手を當我が生氣を假死者に移やうに(エイ)と掛聲を發するとた
んに左手を前に死者を屈むやうになすと同時に下より臍の處迄
突込むなり充分に臂を張り下より死者を覗き見上る心得にて術
を施すべし。
又誘活法を施して尙又襟活を入る事あり此の誘の活と襟活は二
種の活連絡てあると云も可なり淺山一傳流の活は一種にて只一
つ有のみ巻中に著すなり。
此活法を級段によりて教師は次第に許す先生もあり眞揚流
には十三活法有り中には十六活法ありと言ふ先生もあるが此活
法と云は諸先生の極意の許の物の内にて巻物を給與て段級を定
める事もあり。
尙此の明細は教師用及柔術解剖圖解書に著すなり餘言

陰囊活法圖解

陰囊活法とは俗に畢丸活の事なれども前の襟活を襟活と云ふ方が紛らはしからざれども昔よりの云ひ慣はしなれば矢張り襟活といふべし、是は高き所より落ち畢丸を腹内に入るゝ事あり又稽古中過つて蹴込まれたる時に施す活法なり是を施すには假死者を抱き起して第一圖の如く構へ術者は死者の背部に廻り下腹に力を入れ眞之位第二の構を斜にし死者の兩脇の下へ兩手を差し入れ抱き上げては落す事六七回行ひたる後死者の片手を持ち上げ圖の如く右足の●點の處にて靜に後稻妻の處を蹴るなり。然して又元の如く抱き上げては落したる後襟活を施す時は畢丸が元に出るなり其の機に乗じ活を施すべし意外に此術は心安けれど六ヶ敷點もある故實地に出會ふ時は能く覺へ置くべし又往々畢丸を片々潰す事あり最も大事の術なれば柔術家は常に歩

するも陰囊を圍みて氣を附けべし第一圖より第二圖の如く數回施術したる後又死者を靜に仰向に寝せて我は其兩股の處に跨り兩手先の指を組み合せ兩肘先を死者の臆中の兩脇に押當て右膝を突きて爪立ち左足は立膝を爲し下腹に氣を罩めて(エイ)と聲を發すると同時に死者の首を前へ持ち上げ兩肘を當るなり此活を施すも又襟活を施すも差支なし數回も施して其の効なき時は死相を見るべし最も死相は術を施す前に見るべきものなるが手遅れとならざる様術の方を先に施すなり此の相見の概略を記すれば第一卒倒者の眼瞼を開き見るべし眼中の瞳孔俗にひとみと云ふ處が白色に變ずる時は蘇生の効なしと知るべし又唇を開き見て元の如く成らず開きたる儘なれば蘇生の見込なしと知るべし。

圖一 第一法活囊陰



抱かへて上げかけの處
の圖此の様にて六七度を
上たり落したりする癖へ
なり

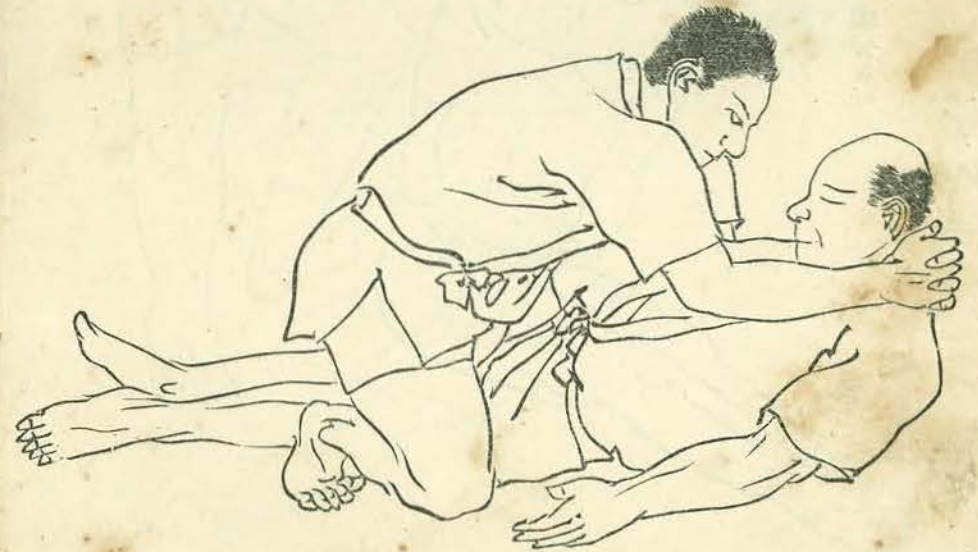
圖二 第二法活囊陰



後稻妻を蹴込居るの圖なり●點に氣付るべし

圖 三 第 法 活 囊 陰

を首て當押を肘兩が我に脇兩の中臆
る居てし合組先手りな處す起引に前

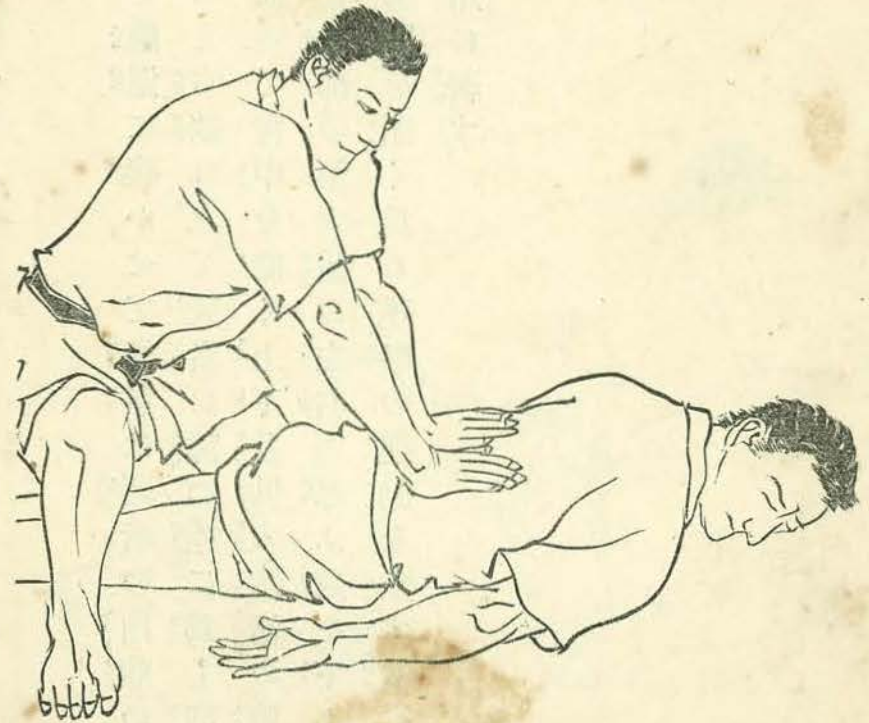


裏活法圖解

此の活法を施すには死者を腹這に寝かせて術者は死者の兩膝の
邊に跨り左膝を突き爪立ちて右膝は立て死者に障ぬ様に爲し我
が全體に力を罩め兩掌を揃へて背中を能く上下及肺入惣活の腹
部を摩擦し而して兩乳の後背部の第六髓の左右と思ふ處を下よ
り突上るなり電光の處の肺肝を開く爲め呼吸の運動を爲す故に
蘇生するなり詳細は教師用に著す。

裏活法圖

此圖は死を解ける者へ向ふに臥ししかば
部を摩擦して是を俗に活背と云ふ



淺山一傳流の活法



抑も此活法は淺山一傳流教師金子勝平先生の教傳にして手數は
唯一手にて蘇生する活法なり著者未だ實地に施したる事なけれ
ど是は死者を左手にて抱込み右手五指を揃へて水月下の處へ當
て右足の小指の方を明星の下の處へ押し當て左手にては活所を
打ち此の三つを一時に氣合を入れて施すなり(二イ)と發聲と共に
前の方法の如くの術なり假に此方法は一理あり柔術解剖書に實
地明記すべし。

淺山一傳流活法

仕方の圖畫は本文に參照すべし



末書に加へて
此の書を著について義爲數年間にして今度教科書を專習科に加
りたるを幸に新故の老先生の名言實地の研究として尙助技を四
五名に依頼し畫工を奥村義三氏を主任にし是又二三の助技を加
へて引書も用ひ古來の秘傳を集て更に青年の輩にも現今の諸先
生の參考生徒の讀本として數年の巧にてようく冊子に綴る事
の出來上りて成りたる者なれば讀者諸君は今此連名の先生に附
て教授を受たるも同じ事なり其人の概略を記せば左の如し

故久富鐵太郎、金谷元良、横山作次郎、高木芳雄、金子勝平、今泉八郎
市川大八、井上敬太郎、大竹森吉、吉田千春、水谷、今人皆傳、神保信重
五世磯又衛門、八谷建三、中村半助、指田吉晴、奥田松五郎、尙此の本
に對し技者をして田中宗吉、吉田、津田、山崎
の各免許の先生を以て著したれば此冊子は古今の名人の手を以
て教を受たるも同様なる珍書なれば讀者は其廣德なる事情を察

して常に勉強有らん事をば著者の心切なる所をしり玉へ是に本
末にのこす處なり是に引續き二三年の内に追々著す者なり

大正元年十月中旬

免許井口義爲記

活亂捕
柔術教科書 終

大正元年十月十日印刷
大正元年十月十四日發行

柔術教科書奥附

正價金壹圓貳拾錢

東京市神田區錦町一丁目十三番地

井口松之助

東京市小石川區久堅町百〇八番地

萩原勝次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

博文館印刷所

東京市神田區錦町一丁目十三番地

魁眞書樓

東京博文館 東京東京堂

大寶文館 全國至所有名書肆



著作權
發行者兼

印刷者

印刷所

發行所

大販賣所

全國至ル處ノ書籍雜誌店ニモ賣捌候也

東服大岡淺有良東新鍾大金北松目至嵩大上三二中勉

三 誠山 屋省松西強
松書 書書

全求屋庄文
體雄光鋒丘旦

誌店閣吉衛堂閣堂堂堂堂堂堂館堂店堂堂店店堂堂屋堂

大 阪 市 京 都 市 名 古 屋 市 横 濱

天有淺樞星百川寶山松川東石鈴藤岡奧森矢三杉青名

野見	田野	架瀨	文中	田合	枝川	木谷	田田	精部	宅木
弘隣	文	堂	館巖	文律	修崇	菊金	福	本	嵩
集	昌	勸星	書	庄	留	文	次	正	山
			書松	港				美音	

堂堂堂助堂店店店堂助堂房吉館館郎堂堂社藏要堂館

留者市 熊本 鹿兒島 同大分 長岡 同千葉 仙臺 長野 松本 諏訪 同金澤 高岡 朝日 戸神 館函

川松小魁一菊長吉久甲目覺多藤西亭水宮宇學山日

陽 都 見 田 記 永 崎 二 島 瀨
韓 阪 澤 原 黑 麥 田 崎 竹 浦

籍海宮日琴	屋上	金幸	金堂文六
株式	書書書書	治光	次文書盛
書	書田	書	書

會
房社堂店堂堂店店店店屋店平堂衛郎堂店舍堂助店

殺活自在
接骨秘傳
柔術極意解剖圖鑑
近刊

諸大家先生題字序文
免許柳松齋井口義爲著述

本書は最も著者が多年間諸先生と交際し研究會等見聞なしたる事珍說奧義柔術家秘法形亂捕廳所接骨方諸死活法に解剖講義に挿書を以て説明し秘術法全體に圖書加へたれば諸先生參考生徒の心得に至る迄も著又藥種活法古來の傳言名人の發達格言を集め義爲一生一代著書と云は此冊子に残し滿天下の武士道式を廣く教へて性來に我が志氣を講讀諸君に思を残す爲一本に綴りたれば發行の期日を待て求め給へ

柳松齋 井口義爲先生著

獨習
圖解
劍舞大鑑

附居合
法圖解

全一冊
四六版頗美本
正價金卅五錢

本書は井口義爲先生永年苦心の結果居合の型及劍術の型都而眞の武術的原理より割出して劍舞の手を附て其様に圖解を加へて最も平易に解しよく點線蔭圖を以て此書を一見しても獨習自在に覺られること鏡の如くなり故に此書の奥義を極めば忽ち勇壯活潑心なふ精らす神を起して倭鬼を悟る實に天下無比の好劍舞獨習の良書也 發行所 東京 博文館 東京 堂

法學士 大原彌一郎先生 合著
辯護士 齋藤孝治先生

新舊 対照 ポケツト 刑法

總クローズ金文字類美本
縦三寸横二寸三百餘頁
正價 金 三拾 錢
郵 稅 金 四 錢

參照 大審院判例要旨

本書は四、五、六號の活版を以て上等紙に印刷したれば極めて鮮明なり本書は四方の主人は勿論小僧に至り迄も常に心得居るべき事は云迄もなく故に輕便を主として大冊を懷中本として新舊の刑法を對照とて明かに解し得べき珍書なり

小川直子序文 中島春郊先生著

家庭 料理 儉 約 美 食

菊判 頗美製本
正價 金 卅五 錢
郵 稅 金 六 錢

此書は表題の如く來客其他日用に便する僅なる費用を以て即席に美味なる料理を製法し得る方法にして春郊先生の好に令嬢靜子が實驗の上にて最も平易に出来る殊に親切に書き綴りて各奥方等の臺所調法とも云べき者なれば男女にかゝらず缺べならざるの最も良書なり

直眞影流十五世 齋藤明信先生著

直眞 影流 劍術 極意 教授 圖解

契版總クローズ美製
正價 金 壹圓
郵 稅 金 八 錢

本書は齋藤明信先生が直眞影流劍道の形に挿畫を加へて眞の劍道之教を各派の先生及生徒に至る迄手を以て教へる如くに圖畫に説明を附て何人にも圖を觀たるばかりにても劍術の形を獨習し得られる者なり其目錄法定之部○八相發破形挿圖の數式十三圖○一刀兩斷形十二圖○右轉左轉形十七圖○長矩一味形二十圖

●鞘之形部龍尾左右形圖左十四圖右十圖○面影形左右形十五圖○鐵破進退形左右十六圖○松風形左右十六圖早船形左右十一圖○曲尺形十三圖○圓連、刀連、體速形十三圖

●袋鞘之部小鞘之部○風勢形十餘圖○水勢形五圖○口切先返し形五圖○鐔取り形六圖○突非押非形七圖○圓快形六圖○双挽眞劍之部挿畫第一本目より第四本目迄に四十六圖以上也

右目錄を一讀しても劍道の心得ある者は必も一本を求めて著者の心を込て發行者の熱心なる事を知れ

全國一手大賣捌所

日本橋區本町三丁目 博文館

發行元

魁眞書樓

高等女學校裁縫教授 高橋ルイ子著

廿世紀裁縫自在

菊判倭綴全一冊

正價金三十八錢

郵税金六錢

本書は表題の如く初心者にても教育の參考にも相成新案裁縫手引草とも云べき者にて手を以て生徒に教へる如く圖解をほどこしたれば先生が永年の經驗のものを一冊にして女學生及び教員等の爲になる珍書と云べき者也

東京弓術講習會編纂 (第四版)

諸流 弓術極意教授圖解

菊總クロース製全一冊

定價 金七十錢

郵税金六錢

本書は各派弓術家の奥儀極意を集めて其上に古書及歷史上弓術起より弓術の解説に圖解を以て先生等の心得へ亦中學校以上の日本歴史の參考にもなり弦方の圖解古式の禮法等迄を明細に圖畫をもつて記したれば一本を購求して此書の心妙なる事をしれ

東京博物研究會編纂

和洋
四季
草花培養圖解

四六版總クロス類美製本
挿畫凡そ二百種 石版數十度
刷の極彩色の口繪にて廿七葉入
正價金八十五錢 郵稅金六錢

本書は、よんで字の如く草花を描いたものではあるが、全部彩色をして、草花の美を照會すると同時に往々世間に誤られたる名稱を、これによつて正しい名稱に改めて戴きたいのが此の書の眼目で、終りに栽培法、各種の特質など記述したのは、一層この圖解を美ならしむるの目的に外ならないのであります、學校園設置用、家庭園藝用として愛讀せられんことを、切に希望のあまり一言はしがきす。

正二位勳一等侯爵 蜂須賀茂昭閣下題字
正四位文學博士 本居 豐穎 先生題歌

意通 考案士 中島 春 郊翁 著

賜天覽

庭造法圖式大鑑

大本類美製箱入全一冊
堅九寸餘横一尺二寸五分
口繪寫真前田侯爵家庭
全體石版彩色數度刷
正價金三圓五十錢
郵稅內國一冊金十六錢

本書の著者中島先生は舊金澤藩前田侯爵家の御庭園を造られたる家元にて古來より同家に秘藏せる圖面を今回世に公にせるものにして近時諸國に於ける庭園及我邦有名なる庭園並に眞行草を蒐集し庭の大小中の分部に符點を施して造園家をして將に垂涎せしむるの珍書なり大高評を博したる良本

俳諧正派會長泉々居穿井先生閱
指頭庵主人服部耕兩先生著

應用
てにをは俚言解

四六判美本全一冊
紙數百七十餘頁
正價金三十錢
郵稅金四錢

本書は北總の俳傑指頭庵主人服部耕兩先生が夙に明治の俳迷の振はざるを愁ひて俳諧正派のために心血を注ぎて是が編纂を企て幾多の歲月を費して初て大成す即ち冠字するに應用適例の四字を配し名けて天滿源波俚言解と云ふ材料書類豊富にさてしかも能く其錯雜を來ざるのみならず經營縱橫秩序を犯さず唯一絶好の書也蓋し斯道に志ある者は素より據て來るの淵源を知らんと欲するものは正に机上一本を備へざる可かざる也

竹田畫譜

全貳冊

小本各康熙

竹田畫譜後集

全貳冊

綴り頗美本

對山畫譜

全貳冊

正價各金廿五錢

靄厓畫譜

全貳冊

郵稅二冊金四錢

右四書は彩色刷にして體裁頗美製紙書樓白漫の珍書なり